

543-55



1200501503847

3

5











東廛

西廛

遊

談記

全全





緒言

本書は橘南谿の著、西遊記五卷、續西遊記五卷、東遊記五卷、續東遊記五卷及び北窓瑣談前後編八卷を收む。

南谿、姓は橘、名は春暉、宮川を氏とす。別に梅華仙史の號あり。京都の人、醫を業とし、傍ら文學に通じ、音律を明かにす。漫遊は特にその好むところ、天明二年の秋より翌三年の秋にかけては山陽を経て九州及び四國をめぐり、四年の秋より六年の夏にわたりては東海東山北陸の諸州に遊びぬ。その間に見聞せる奇事異聞を録したるもの、すなはち東西遊記正續編なり。文章平淡にして技巧を弄せず、讀み去り讀來る中に言ふべからざる妙味を感じしむ。北窓瑣談は隨筆なりと雖も、文章の妙亦必ずしも



東西遊記に譲らず。唯憾む、版本いづれも假名遣竝に漢字の用法等に頗る誤謬の多きを。これ或は筆工の誤にて、原著者の關知せざることなるべし。

今本書を出版するに當りては、つとめて各漢字の送假名を一定し、句讀點の統一を圖り、假名遣を正し、漢字の誤謬の著しきを改めたり。その中、送假名、假名遣及び漢字の改訂は、前後の用例を考へてその正しきに従ひ、前後に用例の乏しきものは特に原文を首書して參照の便に供せり。語法に關しては一も改訂を加へたるものなし。

明治四十三年十月

校訂者

永

井

一

孝

### 東西遊記序

石州別駕橘君、以攻醫漫遊四方。足跡殆遍天下。其所記載、率皆修治之案、經驗之方、而政有嘉績、則必咨焉。人有卓行、則必訪焉。及登名山、覽古蹟、歷問殊俗、搜采異聞者數十卷、名曰東西遊記。好事家往々傳誦之。至有謄寫而藏以爲帳中之祕者。書賈因屢請刻。君終弗肯久之。一日俄語余曰、此書之行非吾意也。何者、蓋家業著述、猶未脫稿者巨多。而首用兔園冊、木、恐致有識之誚。而會坊間射利之徒、有謀私刻。於是不獲已、遂授剞劂。將奈之何。蓋爲吾書一言、以辨於卷端。余乃竊謂曰、夫橘君爲人、志於道、勵於行、旁好唐詩、及國風、考鐘律、試星度。其爲醫也、固亦隱乎小伎爾。而況此書就其中、特又緒餘者乎。然善讀是編者、可以興起、感發、秉彝之良心、則是還元氣也。破井蛙之見、釋夏蟲



之疑、則是起沈痼也。其醫人之效亦捷矣。不必事於刀圭間。此豈與世之紀游  
蔓詞彌文、徒資風月之談、供觴詠之具而已者、可同日而語也哉。君其勿多讓  
焉。是爲序。

寛政乙卯秋八月

愚山 松本 慎

東西遊記序  
史遷が跡を追て、名山大川を探るは、丈夫のしわざなるべし。しかはあれ  
ど、官ある人は身を意にまかせず、處士は路費にとほし、いかにともすべ  
からずとなん、謝肇淵がなけきはさることなり。はた是にくはふるに、い  
とかたきことなんかすかすあるべき。まづ心剛に、身健ならざればあた  
はず。舊記をしらざれば勝地の感なし。文筆にともしければ録すべから  
ず。かく取あつむることのかなはねばにや。こゝにはさる人もしるせる  
文もいとまれなり。むかし郡縣の政なりし代、國々の守掾などにてくだ  
れりし人々、歌よみしたる所々は、名所とて今も聞ゆれど、時うつりて、あ  
りしにもあらぬが多く、國々の風土記といへるも大かたにほろびたれ

東西遊記序

史遷が跡を追て、名山大川を探るは、丈夫のしわざなるべし。しかはあれ  
ど、官ある人は身を意にまかせず、處士は路費にとほし、いかにともすべ  
からずとなん、謝肇淵がなけきはさることなり。はた是にくはふるに、い  
とかたきことなんかすかすあるべき。まづ心剛に、身健ならざればあた  
はず。舊記をしらざれば勝地の感なし。文筆にともしければ録すべから  
ず。かく取あつむることのかなはねばにや。こゝにはさる人もしるせる  
文もいとまれなり。むかし郡縣の政なりし代、國々の守掾などにてくだ  
れりし人々、歌よみしたる所々は、名所とて今も聞ゆれど、時うつりて、あ  
りしにもあらぬが多く、國々の風土記といへるも大かたにほろびたれ



ば、其由もまたしられず。中頃に能因西行の兩法師などこそけしかるさかひへも執行せられぬと聞ゆれど、紀行こまやかならず。後には宗祇法師あれど、是も名だたる所計をあらくしるされたれば、其けしきさへ明らかならず。まして風土人情をや、わづかに熊野山中の小兒が米をしらす、越路の雪に妖怪のあらはれしなどいへるたぐひのみぞ、僻境のおもむきをしるのよしにはありける。こゝに此東西遊記は橘君子の著す所にして、其質かのかたきことどもをかね備へて、危を犯し、嶮を凌ぎ、年月を重ね、實をもて録するところなり。其勇其志感ずるにあまりあり。はた仁義を基とせる物から、所々忠孝の人の行狀を記し、政の善惡をもおもはしむるは、一言半句の間にも人を勧るの微意みゆるなん、世に希有

なる書といふべし。さるにある人のいふ、此君子、人の爲にはかるはよし自かへりみるにはいかに。其山川跋涉の間、幾たびか死地に入られたりしは、王陽がにくむ所、命をしるものは巖牆のもとにたゞざるのいましめにもたがへりと予いふ。然りしかれども、志ところあるものはまたかからでは其志成べからず。孔夫子の宋に窘み、陳蔡に厄し給ひしも、道を天下に施してんの志によりてなり。佛徒にしては、立特三藏のごとき、流砂の難を犯されけるにこそ、其願はなりけらし。今橘君も其身をわすれて、醫療の術を極め、ひろく世を救ひ、遠く後にほどこさんの志なれば、其間には北方の強もまじるべけれど、其過はみづからしりて、門生の詩にも感悟せられたれば、他の口を入べからず。およそ此筆記を得て、居なが



らに千里の外をしるは、又なきたまものならずや。まいて、おのれは若きより遠遊のねがひはありながら、其かたはしにも及ばで、今はいたづらに頭の霜を重ね、閨の埋火をたのむのみなれば、わきて此記に心酔せりとなんこたへ侍りき。つひにこれをしるして橘君によせ侍るは、序ともなりなましや。

閑田子蒿蹊

凡例

一予醫學修行の爲に漫遊する事前後合せて五年、東西南北到らざる所なし。然るに、此書唯東西遊記と名附るものは、京を日本の中央とし、二つに分ちて東西とし、南北は其中にこむるもの也。

一予が漫遊もと醫學の爲なれば、醫事にかゝれることは、雑談といへども別に記録して、同志の人にも示す。唯此書は旅中見聞せる事を筆のついでにしるせるものにして、強て其事の虚實を正さず、誤りしるせる事も多かるべし。見る人其杜撰をとがむることなかれ。

一此書中にしるせる事々に就て、思ひ考ふことも多けれども、わざと此書中には愚按を加へず、議論取捨は見る人の心にあるべし。



北書中二冊... 南の心... 谿... 誌

一冊書中... 二冊見... 三冊見... 四冊見... 五冊見... 六冊見... 七冊見... 八冊見... 九冊見... 十冊見... 十一冊見... 十二冊見... 十三冊見... 十四冊見... 十五冊見... 十六冊見... 十七冊見... 十八冊見... 十九冊見... 二十冊見... 二十一冊見... 二十二冊見... 二十三冊見... 二十四冊見... 二十五冊見... 二十六冊見... 二十七冊見... 二十八冊見... 二十九冊見... 三十冊見... 三十一冊見... 三十二冊見... 三十三冊見... 三十四冊見... 三十五冊見... 三十六冊見... 三十七冊見... 三十八冊見... 三十九冊見... 四十冊見... 四十一冊見... 四十二冊見... 四十三冊見... 四十四冊見... 四十五冊見... 四十六冊見... 四十七冊見... 四十八冊見... 四十九冊見... 五十冊見... 五十一冊見... 五十二冊見... 五十三冊見... 五十四冊見... 五十五冊見... 五十六冊見... 五十七冊見... 五十八冊見... 五十九冊見... 六十冊見... 六十一冊見... 六十二冊見... 六十三冊見... 六十四冊見... 六十五冊見... 六十六冊見... 六十七冊見... 六十八冊見... 六十九冊見... 七十冊見... 七十一冊見... 七十二冊見... 七十三冊見... 七十四冊見... 七十五冊見... 七十六冊見... 七十七冊見... 七十八冊見... 七十九冊見... 八十冊見... 八十一冊見... 八十二冊見... 八十三冊見... 八十四冊見... 八十五冊見... 八十六冊見... 八十七冊見... 八十八冊見... 八十九冊見... 九十冊見... 九十一冊見... 九十二冊見... 九十三冊見... 九十四冊見... 九十五冊見... 九十六冊見... 九十七冊見... 九十八冊見... 九十九冊見... 百冊見...

東西遊記 目錄

東遊記

卷一

鎌倉	一
竹根化蟬	三
十府の里	四
吹浦砂磧	六
蘇武社	九
埋木	一一
熊突	一三
言葉石	一五
甲冑堂	一七
卷一	
松前の津波	一九
寒氣指を落す	二一

目錄

卷三

文武の餘風	三七
正木劔術	四〇
丹後の人	四四
幸の神	四五
蜃氣樓	四六
佐渡わたり	四九

卷四

親不知	五五
義經の笈	五七
胡沙吹	六〇
藤樹先生	六二
阿古屋松	六九

一



卷五

秋田路	七二
朱谷	七二
化石溪	七三
浮島	七四
大骨	七八
金華山	八〇
七不思議	八四

卷五末

平泉	八九
三尊窟	九四
不食病	一〇〇

東遊記 後編

卷一

壺の石ぶみ	一〇五
巖語	一〇七
葡萄嶺雪に歩す	一一九

卷二

龍燈	一二五
新潟	一二五
三馬屋	一二七
狐の義理	一二九
駿河名	一三一
三本木臺	一三二
錦木	一三四
龍鱗	一三五
蚌珠	一三五
養軒が詩	一三七

卷三

四五六谷	一四一
齋藤五郎兵衛	一四二
北極星	一四三
登龍	一四四
黃鐘調	一四六
箒木	一四九

卷四

善光寺	一五一
諏訪湖	一五五
鶴岡慈悲	一五六

西遊記

卷一

廣徳寺の門	一八七
氣候	一九〇
名山論	一九二
鉄先	一九四
地氣	一九七

卷五

熊野御前	一六一
羽州之鬼	一六二
松島	一六六
舞樂	一七一
漢文帝	一七三
戸隠山	一七四
大魚	一七五
塔影	一七七

手取川の風雪	一七九
床下の聲	一八一
飛根の城跡	一八二
舍利濱	一八四
銅山	一八五

卷二

冷暖玉	二二一
孔明の陣太鼓	二二五



飯野の風穴	二二六
康頼夫婦對面	二二九
鼉龍	二三一
十六日櫻	二三二
魂祭	二三五
渡り鶴	二三六
獵犬	二三七

卷 三

長江の旅泊	二三九
山女	二四一
求麻川	二四二
龍門の瀧	二四五
山童	二四七
玳瑁	二四八
一足鳥	二四九
麝香鼠	二五二
壽天	二五三
神樂	二五四
いろは	二五八

卷 四

篤實	二六一
仙人	二六五
孝行	二六七
流人	二七一
阿蘇山	二七四
仁斯至	二七六
奴僕	二八〇

卷 五

天の逆鋒	二八五
目鏡橋	二九三
家猪	二九四
地獄	二九五
東海氏の墓	二九七
清正公	二九八
山汐	二九九
與治兵衛瀨	三〇一
景清が母	三〇二

西遊記 續編

卷 一

卓子	三〇二
鐘乳穴	三〇五
碑文	三〇九
吹上の濱	三一
ナガ島	三一
古朴	三一六
曾根松	三一七
小田の木佛	三二一
扶桑木	三二二

卷 二

熊膽	三二七
鷓鴣	三二九
孟宗竹	三三〇
五ヶ邑	三三四
毀譽	三三六
流れ物	三三九

卷 三

龍鐘を愛す	三四〇
嬉し野	三四七
鼠島	三四九
徐福	三五〇
陽氣	三五二
濁り酒	三五三
姥が嶽	三五四
牛合	三五五
饑饉	三五六
隠戸の瀬戸	三六〇
鍛冶祐定	三六一

卷 四

那智の瀑布	三六三
桂林	三六五
出來島	三六六
肥後の毒水	三六八
豆腐怪	三六九



高麗の子孫 . . . . . 三七〇  
 龍の玉 . . . . . 三七四  
 那須 . . . . . 三七六  
 海水増減 . . . . . 三七七

卷五

楓樹 . . . . . 三八一  
 唐畫の櫻 . . . . . 三八二  
 綱引 . . . . . 三八三  
 産婦 . . . . . 三八六  
 奇器 . . . . . 三八八  
 劔の舞 . . . . . 三九三

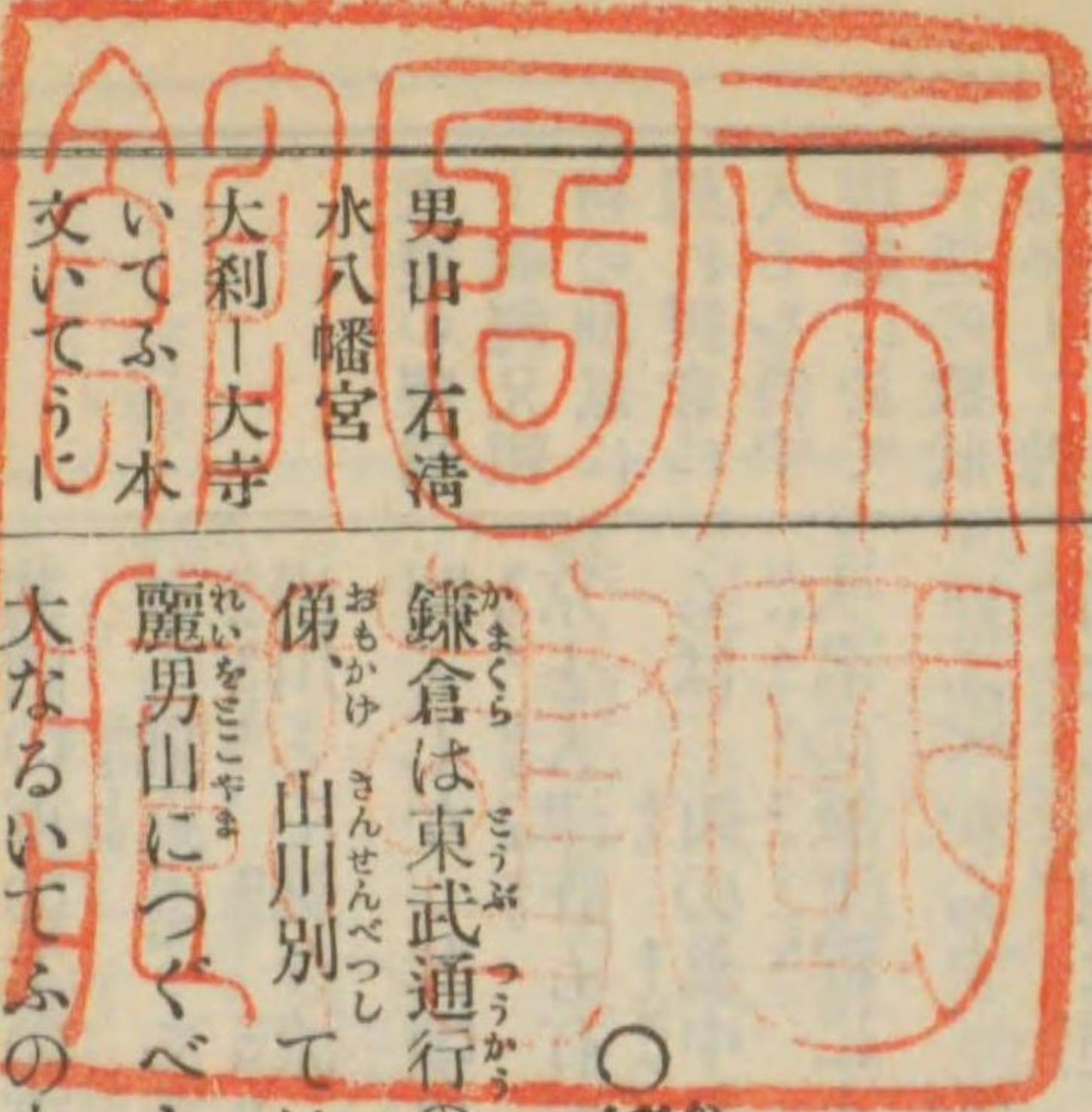
東西遊記目録終

東遊記 卷之一

橘南谿子著

鎌倉

男山石清 鎌倉は東武通行の人の見る所にして、珍らしからねど、又したしく其地に遊べば、昔の  
 水八幡宮 佛 山川別ては神社佛閣に残りて、懐古の情にたへず。先鶴岡の八幡宮に詣つ。其壯  
 大刹大寺 麗男山につくべし。佛寺には建長寺など最大利なり。鶴岡 南面のきざはしを登れば、  
 いてふ一本 太なるいてふの木あり。昔 此宮の別當公曉 將軍實朝公を弑したる所なりと云。八幡  
 文いてうに 宮の正面通、一の鳥居、二の鳥居、三の鳥居あり。其鳥居筋を真直に下れば、由比が  
 作る 由比が濱 濱に出る也。一の鳥居より由比が濱まで十八町なり。すべて鎌倉は皆山にて、地面甚  
 原本何れも 狭し。纜に谷の間々に屋敷々々を構へ住居せし事と見ゆ。其故に、比企が谷、大藏がや  
 由井が濱に 作る





つ、扇がやつなどと、谷々の名甚多し。頼朝卿の屋敷跡は、八幡宮の東の方にあり。此地少し平坦なれど、三四丁四五丁に過ず。其外の谷々のせまきことおして知るべし。屋敷跡の少し上の方に、頼朝卿の塚あり。今の薩摩侯の寄附の大なる石の手水鉢あり。其岡の東の上の方に、薩摩侯の先祖の墓所もあり。此あたり、薩州より寄附の物品々あり。猶近きうち造營も有べきよしなりとて、鎌倉の人々悦び居れり。八幡宮の東の方に、滑川とて細き流あり。青砥左衛門錢を落せし川なりといふ。其時の事は郊外のやうに聞えしが、其頃は、今の世の如く町家などは無りしにや。義經の腰越も、鎌倉を去る事、京と大津許も有べしと兼ては思ひ居しが、僅に一里許にも足らず。今の江戸のごとくならば、町の真中なるべし。昔は何事も微々なる事にて、鎌倉といへども今の四五萬石の大名の城下程にも無き事と思はる。凡鎌倉は、高山も無く、大河も無く、要害の地ともいふべからず。唯小き山數里四方に連りて、波濤の如し。其間の谷々も甚せまく、打晴たる平地は絶てなし。但源氏にはゆるある地なれば、頼朝の都し給ひしにや。伊豫守頼義鎮守府將軍に任じ、安倍の貞任征伐の爲に東國下向の時、石清水八幡宮を此地に勸請し給ふ。其後に相摸守に任じ、鎌倉に下向ありて、此所にて義家出生し給ふとかや。

は片瀨の東南にて鎌倉に入る門戸に當る地

府中一南條郡に在り、今武生町といふ坂本一近江滋賀郡比叡山の東麓に

かく先祖由來のある地のゆるなるべし。鎌倉と名附し初は、昔大職冠鎌足公、鹿島參詣の時、此地の由比の濱に宿し給ひける夜、靈夢によりて、秘藏し給ひし鎌を當所大藏山の松岡に埋み給ふ。此ゆゑに鎌倉郡といふ。又大藏山を鎌倉山とも名附し也。其外神社佛閣甚多く、古跡舊蹟種々の名ある所ひしと並べり。あけしるすにいとまあらず。余も二三日も四五日も逗留して、所々見廻り、寺社の舊記などを一見せば、面白きことも多かるべきに、唯戸塚より入り來りて、其日鎌倉を草々に一見し、直に江島へ出ぬれば、何のいとまもなく、見残して過ぬ。残多し。

○竹根化蟬

越前府中の南二里に、粟田部といふ所あり。田舎ながら町作にて、此邊にての賑なる里也。古昔繼體天皇大跡部の皇子にて渡らせ給ひし時、此所に御座ありし故、地名を大跡部といひしを、後世あはたべといひ誤りたるにこそ。此所に粟生寺といふ寺あり。天台宗にて、坂本西教寺の末寺にて、頗る大地也。此寺の住持は、余が方外の親友ゆゑ、北遊の時も廿日許逗留せり。其前年の事なりし由、此寺の北面にある藪を掘開く事あり



在り  
方外—僧侶  
醫師繪師な  
どの稱

本草—本草  
學の略にて  
古の植物學

しに、竹の根盡く蟬に變化して、既に生氣備はれり。動搖して早地上に出かゝりたるもあり、いまだ半は竹にて半蟬に變じかゝりたるもあり。色々ありて、其數百千に及べり。初は小僧奴僕なども珍らしがりしが、あまり多きゆゑ、後にはもてはやすこともなく、住持は生類を害せんことを憐れみ、又土に埋み、蟬に化せしめられしとかや。珍らしさに、余も兎角して二ツ三ツを求得て、携へ歸れり。其中に、背中より竹生ひ出たるも有り。京に歸りて人に語るに、草の根の蟲に變ずること多きもの也、竹の蟬に變ずるもあるなりといへり。誠に、冬は蟲に成り、夏は草になるものも、本草などにも見えぬれば、是等も其類にてやあらん。されど、時によりて無情の物有情に變じ、又有情の無情に變ずるなど、常理の外なり。嘗て竹の半變じて魚となりかゝりたるをみしことあり。又近江の人の語りしは、長濱にて、山の芋を掘來り料理しけるに、中に釣針のありしことあり。其掘りし所、昔は湖水の傍なりし所といへば、此薯蕷はうなぎと變じたる事疑なしといへり。其物語りし人も眞實の人なりしが、いかゞありしや、

○十府の里

のこしる—  
いひさわぐ  
養軒—南谿  
が弟子の名

とふの里は、いにしへ菅ごもの出し地にて、奥州の名所なり。仙臺の北東の方一二里の所にあり。此あたりは、玉田、横野、冠川、をだえの橋、多賀城、壺の石ぶみ、瀧竈の浦、野田の玉川、末の松山など、名高き名所二三里の間に集りつどへり。五月八日、朝とく仙臺を出て、原の町といふ所へ出て、それより案内といふ所へ來り、道行人に尋るに、知らずとのみ答ふ。此案内村には、酒食の店も多く見ゆれば、立よりて尋るに、店に立まはる女どもの、豆腐はこなたにあり、湯豆腐もかけんよし、奥へ入らせ給へといふにぞ、とうふにはあらず、尋るはとふの里の事なりといへども、其豆腐は御望に參らすべし、先入らせ給へと口々にのこしる。養軒と顔見合て、扱も、所には住ぬれど、無下に心なき賤の女かなと笑ふ。すべて此十府に限らず、何れの國にても、其所の人に名所古跡を尋るに、よくしりてをしふる人は稀なり。能々心がけて、せつ／＼尋求めざれば、行過て見残したる地多し。殊に残念なりしは、東の壺の石ぶみなりき。されば、何事も筆まめやかに書附たる書物杯あるは、世の人の大なるちからなり。此國などは名所も多き國なれば、書集たる書などは無きことにやと尋ねしに、仙臺の家中に觀跡聞老志といへる書あり、卷數廿許にも餘りて、奥羽兩國の名所古跡古事古歌に到るまで、委敷

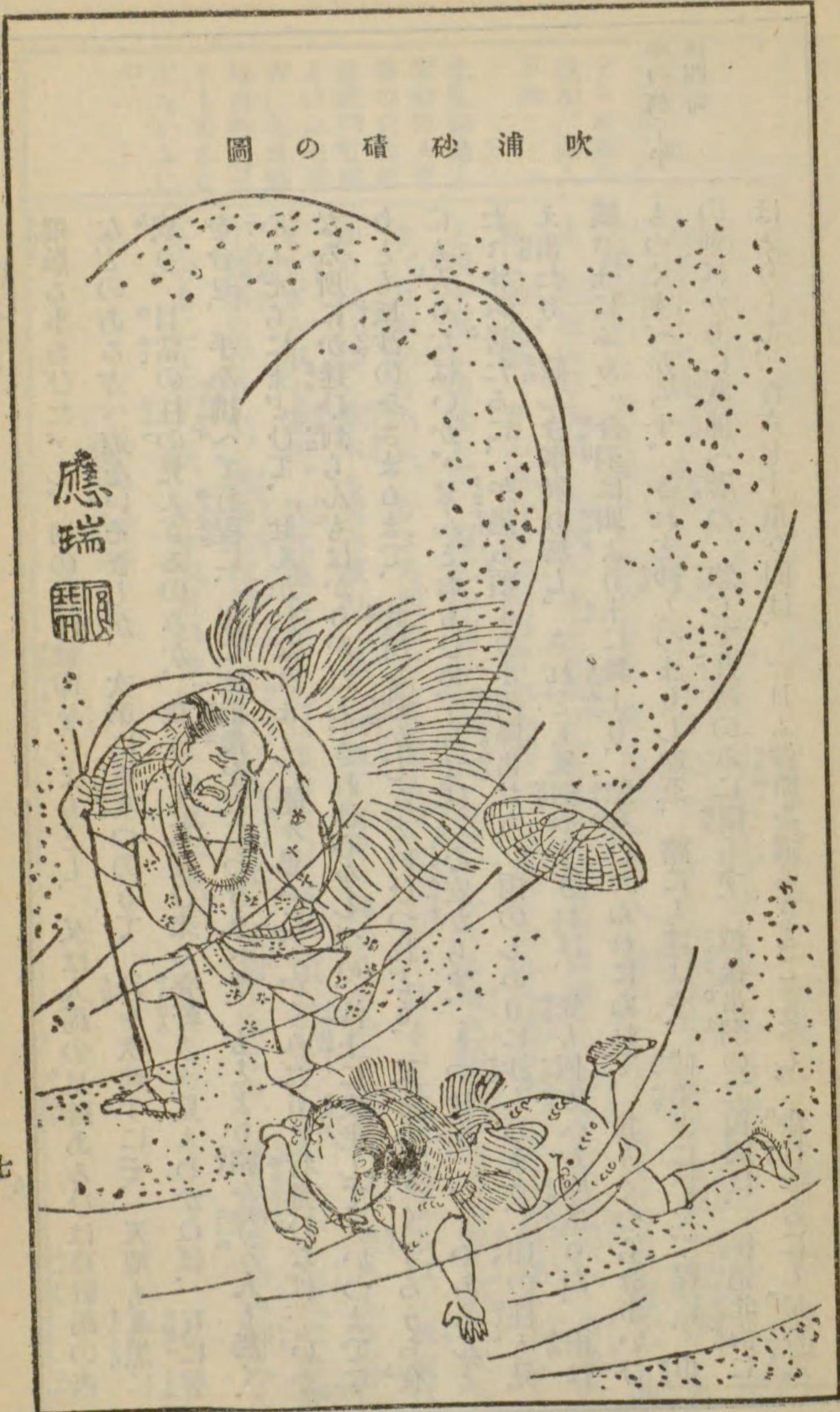


書し書なり。作者は仙臺の人にて、佐久間洞嚴とて、享保時分の人也。名を義和、字を子嚴、太白山人と號し、徂徠などの知音なり。其子は今の仙臺の儒官にて、姓を新井と改め、彦四郎と稱す。名を義質、字を子敬、滄洲と號し、齡既に七十年なり。右の書、寫本なるがゆゑ、彼國にさへ多からず、他邦には書の名をだに聞知れる人なし。予は仙臺の士奥田直助といふ人の家にて一見しつるに、主人いへるは、過し年、京都の白木屋彦太郎方へも一部書寫して贈れりと。何とぞ世に弘めたき書なり。彼十府の里はよく、尋るに、案内村と鹽竈との間に、街道より左に入る所に其古跡あり。菅薦も今は名のみのこれり。

○吹浦砂磧

三月廿二日、出羽國酒田を朝とく起出て、吹浦といふ里を心ざし行く。其間六里にして、路傍に人家なく、又田畑も見えず、左は大海、右は鳥海山にて、過る所は渺々たる沙場なれば、道路もさだかならず。此邊の人だに迷ふ故にや、其間三五十間程づくに、柱を建て道の目印とせり。酒田より一二里も來ぬらんと思ふ頃より、北風強く吹起り、沙の

吹浦砂磧の圖





申の刻一午後四時

飛散る事おびたし。初の程は彼印をたよりとし、又は人馬の足跡あるひは草鞋馬の杓などのある方へ道をいそぎしが、次第に風吹つので、沙を吹起すにぞ、天地も眞黒に成り、目當の柱の見えざるのみか、我うしろに従ひ来る養軒さへ見えわかねば、互に聲を合せ、手を携へて行程に、後には前後をだにわきまへず。もとより路を尋ん人も無く、心もそらにまどひて、せんかたなきまゝ、能々思ふに、かくみだりに行迷ひなば、いかなる所にか迷ひ到らんもはかりがたし。されば心をしづめ、沙上に安坐して、いつまでなりとも風沙のをさまるまで、此所を動かじなどいひつれども、又とやかくするうち夜にも入りなばいかせんとおもひめぐらせば、心安からず。とやせん、かくやあらんとたゞすみ居たるに、午過る頃より小雨降出たり。雨のしめりに沙しづまり、印の柱も見え出たり。嬉しき事限り無し。されども風猶やまざれば、笠も何方へか吹散りぬ。雨は横さまにふり、合羽は頭より上に舞上り、惣身ひたぬれにぬれて、其うくつらき事いひもつくすべからず。されど沙しづまりしゆゑ、路にも迷はず、唯急ぎにいそぐ程に、申の刻ばかりに吹浦へ著ぬ。惣じて此所のみに限らず、越後出羽の二箇國は、街道北海にほとりして、百六七十里が間は、一日も沙原を通らざることなし。歩行するにも足首迄

道はかどらぬ一たそがれにゆききの人の跡たえて道はかどらぬ越の長濱、讀人不知

北風動地一唐の詩人岑參の白雪歌送武判官歸といふ七言古に北風撼地白艸折云々とあるなどないふにや

は常に沙に埋れ、すゝめども唯退くやうにのみ思はれ、道はかどらぬ越の長濱とよみしもおもひ出られぬ。殊に九月の頃より三月末までは、日として風吹ざることもなく、沙塵常に天を覆ふ。唐詩にいへる、北風動地とはかゝる景色ならん。其吹ちらす沙、風の吹廻によりて所々に吹たまり、或は堤のごとく、塚のごとく、日々に其形變ず。其上、北地の草木は、皆秋の末より春の末までは青き葉は無く、渺々たる沙漠に、白草の風に動く體、かの塞外沙漠の事作れる詩にいふ所に少しも違はず。けに北極地を出ること四十度にあまりて、塞北の地にひとしければ、かゝる風色の相似たるも怪しむにたらず。日本のうちに、かゝる所ありとは聞も及ざりしが、昔より北地に遊ぶ人は、皆夏ばかりなれば、草木も青み渡り、風も南風に變り、海づらものどかなれば、恐ろしき名にも立ざる事と覺ゆ。我北地に至りしは九月より三月の頃なれば、途中にて、旅人には絶て逢事なかりし。我旅行は醫術修行の爲なれば、格別の事なり、唯名所をのみ探らんとの心にて行人は、必ず四月以後に行へき國なり。

○蘇武社



界一和泉國  
泉北郡に在り

蒿雀の岩屋  
一男鹿山の  
西崖に在り

蘇武が牧羊  
云々一蘇武  
漢の天漢の  
初匈奴に使  
して留めら  
れ匈奴の爲  
に北海に徒  
されて羝を  
牧せしこと  
あるをいふ

出羽國秋田の城下より北東に、海中へさし出たる地あり。遠く望めば島山のごとし。是を男鹿山といふ。界の住吉の浦より淡路島を望むがごとし。此地は、同じ出羽國にても、格別の地にて、種々産物も多く出る中に、材木の内殊更杉の木多く、世上に秋田杉といふは、此山より出るをいふ。風景も他に異にして、其中に蒿雀の岩屋などの奇は、世上の人も知る所なり。此男鹿山の中に、赤神山といふあり。此山上に祭る所の神五座、内一ツは漢の武帝を祭り、一ツは蘇武を祭る。外の三社は我邦の神なりと云。此地の海向ひは匈奴の地にして、蘇武が牧羊は此男鹿山と云。いつの頃よりいひ來ることによ。されど珍らしき事なり。附會の説ながら、此邊の風土氣候にては、蘇武が事もさもありなるといふやうに思はる。夏の頃は、秋田湊野代邊の人、船に乗り、島廻とて、此山の麓をまはり、色々の奇境を探る事なりとぞ。されど、少しにても風波あれば、至り難き所なり。又庄内と秋田領の境にも、女鹿といふ所もあり。男鹿と相隔たる事二三十里なり。男鹿女鹿といふことも、由來あることによし、彼國の人語れり。扱此男鹿山の内にて、第一の奇境といふは、蒿雀の岩屋なり。山の麓海面に近き所に洞あり。八月の頃海潮高き折を見合せ行事なり。潮洞穴に及ばざる時は、絶壁にて至りがたし。潮高く此

洞に及ぶ時、小船に乗り替て、洞穴の中へ船をさし入る。半道許にして、自然と洞の中明らかになり、漸々に潮淺くなり、船すまみかたき時、船より下りて、猶奥深く入るに、次第に洞穴廣く、細かなる沙清らかにして、後には潮も到らず、陸地と成り、遙向うを見れば、天地明らかにして、遠山連り、樹木うるはしく、人家のごときも見え渡る。其景色別に一世界と覺ゆ。此地に遊ぶ人は、猶奥深く尋到り見んと心ざし行事なれど、此邊まで入りぬれば、さすがに行先もおぼつかなく、歸路を失ん事も恐ろしく、又乗捨置たりし船をも思ふがゆるに、かの洞の廣くなるあたりより先へは、つひに到り見る人なく、足早に歸り出るとなり。此邊の人の考には、其見え渡る遠山も、人家も、別の世界にはあらず、男鹿山の内か、又は秋田邊なるべしと。さも有りなん。されど兎角山の姿此國にて見馴ざるやうにおもはるれば、所謂仙境にてもあらんといふ。我遊びしは八月の頃ならねば、此洞中へ入り見ざりし、いと残多し。

○埋木

仙臺のこなた一里半に、名取川あり。名取郡を流るゝゆる、名取川と名附。甚大河な



桂川―山城  
にあり  
杙―原本杭  
に作る

り。桂川に似たり。仙臺に逗留せし時、名取川近しと聞けば、埋木やあると尋求しに、方々より持來り贈られしかど、皆松木と見えて、纔に百年二百年のものなり。いと新敷、岸根に打し杙杯のやうなるもの、根にもやとおもはる。古歌などにより置し埋木は、かゝるものにはあらじと、猶あなたこなた尋探りしに、奥田直輔といへる人あり、家富て、文字に長じ、且仁慈の心深ければ、多くの金銀を出して、井手の川などを掘り、民を賑し、又は堤を築き、橋を渡しなど、いろく人民の助けになることのみをなして、鹽竈邊などには、新渠の碑など嚴然として、皆人の知る所なり。此奥田氏、名取川の堤を治めて田作の水難を防し時、川の底より地深く掘出せし木あり。予に親しかりければ、携へ來りて、是ぞ名取川の埋木てふものにてもや、君に贈るなりとて出せるを見るに、實に前に見しものには異にして、數千年を経にける木と見え、其性は何ともしれねども、色黒く、是を磨けば光澤有りて、唐木杯のやうにぞ見ゆ。石炭海松などは格別にして、木理あざやかにして、誠に是やむかしよりいひ傳へぬる埋木なるべしとおもはる。いと珍敷、嬉しくて、例の腰折などよみて謝しつゝ、囊に取納めて持歸り、手づから小き香箱に造りて、常に左右に置き、昔の事思ひ出て、我家の寶の一ツとせり。過し西遊の時

腰折―拙劣  
なる和歌

に得歸りし扶桑木に似て、彼木にも劣らずぞ覺ゆ。

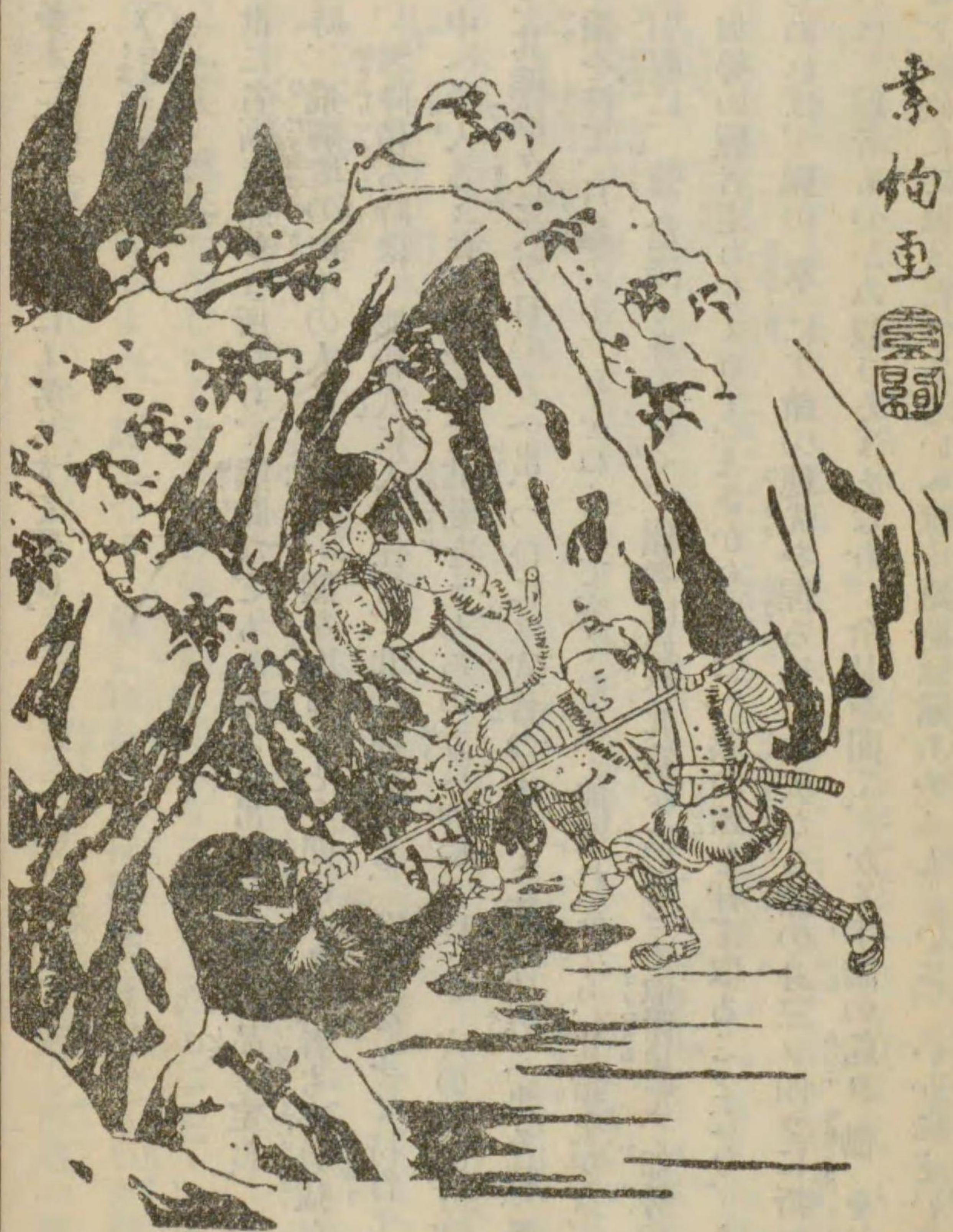
○熊突

加賀越中は、世に名高き熊多き所なり。熊膽なども此邊より出るを極上の品と定む。余越中に在りし時、飛驒境の山中の人に出會て、熊を取ることを聞に、其獵者も亦勇猛なり、冬に到り、雪降積る時は、熊皆穴に入り住む。其時獵者ども、薪木を多く持行て、熊の住る穴の中へ投入るゝに、熊怒りて其薪をうしろの方へ押やる程に、穴の奥の方次第につまりて、其熊段々に穴の口の方へ出、つひには穴皆つまりて、熊穴の外へ出る時、長さ一間許の手鎗を持って、月輪のあたりをねらひて突くなり。熊突れながら、其鎗をかながり捨てとして引程に、彌鎗深く身を貫く。獵者は始終其鎗をはなさず取附居て、如勢の獵者を待つ。加勢の獵者走りかゝりて、まさかりを以て、熊の頭を打て取ることなり。もし鎗を突損じぬれば、熊の掌にて鎗の穂先を握るに、丈夫なる鎗の身三ツ四ツに折れ砕く。左あれば、獵者もつかみ殺さるゝとなり。余是を聞て、かく手詰の危き働をせんよりは、など鐵砲にてはうたざるといへば、鐵砲は猶あやふしといふ。いかにといふ

月輪―熊の  
喉にある三  
日月形の白  
毛



加越熊突の圖



素朴重  


に、もし月輪を打はず時は、たとへ鐵砲の玉熊の身を貫くといへども、忽ち飛かまりて、つかみ殺すなり。鎗は、獵者其鎗に取附居る故に、飛かまる事あたはず、されば命を失ふこと無しとなり。唯手負の熊には、中々近附がたきものなり。手負ざる間は、おだやかなるものゆゑ、近附こと甚自由なりと語れり。誠に漁者は水に勇に、獵師は山に勇あり。盜賊は又利欲に勇あり。皆其習ふ所に勇ありと思はる。

○言葉石

予が越前國敦賀にありし頃は、十月の初なりしが、例よりは暖かにして、北國ながらも、小春のしるしとて、打續き天氣うららかなれば、彼地の人々にいざなはれ、其地にて、人の言葉石といふを見にまかりぬ。敦賀の町を離れ、西の方に出れば、きれいな松原あり。是を一夜松原といふ。むかし神功皇后の御時、唐土より賊船多く襲ひ來りしに、此海濱に、此松一夜の間に生ひ出て、梢に鷺の多くむれ集りしを、敵の目には夥敷軍兵の旗差物と見えて、驚き恐れ、逃去れりといひ傳ふ。誠に松の木立より、眞沙の白きさま、北國には珍敷土地なり。夫より五十町許にて、常宮といふあり。入海を隔

旗差物一旗  
 及び指物、  
 指物は昔鎧

小春一陰曆  
 十月の異稱



の背の受筒  
に差したる  
小旗也

さいいが嶽  
—さいえが  
嶽の訛也

七八合目—  
麓より七八  
分目

て、敦賀の町と向ひ合せたれば、南おもての地にて、風景殊に勝れ、此あたりの人の遊興の所なり。宮は仲哀天皇を祭れり。大社なり。遊行上人など、此國を経歴の時も、必此社へ詣でらるゝ事なりとて、遊行上人代々奉納の和歌など有り。此宮のうしろに高き山あり。凡京の比叡ばかりにも見ゆ。さいが嶽と名附く。此山に登ること二十八町にして、言葉石の下に到る。三十年許前までは知れる人も無かりしが、ふと木をこるものゝ己が言葉のひびくを怪しめるより、こゝかしこいひ傳へて、敦賀よりも人々登り見る事に成り、今にては若狭侯も遊覽の所となりたり。石の高さ十三間、横二十間といふ。山の七八合目とも思ふ所に、南おもてに有り。甚大なるものなり。其間十五六間も隔て、此石に向ひ呼に、言葉の應ずること、石の物いふかと怪しまる。人衆すくなくて來る時は、何となくものすごしといふ。かやうの石、伊勢國にも有り。彼地にては鸚鵡石と名附く。關東又は九州邊にては聞も及ばず。其日は天氣も晴れ、殊に親しき友人大勢にて、杯酒のたすけもあれば、一しほの興にぞ有ける。すべて此邊は勝地多く、此山の北東の裾を色の濱といふ。西行芭蕉なども遊べる地にて、ますほ貝名高し。今も沙子にまじりて有り。むかしにならひ、人々歌などよみ、松ともして旅宿に歸りぬ。

○甲冑堂

縁—原本椽  
に作る椽は  
音てん訓た  
るきにてえ  
んの充字と  
すべからざ  
れば改めた  
る也

奥州白石の城下より壹里半南に、才川といふ驛あり。此才川の町末に、高福寺といふ寺あり。奥州筋近年の凶作に、此寺も大破に及び、住持となりても食物乏しければ、僧も不住、明き寺となり、本尊だに何方へ取納しにや、寺には見えず。庭は草深く、誠に狐梟のすみかといふも餘あり。此寺中に又一ツの小堂あり。俗に甲冑堂といふ。堂の書附には故將堂とあり。大さ纜に二間四方許の小堂なり。本尊だに右の如くなれば、此小堂の破損はいふまでもなし。やうく縁にさがり見るに、内に佛とても無、唯婦人の甲冑して長刀を持たる木像二ツを安置せり。いかなる人の像にやと尋るに、佐藤次信忠の信二人の妻なりとかや。其昔、義經、鎌倉殿の義兵をあけ給ふを聞、秀衡にいとま乞して鎌倉へ赴き給ふ時、佐藤庄司、我子の次信忠信を御供に出せり。其後義經京都へ攻登り、平家を追落し、一の谷八島などにてさばかりの大功をたて給ひて、再度奥州へ來り給ひし時、はじめつき従ひて出たりし龜井片岡など皆無事にて歸國せしに、次信は八島にて能登殿の矢先にかかり、忠信は京都にて義の爲に命をおとし、兄弟二人とも他國の



土となりて、形見のみかへりしを、母なる人かなしみ歎きて、無事に歸り來る人を見るにつけて、せめては一人なりとも此人々のごとく歸りなばなど泣沈みぬるを、兄弟の妻女其心根を推量し、我が夫の甲冑を著し、長刀を脇ばさみ、いさましけに出立、唯今兄弟凱陣せしと、其佛を學び老母に見せ、其心をなぐさめしとぞ。其頃の人も、二人の婦人の孝心あはれに思ひしにや、其姿を木像に刻みて残し置しとなり。嗚呼兄弟の人は古今ためしすくなき忠義武勇の士なり。其人につれそひし婦人又希代の孝女にて、夫婦忠孝の勝れしも世に珍らしき事なり。余此物語を聞、此像を拜するに、そらろに落涙せり。かくばかり人の鑑ともなるべき孝婦の像の、かくあはれてたる小堂の雨風をだに防ぎかねて、彩色も落失せ、僧だに守らで、香花を供する人も無く、年月に荒れ行き、つひには跡かたもなくなりて、是等の事をも語り傳ふる人もなくならんを、誰ありてあはれといひて、一錢の參物をだに供する人も無きは、世には忠孝に感ずる人のすくなきにや。あまりにあはれに覺えしかば、委敷書附歸れり。

參物一賽物

東遊記 卷之二

○松前の津波

奥州津輕領三馬屋といへる所は、松前渡海の湊にて、其間纔に七里を隔てたり。兩方の山々の鼻相臨める所は、三四里許にても達すべし。此三馬屋に逗留せし頃、一夜此家の近きあたりの老人來りぬれば、家内の祖父祖母抔打集り、圍爐裏にまと居して、四方山の物語せしに、彼者共語しは、扱も此二三十年已前松前の津波程おそろしかりしことはあらず。されど佛神はあらかじめよくしろしめして、其告もありしかど、おろかなる人間、其時まで露しらすして、海邊の者皆死うせしなり。定て上方にても聞及び給ひてんと云。膝すり寄りて、いかなる事にて有りしやと問ふに、其頃風も靜に、雨も遠かりしが、唯何となく空の氣色打くもりたるやうなりしに、夜々折々光り物して、東西に虚空を飛行するものあり。漸々に甚敷、其四五日前に到れば、白晝にもいろくの神々虚空を飛行し給ふ。衣冠にて馬上に見ゆるもあり。或は龍に乗り、雲に乗り、或は

上方一原本  
上み方に作  
る

四方山一四  
方八方、山  
は充字也



塘雨―百井  
塘雨或は五  
井塘雨とも  
いひ京都の

犀象のたぐひに打乗り、白き装束なるもあり。赤き、青き、色々の出立にて、其姿も亦大なるもあり、小きもあり。異類異形の佛神空中にみちくして、東西に飛行し給ふ。我も皆外へ出て、毎日々々いと有難くをかみたり。不思議なる事にて、まのあたり拜み奉ることよと、四五日が程もいひくらすうちに、ある夕暮沖の方を見やりたるに、眞白にして雪の山のごときもの遙に見ゆ。あれ見よ又ふしぎなるものの海中に出来たれといふうちに、だんくりに近く寄り来りて、近く見えし島山の上を打越して来るを見るに、大浪の打来るなり。すは津波こそ、はや逝よと、老若男女我さきにと逡迷ひしかど、しばしが間に打寄て、民屋田畑草木禽獸まで、少しも残らず海底のみくづと成れば、生残る人民、海邊の村里には一人もなし。我々も遙に見しに、其浪數千里の沖より来りて、其高きこと雲のごとく、磯近き迄は、浪といふ事思ひもよらざりしなり。されど唯一寄せにて直に引たり。いかなるゆゑといふ事しる人なし。扱こそ初に神々の雲中を飛行し給ひけるは、此大變ある事をしろしめして、此地を逃去り給ひしなるべしといひ合て、恐れ侍りぬと語りぬ。其座にありける四五十以上の老人は、皆まのあたり見覺えて、口口に語りぬ。此事にて思ひ合すれば、我友塘雨諸國行脚の時、石見の國にて海邊を通り

俳人にて笈  
埃隨筆の著  
者也

北溟―北海

みえたり―  
原本見え見  
へ一定せず

脱疽―手足  
の末端次第  
に腐れゆく  
病氣

しに、海の底より潮卷上り來て、川上遙にゆり上り、懸り居し船など、大に驚き大變なりと騒ぎあひ、海嘯といふものならんや杯ひたると語りし。其年月此頃に當れり。すべて北海邊は、此時皆何方も海の底大に潮湧返りて騒動せしと、何れの國にてもいひしなり。彼松前の波先の響北溟一面に動きしとみえたり。誠に希代の珍事なりき。又後世の心得にもなるべき事なり。

○寒氣指を落す

北國の人餘に寒氣をこらへ雪を侵せば、血凍り、氣のめぐり絶えて、春に至り少し暖氣を催す比、足の指皆紫色に變じて、やがて腐り落るなり。いかに療治を加れども治しがたきものなり。余も此病人を度々見たりしかども、やはり脱疽の種類なるべし。いかに寒氣甚しければとて、指の落る事やあらんと思ひすて居たりしが、北地に嚴寒に遊びて、其まことなる事を知る。人のみならず、畜類までも指の落る事あり。出羽國秋田領の内、大葛村の鶏、ひと年寒氣強かりし冬、庭に追放し置しに、其翌春に到り、鶏の足の指ことごとく腐り落ぬ。鶏の命は恙なくて今に存在すれども、足の指無れば枝に



栖事ならず、唯庭にのみうづくまり居るなり。是も亦珍敷事といふべし。すべていかなる寒國といへども、指の落るといふは足の指の事なり。手の指の落るといふ事はあらず。我輩南國に生れて、かゝる寒氣は聞も及ばぬことなるを、明け暮れ雪の中を歩行するにて、幾度か、かくてぞ指も落べしとおもひしが、不思議に春に到りても恙無りしは、神明の冥助といふべし。足にははきとて菅にて編たるすね當のごときものを附け、足先は足袋をはき、其上に爪掛とて藁にて指先を厚く包みて、其上に草鞋をはく事なり。身には幾重も合羽を著し、頭には頭巾の上に深き笠をきる。頭巾は冬より春に到り一日もはなつ事なし。雪深く道の上三四尺以上も積りたる時は、爪先濡れずして反て凌やすし。雪纒に四五寸許の時、雨風交りて、道路泥田のごとくなる時は、脛までも濡れて、其爪先たとへ幾重包みても雪水しみ透りて、其つめたさ頭迄も徹り、唯今も早足首は切れ失ぬべくぞ覺ゆる。横さまに降る雪吹にて、頭巾の間より眉ぬれて、其露眉毛に氷り附、眉毛の先白くツラ、の如く下ることあり。夕ごとに、宿屋に著ても、草鞋脚半其儘には解けず。彼地の者、其足圍爐裏にくべ給へといふにぞ、初の頃はあやしくをかしかりしかど、餘に脚半のとけざるゆゑに、教のごとくに任せて、るろりに足

脚半一原本  
脚半脚伴一  
定せず今悉

さしくべたるに、火のあつきを覺えず。やゝ暫して漸々に氷解け、水滴り出て、はじめて足袋草鞋ともにとくべし。わらぢの氷り附て、石の如くになり、とけざる事は毎日常の如し。北地にては珍敷ことにはあらず。又餘に氷りたる足を、急に熱湯杯に浸せば、血のめぐり損じて、足ことぐく腐るといへり。唯初はぬる湯にて洗ひ、漸々にあつき湯にて浸すをよしとするなり。

○小杉の感

越中の小杉といふ所を過しは十二月廿日頃にて、北國のならひ、降り積し雪に行べき途さへ覺束なきに、我輩二人古びたる雨合羽に、同敷よこれ破れたる脚半打かけなどして、破れ笠打かうむり、持もなれぬ荷物しどけ無く背負ひ、手足こぼえ歩みかねたるさま、あはれにも、見苦しくも、人目には全く乞食順禮杯とこそみえぬ。人里遠く、行先おほつかなき折しも、此邊の百姓と見えて、四十許なる男紺の木綿のわた入の裾高かかけ、上に簑を著し、山岡頭巾にくさけに打かぶりて、行過るあるを呼かけ、小杉への道をしへてたべといふに、我も其方へ行者なり、跡に附て來り給へと、足早に行跡に

く脚半と改む

ならひ一原  
本ならいに  
作る

山岡頭巾一  
をぐそ頭巾  
からむし頭  
巾などとも  
いふ葎層に  
て製る北國



にては管にても作る  
品よくば  
様子よくば  
難儀—原本  
難儀に作る  
そなたち—  
其許達、あ  
なた方  
しんばう—  
原本何れも  
しんばうに  
作る

從ひ、一里許も行程に、彼男いふやう、旅の人はいづくよりいづくへ越し給ふや、又何の用にか出給ふ。余答へて、我々は都がたの醫者なるが、富山の方へ志てまかるなりといへば、富山は此所より程近し、彼地に逗留もし給はんやと問にぞ、品よくば、しばし足をも留べしと答るに、彼男いふ、此さむ空にさぞ難儀に思ひ給ふべし。されど人はしんばうこそ肝要なり。そなたちも深くあんじ入らずとも、富山に足を留め給へ。富山は繁昌の地なれば、程なく有り附も出来ぬべし。過し年、女格といへる醫者、都方より富山へ來り給ひしが、此人しんばうも強く、醫者も上手にて、其家業大に行れ、其上、近き頃は、町醫ながら五人扶持を上より賜はり、目ざましき繁昌なり。是といふもしんばうのよきゆゑなり。そなたちも女格老程にこそなくとも、なか身の片附出来ぬ事やあるべき。必色々の所へさまよひありかすとも、富山にてしんばうし給へと、くり返ししくいふ。扱もしんせつなる御人かな。いかにも教のごとく守るべしといひもて行に、程なく小杉に到りぬ。水茶屋に少し休らふに、彼男も同じく休居て、彼道すがらいひしことを、又くりかへしくいふ。其顔色言葉もおほへいなれば、門人養軒、初より聞ぬ顔にて居たりしが、あまりに度々にこらへかねて、此男は慮外ものよ。いかなるも

白龍も云々  
—貴人も微  
行する時は  
賤者の爲に  
辱めらるゝ  
譬、事は説  
苑に出づ

のとも知らで、様々のくりこと聞たくもあらずとあらまかにいふにぞ、さなひひそ、そこも我もかゝる姿にて旅行するなれば、人皆乞食順禮と思ふは尤左もあるべき事、あやしむにたらず。白龍も魚服すれば豫且があみにかかり、虎豹犬羊のつくり皮誰かよく是を辨ぜん。彼男深切に思へばこそ、かくもいふなれ。其言葉のくどきこと、鄙びたるは、其人が尤左も有りぬべし。答るに足らず。是よく人情世態を知るの學問なりといひ諫てやみぬ。かくて富山に到れば、折しも頻に雪降で、前路もふさがりぬれば、しばしといひて逗留せしに、逢迎の人多くなり、診視を乞ふ人にいとまなく、客舎晝夜群集せしに、一夕茶話の席、かの男の事語り出たるに、富山の人も手を打て笑ひぬ。

○名立崩

越後國糸魚川と直江津との間に、名立といふ驛あり。上名立下名立と二ツに分れ、家數も多く、家建も大にして、此邊にては繁昌の所なり。上下ともに南に山を負ひて、北海に臨たる地なり。然るに、今年より三十七年以前に、上名立のうしろの山二ツにわかれ、海中に崩れ入り、一驛の人馬鶏犬ことごとく海底に没入す。其われたる山の跡、今に



地方―陸地の方

も草木無く、眞白にして壁のごとく立り。余も此度下名立に一宿して 所の人に其有りし事どもを尋るに、皆々舌をふるはしていへるは、名立の驛は海邊の事なれば、惣じて漁獵を家業とするに、其夜は風靜にして天氣殊によりしくありしかば、一驛の者ども、夕暮より船を催して、鱈鰈の類を釣に出たり。鰈の類は沖遠くて釣ることなれば、名立を離るゝ事八里も十里も出て、皆々釣り居たるに、ふと地方の空を願れば、名立の方角と見えて、一面に赤くなり、夥敷火事と見ゆ。皆々大に驚き、すはや我家の焼うせぬらん。一刻も早く歸るべしといふより、各我一と船を早めて家に歸りたるに、陸には何のかはりたることもなし。此近きあたりに火事ありしやと問へど、さらに其事なしといふに、みなくあやしみながら、まづく目出たしなどいひつゝ、圍爐裏の側に茶などのみて居たりしに、時刻はやうく夜半過る頃なりしが、いづくともなく唯一ツ大なる鐵砲を打たるごとく音聞えしに、其跡はいかなりしや、しるものなし。其時うしろの山二ツにわれて、海に沈しとぞおもはる。上名立の家は一軒も残らず、老少男女牛馬鶏犬までも海中のみくづとなりしに、其中に唯一人、ある家の女房、木の枝にかかりながら、波の上に浮みて命たすかりぬ。ありしこと共、皆此女の物語にて、鐵砲のごとき音

せしまでは覺え居しが、其跡は唯夢中のごとくにて、海に沈し事もしらざりしとぞ。誠に不思議なるは、初の火事のごとく赤くみえしことなり。それゆゑに、一驛の者ども残らず歸り集りて死せしなり。もし此事無くば、男子たる者は大かた釣に出たりしことなれば、活残るべきに、一ツ所に集めて後崩れたりしは、誠に因果とやいふべき。あはれなることなりと語れり。余其後人に聞に、大地震すべき地は、遠方より見れば赤氣立のほりて火事のごとくなるものなりと云へり。松前の津波の時、雲中に佛神飛行し給ひしなどいふことも、此たぐひなるべしや。神主竹内太夫といふ此名立の驛は、古人佐渡へ渡り給ひし時一宿し給ひし所なりとぞ。都をばさすらへ出て、今宵しもうきに名立の月を見る哉。或説に順徳院是は菊亭大納言爲兼卿、佐渡配流の時、此驛にてよめる和歌なりといふ。歌の體、臣下たの御製とも云。ふは其短冊みざりしかばいづれともしらず。されども、黄昏に往來の人の跡絶えて、る人の作にもやと思はる。又名立の次に長濱といふ濱あり。誠に此あたりは都遠く、よろづ心道はかどらぬ越の長濱」などいへる古歌もありと聞り。誠に此あたりは都遠く、よろづ心



細き土地なりき。

○米山

いろ／＼い  
なみける  
様々に辭を  
設けて斷り  
たりと也

北地の人、越後を二ツに分ち、上越後下越後といふ。上越後とは高田領糸魚川領等をいふ。其東に米山といふ高山ありて、其西の麓に關所あり。其所を鉢崎と云。又鉢崎といふ所ありて、鉢崎に並べり。此鉢崎は、むかし親鸞上人此所に行暮て宿を乞ひ給ひしに、宿のあるじ心悪敷ものにて、いろ／＼いなみけるとぞ。是を鉢崎のしぶく宿といひて、其家の在りし跡今に残れり。今にてさへ北地邊境中國には似もよらざるを、其頃にはさぞかしと、思ひやらる。扱米山といふは登り下りにて三里の山にて、此あたり第一の高山なり。誠に越後を二ツにわけたる山なり。此山高しといへども、奇妙の山にて、山上七八分までも山中に田作して水かまりよしとなり。故に米山と名附ると云。余は唯通り道一筋の事にて、山中に入らざれば委しきことは見及ざりしかど、高山にて米穀の生ずるは珍敷事なり。西國にては肥前の雲仙嶽、三里登りて、絶頂に水田有りて、農家あり。其外はいまだ聞ざることなり。誠に是等をや寶山といふべき。

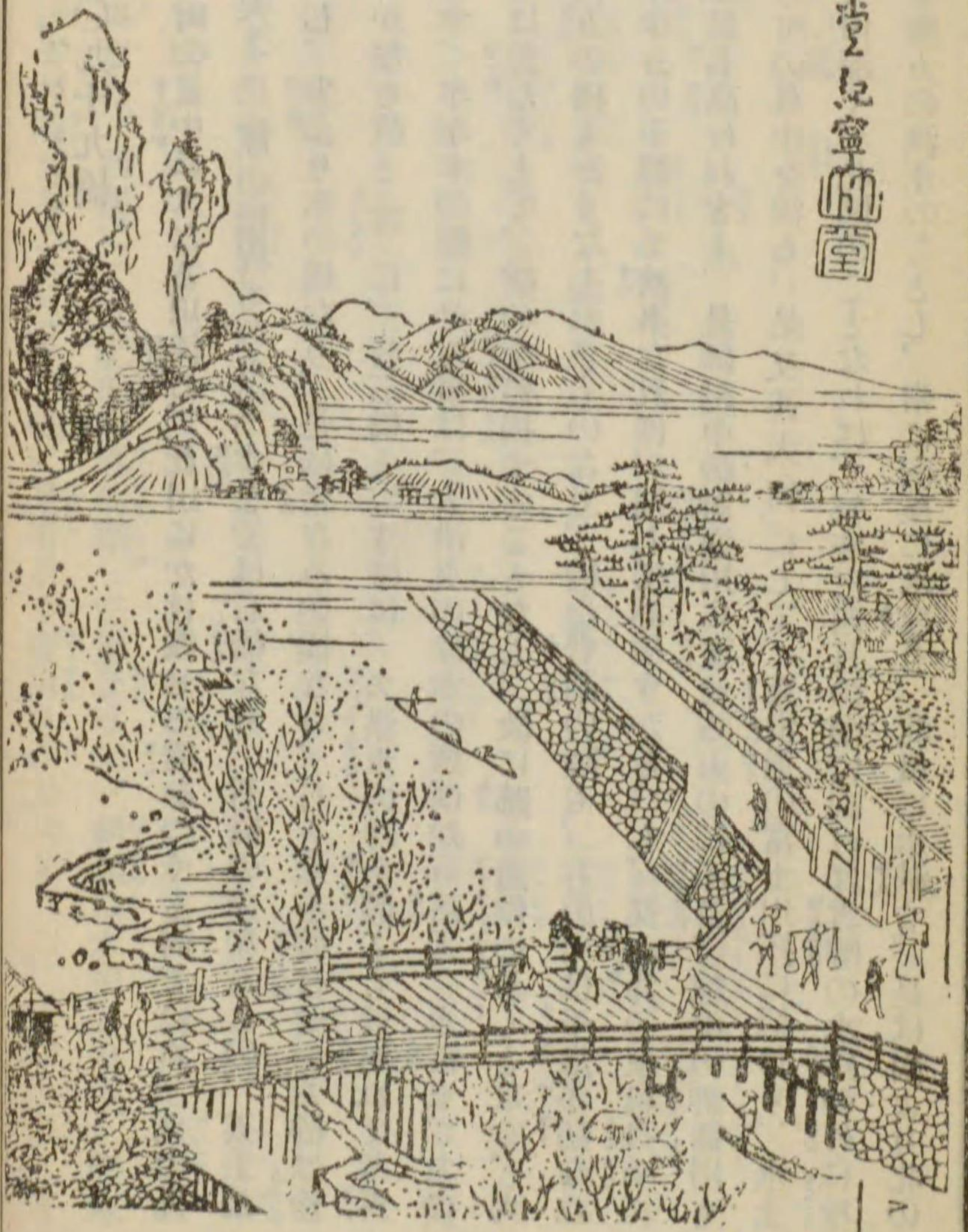
○九十九橋

越前國福井の町の真中に大なる川流る。此川にかけ渡せる橋をつくも橋といふ、九十九橋と書り。其大さ三條の橋程も有りて、半までは石橋なり。石橋の大なるもの、天下是に勝るものなし。半より木の橋なり。是は常なみの橋なり。石と木を續合せたる橋は珍敷橋なり。いかなる故と尋に、皆石橋となす時は、大洪水の時全體ともに崩れて其再興大かたならず、半を木の橋にせる事は、大洪水の時木の所ばかり落て、水淀まざるゆゑに、石の所は恙なくして、橋の全體損することなし。故に跡の造作心易しとなり。大なる橋は、何方の橋もかくなしたきものなり。橋を普請の時も、石の所は千歳不朽なれば、唯本の所半分の手間にて濟事なれば、別して心やすかるべし。又福井の東に舟橋あり。越前にては名高けれども、是は越中の神通川に渡せるものに不及。越中の神通川も富山の城下の町の真中を流る。是又甚大河にして、東海道の富士川杯に似たり。水上遠くして然も山深く、北國のことなれば、毎春三四月の頃に到れば雪解の水殊の外に増來りて、例年他方の洪水のごとし。常に南風に水増り、北風に水減す。是は南より北の



越前福井九十九の橋の圖

砂堂と寧山園



常體の一普通一般の

橋杭一原本  
橋杭に作る  
舟の足にせ  
かれて一舟  
足の爲めに  
水堰き止め  
られてと  
也、舟の足  
とは舟底の  
水中に没し

海へ落る川ゆるゑなり。かくのごとく、毎度洪水あり、其上に急流なれば、常體の橋を懸る事叶ひがたき川なり。されば舟橋を懸渡すことなり。先東西の岸に大なる柱を建て、その柱より柱へ大なる鎖を二筋引渡し、其鎖に舟を繋ぎ、舟より舟に板を渡せり。其舟の數甚多くして、百餘艘に及べり。川幅の廣き事おもひやるべし。其鎖のふとく丈夫なること、誠に目を驚せり。鎖の真中二所程繋ぎ合せし所ありて、其所に大なる錠なること、おろせり。洪水の時切る所なりと云。兩岸の柱のふときこと大佛殿の柱よりも大なり。追々にひかへの柱ありて、丈夫に構へたり。鎖につなぎて舟を浮めたることゆるゑに、水かさ増るといへども、其舟次第に浮上りて危き事なく、橋杭なきゆるゑ橋の損することなし。然れども、誠に格別の大洪水の時は、此舟の足にせかれて、兩方の町家へ川水溢れのほるゆるゑに、やむことなく此鎖の中程を切ることなり。其舟左右に分れて水落るゆるゑ、水かさ減することなり。然れども、此鎖を切る時は、跡にてまた鎖を繋事莫大の費用あることゆるゑに、格別の洪水にて、町家の溺るゝ程の時ならでは切る事なし。此舟橋も亦一奇觀なり。もろこし黄河などにも、晋の時分、舟橋を懸られしといふ事聞及べり。いかなる大河急流なりとも用ひらるべき橋なり。越前福井の舟橋の鎖は、柴田勝家の造り



たる度合をいふ

置れし鎖なりといへり。誠に此鎖容易の事にあらじ。又奥州南部の城下にも舟橋あり。是も大なれども越中の船橋に不及。舟橋のある所天下に右三ヶ所なり。其内越中を第一とすべし。其外 常の橋の長きものは、世人のよく知る所の東海道の岡崎の矢矧の橋なり。其長貳百八間ありと云。是を天下第一とす。橋の巧をつくして奇妙なるは、周防の岩國の錦帯橋なり。唐畫の如くなるは、長崎の目鏡橋なり。危きは甲州の猿橋、高くして奇なるは越中の相本の橋なり。其外、邊國山中に懸渡せる所の小橋には、朝六ツの橋、かづら橋など、奇妙の橋少からず。朝六ツの橋は飛驒國の山川にかけ渡せる石橋にて、いかなる暗夜といへども、其橋の上に到れば少し明らかになりて、人顔も臆に見え、たとへば朝六ツ比のあかりのごとし。故に、土俗むかしより朝六ツの橋と名附くとかや。物知れる人のいひしは、此橋の下には名玉あるゆゑなるべしと、誠にさもありぬべく覺ゆ。

○鹽竈

奥州仙臺の東北四五里に、鹽竈といふ町あり。鹽竈明神を祭る地故、其所の名とす。甚

朝六ツ比  
午前六時頃

宰府天神  
太宰府の天  
滿天神  
火袋一油皿  
を入れ置く  
ところ

繁花の地にて、家數も千軒に餘り、遊女などもありて、仙臺邊の人の遊興の場所なり。海に添ふ地ゆゑ、船も入りて殊に賑なり。鹽竈明神の宮居甚廣大美麗にして、去年京を出しよりいまだ見ざる所なり。一國の人甚尊信して、月參或は講參杯とて、九州の人の宰府の天神に詣るがごとし。其ゆゑに、旅館なども大にして又多し。酒魚物に至るまで富り。此社の門を入りて、左の方に鐵の燈籠あり。網の蓋ありて、其上に九輪のごときものあり。塔に似たり。臺も鐵にて作れり。此臺と火袋の所鐵にて、眞の古物と見ゆ。蓋より以上は新物なり。扱火袋の前面の上に鑄附たる和泉三郎忠衡敬白の文字あり。秀衡鎮守府將軍たりし時、其子の三郎寄附せしと見えたり。其時の俤見えて、むかし忍ばしくおもはる。此燈籠の前に、杉板に書附たる假名文章、此燈籠の事をしるせるを懸たり。召具せし養軒讀て、扱もよき文章なり、東北國にて此頃見及ざる事なりといひて、大に感ず。いかなることをか書ると讀て見るに、芭蕉翁の奥の細道といへる書に出たる、此燈籠の事書る文章なり。養軒は和文の事も知らず。俳諧の道はさらなり、芭蕉といへる名をだに覚えぬ程の者なるに、よきものは誰が目にもよきと見ゆ。それより町に下りて、釜殿に到る。本社とは四五町をへだてたり。神代の釜とて、玉垣の



潮水ゆゑ一  
原本鹽水ゆ  
ゑに作る  
汲替る一原  
本くみかへ  
ると訓す  
用ふる一原  
本用ゆるに  
作る、今一  
定する爲に  
かく改たり

ひ廻して、其中に釜四ツを竝べたり。是を見るに、誠に希代の神物なり。釜の内、皆各潮水を貯ふ。其潮の色赤きあり、青きあり、紫あり、四ツの釜皆潮水の色を異にす。潮水ゆゑに、此釜の鐵氣出て水の色を變ずるにや。毎年七月十日早曉、社人齋戒沐浴して此潮を汲替る事なり。此釜は神物ゆゑに、何事にもせよ、此國に變異ある時は、此釜の中の水色たちまちに變じて奇色をあらはす。往古より毎々しるしありといふ。釜の大きわたり四尺餘、深さ纔に貳三寸、或は四五寸に不過、皆少しづつの大小淺深ありて、四ツともに同じからず。皆甚淺くして、足無く、鏝無く、其形たとへば家々常に用ふる所の丸盆のごとし。全體鐵にて作りたるものにて、其厚さ三寸許もあり、不相應に厚きものなり。實に神代の舊物にして、五百年千年の物にはあらず。傳へ云、鹽竈明神上古の世此地に降臨まし、初て此釜を鑄給ひ、海潮を煮て鹽を取こを人民に教給ふ。今に到るまで天下鹽を食ふ事を得て、明神の徳を蒙る。今に其時の釜の残れるなりと。誠にさもありぬべく見ゆるものなり。されど釜甚厚くして、中々物を煮るの用に立べくもあらず。上古は世富るゆゑに、薪澤山に、人民閑暇なれば、是程の物も用に立けることとにや、いぶかし。又釜殿の三四軒程東の町家の裏に、牛石とて牛の臥たるごとき石あり。

石の寶殿一  
印南郡龍山  
の西北なる  
丘腹に在り  
社殿の形し  
たる石也

り。是は明神の鹽をやき給ひける時、其鹽を背負たりし牛なりしが、後に石に化したるなりと云傳ふ。然れども是は尋常の物に見えて、奇とするにたらず。唯釜は誠に上古の舊物にして、神物ともいふべし。播州の石の寶殿と此釜は實に奇物なり。



東遊記 卷之三

○文武の餘風

佐々成政一  
織田信長の  
臣にて後天  
正十六年正  
月十四日豊  
臣秀吉の爲  
に殺さる享  
年五十

近習計一原  
本近習斗に  
作る

法度の事一  
禁制の事

佐々成政越中を領せし時、敵に圍れ、勢屈して、外に味方の助無れば、我城をだに守り兼し折ふし、きつと思案をめぐらし、濱松は兼てのちなみなれば、みづから行て救を求めんと欲すれども、四方皆敵に圍れて出べき道なく、折節極月二十七日の事なれば、夏の日だにも雪消ぬ越中立山、麓より峯まで數丈の雪封じて、禽獸さへ通ひ得ざる時なれば、敵も油断して立山の方はかこまず。成政纔の近習計を召具し、忍びやかに城を出て、雪深く埋みたる立山の絶頂へ、雪の上を眞一文字にかけ登り、又絶頂より南をさし、谷嶺をいと雪の上をすべり落ければ、信州松本へ落著たり。それより濱松に越えて、恙なく救を得たりとなり。雪中に立山を眞直に越たる艱難、中々言葉につくすべからず。其越たる跡を、成政がさらしく越といひて、唯今にも、勇氣の者は、越中富山より信州松本へ、一二日が間に越る事なり。されど是は法度の事なりとて、其さらしく



仔細—原本  
子細に作る

參差として  
—高低相齊  
しからずし  
て

越の所は彼地の人も祕するといへり。常の道を廻りて行ば、富山より松本へ六七十里にも餘れる所を、一日か二日の間に行道なり。此事唯寒中より早春の間にすべき事にて、常の時はなりがたしとぞ。其仔細は、人跡絶たる極深山のことなれば、草木生ひ茂りて行べき道をさへぎり、あるひは斷崖絶壁の所ありて、羽なければ飛がたく、あるひは猛獸出て人を食ふ。數十丈の雪積る時には、斷崖絶壁の所も皆一面の雪と成り、たとへころび落たるにも、雪の上なれば其身損ずる事なし。又大樹喬木といへども皆雪に埋れて、一面の平地のごとし。猛獸又皆逃隠れて穴に住めば、人を害することなし。此ゆゑに、寒氣に堪へ忍びて命全ければ、谷嶺池川の差別なく、眞直に越えらるることなり。此事を越中にてくはしく聞しかど、あまりけしからぬ事ゆゑ、唯昔物語のやうに聞流して居たりしが、それよりだんく、出羽奥州に入て、見るに、立山のざらく、越の事初て誠の事と思ひ悟りぬ。津輕領の青森といふ所の南に當りて、甲田山といへる高山あり。其峯參差として指を立てたるがごとくなれば、土俗八ツ甲田といふ。叡山愛宕杯のごとき山を三ツも五ツも重ね上たるがごとき高山なり。津輕領の人勇氣たくましき者、又は罪を得てすがたをかくす時杯、津輕の關所南部の關所ともに抜んとするに、極月よ

行著—原本  
行附に作る  
此類多し

なか／＼  
却て

つゝらなり  
—原本つゝ  
ら下りに作  
る曲折多き  
峻坂

關雪の和歌

り二月三月の頃までは、此甲田山の絶頂をさして雪の上を眞一文字に登り、磁石を立て、南部地は東南の方と志し、其方角のあたる方をさして、眞直にすべり落る事なりとぞ。常なみの本道を廻り行時は、五十里七十里或は百里にも餘る所を、纔に一日二日の間に行著なり。此外、津輕の外が濱邊、蟹田、蓬田邊よりも今別、三馬屋邊へ、雪中には眞直に山を越えて、甚近くて行るゝ事なり。其餘一里二里五里七里の程ちかき所は、かくのごとく雪の上を越て、近道となる所甚多し。常々は皆雜樹或は熊篠など生ひ茂りて通ひがたき所なり。北地數十丈の雪積り、殊に嚴寒の國なれば、雪皆積るより氷て甚堅く、いかに踏とも落入るといふ事なし。南國の雪の様子とは大に違ひたるものなり。寒中に彼地に遊ばざれば信じがたき事なり。仙臺御先祖正宗の和歌に、「中々につゝらをりなる道たえて、雪に隣りの近き山里」といへるも、兼ては解しがたく覺えしが、是等の事を見聞て、初て此歌を感じり。後の正宗卿も戰國の最中に生れ、殊に東方の夷にて、其比に勇猛の名高く、叱咤の威當る者なく、今に至り天下一二の大諸侯と呼ぶるゝ基を開しも、唯兵馬の力のみと思ひしが、やさしき詩歌などにも志有りて、誠に文武兼備豪傑の大將といふべし。集外歌仙杯に出たる關雪などの和歌は、世の人も知る所なり。又ひと年將



一さいすと  
も誰かは越  
えむあふ坂  
の關の戸う  
づむ夜半の  
しら雪

軒冕の氣象  
一高位高官  
の人の氣風

大垣の家中  
一 大垣の藩  
士

軍家の上洛に従ひて、正宗も上京の折に、禁裏にて若き人々立つどひ、仙臺侯の國許は人の言葉をかしと聞侍る、國言葉にて歌よみて見せ給とありし時、正宗とりあへず、「東から眞赤な月がずばぬけて、いづこの雲にのたしこむらんと詠りとぞ。又年老ける後の作に、馬上青年過、世平白髪多、殘軀天所許、不樂是如何と。さして文名もなき大將の詩には感すべきことなり。さればこそ、此餘風子孫に傳へて、吉村卿と聞えしは、殊に歌仙の譽高し。今の太守左中將重村卿も、和歌の聞えあり。去年の中秋東武にての作とて、「馬車途さりあへぬ世の塵に、曇りて月の高き山の端」と。是等も軒冕の氣象なく、其人となりおもひやられて有難くぞ覺ゆ。誠に御先祖正宗卿文武の大將にて、其餘風今に存せりといふべし。

○正木劍術

正木段之進といへるは美濃國大垣の家中にて、歴々の武士なり。此人劍術の妙を得て、此門人となる者へは鎖を授くることなり。京都杯にも此鎖を傳授したる人多し。其外江戸杯には尤多く、諸國とも門葉多し。此段之進劍術の事に附ては、世間色々の奇妙のは

正木劍術能諸邪を防ぐ



正木段之進



退る—原本  
しりぞける  
と訓ず

なし多くして、信じがたきこともあるに、旅中にて彼門人に親敷交りて、其修行のあらましを聞しに、誠に感すべく、たふとむべき事なり。此段之進の父祖にや有けん、幼年より劍術に心を寄せ、日夜寢食をわすれて修行せし頃、一夜寢間の襖を鼠の咬音に目覺て、疊をたゞきて追たりしに、鼠逃去れり。暫して少し寢入らんとする頃、また鼠來りて襖を咬む。又目覺て追へば、鼠逃去る。心ゆるみて寢入らんとすれば鼠襖を咬む。かくのごとくする事三四度に及びて、段之進思ふやう、我氣みたずして彼鼠に徹せざればこそ、眠るに従うて鼠襖を咬なりとて、起直り座を正して、一心に氣をあつめ、鼠の方を守りつめて居たりしに、鼠つひに來らず。其後は鼠の音する度に、かくのごとくするに、鼠咬ことあたはず。後にはけたを走る鼠をも、氣を集てにらみぬれば、落る程に成れり。今に至り其門人氣を煉る事を稽古するに、鼠の物を咬にてためす事ありといふ。門人の中にも、二三人はよく鼠を退る程に至れる人ありとなり。いかなる猛獸といへども、先此方の氣を以て制す。敵人といへども立向より先づ氣を以て勝事なりとぞ。此事は奇妙のやうに聞ゆれども、さることもあるべしとおもふ。我學ぶ所の醫術にも壓勝の法といふ事ありて、氣を以て禁するに、瘡氣を開かしめ、或は腫物を押散らし、又

出来る—原  
本できると  
訓ず

おくれを取  
事—敗らる  
る事

は狐狸に魅せらるゝ者を治し、其外奇効目を驚す程のこと出来るものなり。其法皆正木の修行のごとく、又熊澤先生の書集られし書にも、敵をうたんとする人の、其家に忍び入らんとすれば、内に寢入りたる當才の小兒啼出して、其父目を覺す。折悪しと暫ひかへぬれば、小兒もよく寢入て家内静なり。又討入らんとすれば小兒啼出す。再三かくのごとくして、つひに討事を得ざりし。是其殺氣の無心の小兒に徹せしなりとぞ。其理の論は格別、先正木の修行に心を用ひられし事を感すべし。又彼鎖所持の者は、いかなる強敵に逢時にもおくれを取事なく、又いかなる猛獸盜賊といへども、此鎖を所持する人には近附ことあたはずと云へり。是はいかなる事にてかくはいふ事なるやと尋しに、何人にもせよ、正木の門人と成り、鎖を受んと願ふ時、先誓約をすることとぞ。其誓約の辭、君に不忠なるまじ。親に不孝なるまじ。朋友に信を失ふべからず。虚言いふべからず。高慢の心を起すべからず。大酒すべからず。禮義を失ふべからず。公事にあらずして、みだりに血氣にはやり夜行すべからず。猶此外數々の條目ありて長し。是に一ツもそむくことあらば、摩利支尊天の御罰を蒙りて武運に盡べしとなり。初にかくのごとく誓ふことゆゑに、もし此辭にそむく者は、たとへ鎖幾條所持するといへども、其



しるしなく、鎖の奇特を失ふと定めたり。誠にかくのごとくなれば、正大の誓約いと有難き鎖なり、聖人の道といへども此上や有べき。實に武道の奥義といふべし。法華經の水火も燒溺する事あたはずと説き、老子の虎豹も牙を觸るゝ事なしと教へしも、亦是に外ならず。瑣末の技藝の上にてても、其妙所に至りては有難きこと多し。されど余其人に交りて親しく聞き事ならねば、誤りしるせし事もあるべきにや。

○丹後の人

奥州津輕の外が濱に在りし頃、所の役人より、丹後の人は居ずやと、頻り吟味せし事あり。いかなるゆゑぞと尋るに、津輕の岩城山の神甚丹後の人を忌嫌ふ、もし忍びても丹後の人此地に入る時は、天氣大に損じて風雨打續き、船の出入無く、津輕領甚難儀に及ぶとなり。余が遊びし頃も打續き風悪しかりければ、丹後の人の入りて居るにやと吟味せしこととぞ。天氣あしければ、いつにても役人よりきびしく吟味して、もし入込居る時は、急に送り出すことなり。丹後の人津輕領の界を出れば、天氣たちまち晴て、風靜に成なり。土俗の、ひならはしにて忌嫌ふのみならず、役人よりも毎度改むる事な

難儀一原本  
難義に作る

安壽姫一岩  
木判官正氏  
の娘なり、  
一説に田光  
の海の童女  
なりともい  
ふ、俗説也

渥美一原本  
握美に作る  
實は溫海也

り。珍らしき事なり。青森、三馬屋、そのほか外が濱通り、港々最甚敷丹後の人を忌嫌ふ。あまりあやしければ、いかなるわけのありて、かくはいふ事ぞと委敷尋問ふに、當國岩城山の神と云は、安壽姫出生の地なればとて、安壽姫を祭る。此姫は丹後の國にさまよひて、三庄太夫にくるしめられしゆゑ、今に至り其國の人といへば忌嫌ひて風雨を起し、岩城の神荒給ふとなり。外が濱通り九十里餘、皆多くは漁獲又は船の通行にて世渡ることなれば、常々最順風を願ふ。然るに差當りたる天氣にさはりあることなれば、一國こぞつて丹後の人を忌嫌ふ事にはなりぬ。此説隣境にも及びて、松前南部等にてても、港々にては多くは丹後人を忌て送り出す事なり。かばかり人の恨は深きものにや。

○幸の神

出羽國渥美の驛のあたりの街道の兩方に、岩の聳えたる所には、幾所ともなく、必岩より岩にしめ繩を張り、其しめ繩のもとに、木にて細工よく陰莖の形を作り、道の方へむけて出しあり。其陰莖甚大にして長七八尺ばかり、ふとさ三四尺周も有べし。あまりけしからぬもの故、所の人に尋れば、是は往古より致し來れる事にて、さいの神と名附



て、毎年正月十五日に新敷作り改むることなり。所の神の事なれば、中々籠略にはせず、たとひ御巡見使又は御目附等の御通行の節も此まゝにて、若きものの戯などにあらずと云。また其しめ繩に紙を結びて多く附たり。是はいかなる故と問へば、これは此あたりの女、よき男を祈りてひそかに紙を結ぶことなりと云。誠に邊國古風の事なり。京都の今出川の上にある所の幸の神といふは、いかなる神にてましますや、すべて田舎には、色々の名は替あれども、陰莖の形の石、陰門の形の石を神體として、所の氏神杯といはひ祭りてたふとびかしづく所多し。日本の古風にや。神代の巻にいふ所、或は鶴鶴の古事杯ふるくいひ傳ふる事多ければ、神道の祕事にはかゝる事も有べしとぞおもふ。

○蜃氣樓

唐土の詩文にも多く作りてもてはやせる蜃樓といふことあり、又海市ともいふ。海上に雲のごとくに氣立のほりて、樓臺城郭の形をあらはし、其中に人馬往來せるまでも、まのあたり見ゆるなり。唐土の書物にいへるは、是大海の底にある大なる蛤の氣を吐て空中に樓閣のかたちをあらはすなりと。又蜃といふは、其形龍のごときものにて、海

蘇東坡—宋代の詩人建中靖國元年歿す年六十

魚津—下新川郡に在り

城郭—原本すべて城廓に作る

矢間—矢を射出す窓

中に住で氣を吐て樓臺を結ぶなりと。色々の説あり。蘇東坡杯も南海に遊びし時、龍神に祈りて蜃氣樓を見、詩を作りし事あり。唐土にては甚珍しがりて、賞翫することとぞ。我國は四方皆大海にて、何れの國の人も海を見ざる者もなきに、此蜃氣樓は甚稀なり。唯越中の魚津といふ所に、毎年三月の末より四月の間に、天氣殊にのどやかにして、風收り、海上霞渡りて、一面の鏡の打曇れるごとき日に、此蜃氣樓をむすぶ。毎年一兩度、或は多き年は三四度も結ぶ事あり。誠に唐土の人のいへるごとき、海上に煙のごとく雲のごとく次第にむすび來りて、遂には樓臺のごとく、或は城郭の如く、人馬往來せるがごときも、歴々然として見ゆ。北地に我親しく交りし宮島式部太夫と云社人は、折よく魚津にて是を見たり。初は幕を引るがごときなりしが、しばらく見る間に、城郭のごとく、矢倉高塀やうのものも見え、矢間などのごときものも見えしが、又暫する間に、松原の如く、繪に書ける天の橋立などのやうに見えし。夕暮に及び風少し出たれば、漸々に消失て跡かたもなくなりしなり。富山よりは纒に六里を隔てたる所なれば、城下の人々皆見物したく思へども、何時に結ぶもしれがたく、又むすびたる時急に人して告しらすにも、其間には消失て見るべからず。此ゆゑに、魚津近所の海邊の人は、



蜃樓—蜃氣  
樓の事にて  
是は無風平  
穩の日は温  
度又は湿度  
の關係より  
大氣の密度  
なる時に光  
線の屈折に  
つれて地上  
の物體が空  
中に映じて  
現るゝ也

例年見る事なれど、二三里を隔てたる地方の人は、一生涯つひに見ざる人多し。余が越中にありし時も、三四月の間を魚津に逗留して蜃樓を見るべしと人々にすゝめられ、余も亦年頃の望なりしかど、富山にありし比は正月二月なれば、それより三四月まで越中に逗留せん事あまり永々しければ、残念なりしかども見ずして越後にこえたり。越後の糸魚川にて、松山茂叔に此事を語りしに、此人も糸魚川の海中遙に山の出来たるを見たり。漁人のいひしは、これは鹽山といふものにて、折々見ることなりといひしと語られき。余初唐人の作れる詩杯を見て、思ひしは、蜃樓は大洋にある事にて、陸地近き入海にはなきことのやうに心得しが、魚津の地理を見るに左にはあらず。魚津は北海に臨める地なるに、向うの方七八里と思ふ程に、能登國の山を屏風のごとくに見る魚津の海は、東よりの入海なり。海中より蒸登る陽氣向うの山に映じて、色々の形を見るなり。向うに當なく、數百千里見はらしたる大海にては、陽氣のほるといへども、向うの當無れば映ずることなくして、人の目に見えがたしとぞ覺ゆ。伊勢の桑名の海にも、三十年五十年の内には、たまく蜃樓を結ぶ事ありといふ。是も向うに尾張三河の山を受けてあるゆるなるべし。又安藝國にてもたまくはありと云。是も向うに山あり。其外の國にて 蜃氣

向うに—原  
本すべて向  
ふにとあり

樓をむすぶ事いまだきかず。奇を好む人は、三四月の頃越中に遊びて、此樓臺を見るべき事なり。

○佐渡わたり

我が旅行の時は、いつにても五戒を立て、道中記の初に大に書附て、毎日是を見て、堅く慎むことなり。其五戒と云は、渡海馮河夜行異食賤妓なり。是皆旅行の人の最身をあやまち病を得るのものと成り。志ある人は、懼るべき事は深くおそれ、身を全くして長生を得るこそ、藝術をも成就して人を救ひ、後世を恵むことも有べし。此五戒の事も常々よく心得て侵すまじと思へども、其時に臨み、足つかれ、天氣靜なれば、船に乗るべき心も起り、川越しに無理の賃錢をむさほらるゝ時は、是許の川何程の事かあらんとも思ひ、途の繰合によりては日暮ても宿をとりかね、人の馳走の志を無下にせん事を氣の毒におもひては、喰なれぬ異物をも箸を下し、旅路深きつれぐには、瘡病る浮れ女にも一夜を契るなど、是皆其時に當りては、兼ての心の外になりて、跡にては大なる災を得る事なり。此故に、毎日目にふるゝ道中記に書附て、かりそめにも侵さじと慎事



初更一夜の  
八時

なり。然るに、越後國直江津に到りけるは三月八日の事なりしが、今町の旅館松屋といへるに入りぬれば、越中にて親敷交りし松軒といふ人、此間より此の松屋に逗留して居られつれば、旅中の邂逅心なぐさみて打語らふに、松軒いふは、今宵此町より佐渡に渡る船あり、よき便船なればみづからは渡るなり。そこにも佐渡が島一見し給ひなんや。よき道連なればともく、彼島の名所探らんとすむるにぞ、天氣は晴たり、風は静なり、又かくよき便船も有まじければ、今宵出る事ならば、いざや彼地に三五日逗留して風土をも見んものと、例の不了箇出て、何心なく暮過る頃より船に乗りぬ。纔に水手四人乗れり。客といふは松軒主従余師弟のみなり。その外に荷物少々積入て、いと小き船なり。殊に北海は冬より春に至り浪風荒て、海上に船の往來なく、やうく四月初比に至り、船を出す事なり。此比は天氣打續き長閑なればとて、いまだ三月の上旬なるに、初て佐渡に渡らんとする船なり。是は諸方ともいまだ佐渡に渡りし船なき折なれば、其内に荷物を積渡れば格別の利をも得る故に、危きを侵して渡れる船なり。扱初更過る頃湊を出しに、年老し船頭一人送り來て、船中の水主共に云様は、北の空に雲少し見ゆ、又月の色も勝れねば、いかに此程天氣よければとて油断はならず。佐渡に渡るは大事の

上弦の月一  
新月より満  
月に至る間  
に太陽より  
の角度九十  
度となりた  
る頃の月、  
即ち陰曆七  
八日頃の月  
也

海なり。北に見ゆる雲動きなば、中途より急に何方へも船を著べし。佐渡山近くなりても、風起れば佐渡に取附事難うして、北溟に吹放たるゝなり。若き者元氣にはやりてあやまちすなど、繰返しいましめて歸りぬ。氣味わるき事をいふものかなと思ひながら、帆に任せて北海四五里が程出る所へ、北の方の雲と天と接せし所いと黒く成り、上弦の月入る程に、其色ますますあやしくて、風や替れば、水主どもも氣遣ひて、夜明る頃には西風や落ん、東風にや替らんと、口々に評議す、是を聞くに、彌おそろしく、又晝の程北海を見しに、海中より水氣の揚りし事抔思ひ合せて、是は必明日は雨風や起らんと思ひめぐらすに、安き心もなし。其内に風や起り來て、波逆立、船のゆる事箕をひるがごとし。岸遠くは離れたり、殊に夜更ぬる事なれば、四方皆渺茫としてたよるべき所見えす。船頭に、何方にもせよ船を陸に著けよといふに、此あたりには著べき所なしといひて、船頭さへ船をあやどりかねて見ゆれば、今にもあれ雨降りきたり風いよいよあれ來らば、此船忽に覆らんものをおもへば、心のうちやるかたなく、立ても安からず、居りても安からず。此時に日比の五戒思出で、けふはいかなれば此船に乗りてかゝる難海に浮み出し事ぞや、日比書附し五戒はいかにして忘れぬることぞやと、我



悔い—原本  
悔ひに作る

五更—朝の  
四時

川雲崎—越  
後國三島郡  
にあり

ながら悔い怪みて、何卒して一刻も早く恙なくともとの湊へ戻れかしと、心中に祈念し、是より以後は、此事心肝に刻みぬれば、いかなる事ありとも、海の船には乗るまじと獨り心に誓け居たり。されども波静まらず、西にゆられ、東に漂ひする程に、心神惱亂して、誠に諺にいふ、三年の壽命も促りし事を覺えたり。然るに天の冥助ありて、風又東北より吹出て、五更の頃不思議にもとの直江津の湊に入りぬ。其時の嬉しさ、誠に蘇生の心地ぞせり。いそぎ松屋にあり、よもすがらの心勞に身もいたくつかれぬれば、其翌日は終日寢て休息す。誠に此直江津よりは佐渡國まで三十五里の海上なるに、かゝる小船に乗り、まだ春淺きに、限知られぬ北海に浮み、此天氣に逢ひしに、恙なくともとの湊に歸り著ぬるは、不思議の事ともいふべし。すべての常なみの佐渡わたりの湊口は、出雲崎といふ所を第一とす。出雲崎は佐渡の渡り口の町なれば、繁華の地なり。海上も程近く、纜に十八里を隔てたり。又出雲崎より四里東北に寺泊と云所あり。此所も頗る繁華の地なり。此寺泊は佐渡へ第一に近き地にて、十六里の海上なり。此ところむかしは佐渡の渡り口の湊、此寺泊なりき。むかし爲兼大納言、佐渡國へ配流の時、此寺泊の驛にて數日風を見合せて逗留し給ひける時、此里の遊女初君といふを相

玉葉集—爲  
兼の撰進し  
たる勅撰歌  
集

萍水の身—  
浮草の如く  
行末定めぬ  
身

知りたりしに、初君別を惜しみて和歌をよむ。其和歌、今に町の中程の南側に石碑に彫附て残り。碑面を見れば、「物思ひ越路の末の白浪も、立歸る日の有とこそきけ、遊女初君」とあり。是は爲兼の心をなぐさめてよめりとぞ。賤しき身にも限なくやさしきことなればとて、後に玉葉集にも入れられたりとなり。又日蓮上人佐渡が島配流の時も、此寺泊にて七日が間、風を待給ひけるとて、其舊跡の寺も残り。誠に越後國すらむかしより鬼住國といひならはし、我等ごとき萍水の身だにも住はすべき國とはおもひもよらざるに、高貴の身として、越後國をだに海を隔てたる佐渡が島に左遷し給ん心の内いかゞあらん。初君が歌を見るに附ても、其時のことおもひやりて、そゞろに旅の袂をぬらしつ。



東遊記 卷之四

○親不知

市振―越後  
國西頸城郡  
に在り

越中越後の堺さかひに親不知おやしらず子不知こしらはずといふ所あり。北陸道第一の難所なんじよとして、あまねく人のしる所なり。越中立山の裾すそ、北海へ張出たる所にて、市振いちぶりといふ驛より歌といふ所迄を山の下と稱して、二里半あり。立山の裾なる故に、斷巖絶壁にて路徑も附がたき故に、波打なみうち際を旅人通行する事なり。一方は壁を立たるごとき山、一方は大海なり。風無く波靜なる日は、旅人通行する道幅七八間或は十間許あり。又所によりて、半町一町もある所あり。然るに、風起り波荒き時は、直に彼絶壁の所へ波打かけて、通路なし。右二里半のうち、一ヶ所長さ五六町の間、別て道幅狭き所あるを、世に親不知子不知といふ。甚難所にして、親も子を思ふにいとまなしといふ心より、土俗稱し來りたるなり。其間、絶壁の根に岩穴ありて、十間程づゝ置て其穴いくつも有り。波の打よする時は、通行の人此穴へ走り入て、波の引時を見合て走り過。又波來れば次の穴に入て是を避く。



肩輿一駕籠  
をいふ

駒返一通常  
こまがへし  
と訓す親不  
知の東に在  
り

もし北風強き時は、數日を歴るといへども、通行ならずとなり。去々年も、越後の商人越中に越るとて、此所を無理に通るかゝり、中程にて波風殊に強くなり、件の穴に遯入たるに、穴際まで大波打かけて、走り過べき隙なく、八日が間其穴の中に居、やうく波風静り、命たすかり、其穴を出たり。其間の饑渴、心遣ひ、いふに詞なしと語れり。波高き日無理に通るかゝり、穴中に避隠れて出べき隙なく、二日三日穴に居る人は年々多き事とぞ。余が通行せし時は、雨天にて波風はさのみ強からざりしかども、上の山は傾くがごとく聳え、寄せ来る波は足を引去れば、其恐しき事今に忘れず。余が友富山の佐伯某、此所を通りしには、其身は肩輿に乗り居しが、人足二三十人にて其肩輿を守護し、波の間を走りぬけては穴へ隠れ、走りぬけては穴に隠れて、やうく過しと語れり。惣じて此邊の人足は、波を避けて走ること妙を得たり。されば此地の人夫大勢を召連れ行時は、大抵の波風には滞ることなしといへり。扱此親不知を過て、少し山のふところゝ人家ある所を歌村と云。其村を過、又波打際を行けば、駒返と云難所あり。此所は波風無き時といへども、常に山の根へ波打かけ、通路なりがたきゆゑに、絶壁の中半に岩を穿ちて細き路を附、旅人通行す。其間纜の所なれども、馬上なりがたき故

惣髪一月代  
を剃らず、  
全髪を頂に  
束れたる髪  
の結方

昔  
そのかみ一

に、駒返と名附く。馬は兩方の驛より牽來り、荷物は其纜の所を人夫にて送り越すこととなり。歌村より一里半にして、青海といふ驛あり。此所は山下を通りぬけて少し廣みなり。市振より青海まで、四里の所難所なり。風波の時は、王侯の勢にても越ること成難し。誠に一人是を守れば萬夫も過ることあたはざるの要害の地なり。故に市振は御領所にて、關あり、往來の人を改る。余醫者にて惣髪なる故に、別して叮嚀に吟味ありき。誠に左もあるべし。他所と違ひ、一方は大海、一方は萬仞の高山南の方へ數十里連り聳えたれば、廻りても通るべき道なし。天險とはかゝる所をいふべし。かほどの難所なれども、夏の頃天氣格別晴朗にして、風波静なる日は道路に少しの高低もなく、絲を引たるごとき波打際の事なれば、難所ともしらず、唯風景のよき所とのみ思ひて通行する人多しとなり。

○義經の笈

そのかみ、源九郎義經、兄頼朝の怒に逢ひ、身の置所なきまま、古き親しみなれば秀衡を頼んとて、忍びて奥州に下り給ふに、東街道は途の守り厳しければ、北國路を十二



平泉寺衆徒  
一平泉寺の  
僧徒、平泉  
寺は越前國  
大野郡に在  
り今は村の  
名となる  
三瀬一西田  
川郡今の豊  
浦の内に在  
り

名附る一原  
本なづける  
と訓す

人の作り山伏と成りて下り給ふに、越前にて平泉寺衆徒に圍れ、笛を吹きてやう／＼に其難をのがれ、安宅關にては辨慶の精忠の爲に、富樫の左衛門が情を得て、誠に安き心もなく、辛うじて出羽の國三瀬といふ所まで落著給ふ。此所は奥州の領地にてもや有けん、最早妨げ防ぐ者もなければ、各初て安堵して、少し足を休め、作り山伏の姿も是迄なりとて、皆山伏の姿を解き、此所の氏神の社に詣で、恙なかりし歡を申て、各の笈共を社頭に残し置いて去り給ひぬとぞ。今に此三瀬の社に、義經主従の負ひ給ひし笈七ツ残り。此社第一の寶物として祕藏す。此地は格別の邊土なれば、聞及ぶ人もなく、平家もの語盛衰記等にもしるし洩せり。誠に余も北國を経て奥羽の二州に入りしに、所國々に昔の關の跡残り。其古跡は誠に關所有べき地勢にて、今太平なればこそかく通行するも妨なしと思はる。其中にも、殊に天然の險絶にして、其國隔絶し、此道筋ならでは通ふべき所もなく、扱亦此道といへども、一人是を守らば萬夫も過る事あたはじと思はるる所は、越中越後の堺なり。俗に親知らず子しらすと名附る地なり。此所は越中立山の麓の海中へ流れ出たる所なれば、其險阻は云はでもしるべし。故に、今も此所は御領地にて、市振といへる關をすゑられて、往來の人を正す事なり。同じく賀州よ

鼠關一羽前  
國西田川郡  
今の念珠關  
村の内に在  
り

平泉一陸中  
磐井郡に在  
り其城跡は  
平泉驛高屋  
の北、高館  
趾の南に遺  
れり

りも東の限なれば、堺の關といへる有りて、甚厳しき事世の人のしる所なり。扱夫より東には、越後と出羽の國堺に鼠關といへる有。是は海邊なり。山より行には葡萄峠と云ありて、此山中にも小き關數々あり。此羽越の堺も實に天嶮にして、前にしるす通りなり。それより出羽の秋田領と奥州津輕領の堺に、矢立峠と云あり。此所にも兩所の關所有りて、出入甚嚴重なり。先大抵、北邊にては、此三箇所を隔絶の天嶮といふべし。義經いかに奇妙の武將といへども、此地を通らざれば奥州に入ること叶ふべからず。其内矢立峠は、秀衡の居城平泉よりは奥なれば、通行に及ばざれども、前の二箇所は是非に通らば、其外にとては通ふべき道なき事なれば、定て心をくるしめ給ひぬらし。平坦の加賀越前だにもかまりし上は、其餘の危さいふまでもあるまじきに、恙なく越えく、既に鼠關を出れば、羽州の地なれば、懐に入ぬる心地ぞしぬらん。此三瀬にいふ所は、鼠關を出て六七里、つるが岡までは四里の所なり。安堵して姿を改給ひしも、けにとぞおもはる。其笈今に残る所七ツあり。軍書には十二人の作り山伏といへるに、其數の足らざるは仔細も有るべし。又秀衡の古城跡平泉の中尊寺に、龜井六郎が笈なりとて、今に唯一ツ残り。七人の衆は此三瀬にて笈をおろし、龜井杯は



猶其まゝに奥州まで負ひ行たるにや。

○胡沙吹

爲家―藤原  
爲家として定  
家の子、鎌  
倉時代中葉  
の歌人  
胡茄―夷狄  
の笛  
上方―近畿  
の國々をい  
ふ

「こさふかば曇りもやせん、陸奥の蝦夷には見せそ秋の夜の月」此歌は爲家卿のよめるな  
りと云傳ふ。すべて蝦夷人は種々の奇術ありと云。其中に、口より霧のごときものを吹  
出し、或は敵に逢ひ、又は猛獸に出會たる時、此霧をはき、我身を隠し、其難をのがる  
る事あり。是をコサ吹といふなり。又或説には、蝦夷人木の皮を巻て笛を造りて是を吹  
これをコサ吹と云。コサは即 胡茄なり。笛聲に山氣動き登りて、月も曇るといふ。不  
思議なる事と思ひしが、今度北地に遊びて其趣を合點せり。凡北國は惣體風吹ざる日  
はまれなり。殊に出羽の邊に至りては、北風猶更烈しく、海邊沙塵常に起り、虚空も濛  
濛として、青天白日を見る事少し。又外が濱邊は極陰の地なるゆゑにや、海氣常に空濛  
として霧の籠るがごとく、松前邊の海中も平常海霧甚多して、船の往來するにも毎度  
難儀に及ぶ事あり。是をモヤといふ。惣じて羽州より津輕の邊は、空の氣色上方とは違  
ひたるやうに覺ゆ。至極の晴天といへども、空の色青みすくなく、白み勝にてどんみり

北極出地の  
度數―土地の  
の北極の方  
へ斗出した  
る度數の意

とし、日色迄も薄し、青天白日といふ氣色にあらず。余秋田に居たりし時、浪華の中田  
公超此二三年此秋田に來り住す、舊相識なりしかば暫同居せり。或日庭先に奴僕  
古き繻ばんの洗濯して竹竿にかけたるありしが、中田是を指して、此色の空の色に似た  
るを見給へ。我此地に來り二三年に及べるに、秋天晴朗の時といへども、つひに碧瑠璃  
のごとき色を見ず。至極の晴たる日、此ごとく白みたるばかりなり。天色の上方に異な  
るを、そこには心附すやといひし。余は唯暫の逗留故、空の晴たるにあはざるとのみ  
思ひ居しが、是より後心を附て見るに、實に中田が詞の如し。此邊だにかくあれば、増  
て蝦夷地方は陰風常に烈敷、胡塵空に滿るがゆるゑ、「胡沙吹かば曇りもやせん」とよみしも  
うべなり。すべて津輕秋田邊は、北に面したる地面故陰風最甚し。南部の地は北極出  
地の度數は大抵同じ事なれども、東向の地なるが故に、日月の色も、空のもやうも、風  
のけしきも、中國畿内に格別かはらざるやうに覺ゆ。たとへば能登國は加賀越中よりも  
遙に北へ出たれども、南面なる故、反而賀越よりも暖氣なるが如し。其向き方角に  
よりにて、氣候も相違するの見ゆ。又秋田津輕の邊の村民の子供、榎木の皮の如く見ゆる  
木の皮にて、末開きに巻て吹ものあり。其聲甚大なり。是胡茄の遺製なりとぞ。所々



にて見及たりし故一ツ携へ歸りたくも思ひしかども、長途荷物の重きをいとひ、やめた  
り。唯其圖はくはしく寫し歸れり。

○藤樹先生

大溝一高嶋  
郡に在り分  
部侯の陣屋  
のありし所

先生は俗稱中江與右衛門といひて、江州大溝の在中小川村の産にて、分部侯の領地の百  
姓なり。王陽明流の學者なりしが、其德行近時の學者の及ぶ所にあらずとぞ思はる。先  
年余聞し事あり。尾州の一士人用事ありて此邊を過ぎ、先生の墓所小川村に有りと聞て、  
畑うつ農夫に尋しに、畑道なれば知れ申まじ、案内して奉らんとて、先に立て行く。程  
なく小き藁屋に至り、しばし待せ給へとて内に入り、やがて出るを見るに、木綿の新敷  
ひとへ物に、布の小紋の羽織を著たり。彼士人驚きて、扱々叮嚀なる男かな、墓だに教  
へ得さすれば満足なるにと思ひもて行うち、墓所にいたりぬ。彼農夫竹垣の戸を開き、  
いざ入りて拜し給へといひて、其身は戶外に拜伏せり。士人大に驚き、扱は衣服を改め  
著せしは我爲にはあらで、先生を敬するにてありけると心附、扱も汝は藤樹の家來筋の  
者にてやあると問へば、左には候はず、されど此村の者は一人として先生の御恩を蒙ら

なほざりに  
一かりそめ  
に、つひ一  
寸

ざる無し、親をうやまひ子をしたしむ事をわきまへしりたるは先生の御蔭なれば、必お  
ろそかに思ふべからずと、我父母も常々をしへ候ひぬと語る。士人も初は唯なほざりに  
一見の心にて來りしが、此農夫がやうすを見聞するに、今更に心もあらたまり、ねんご  
ろに拜して歸りぬとなり。其後余肥後にて村井氏に親しく交りしに、ある日村井外より  
歸り語りしは、扱も今日は珍敷墨跡を見たり、此國の家老何某の方へ、近き頃江州より  
犂養子に見えし有り。其方へ用事ありて行て、物語の序にふと思ひ出で、そこの御里  
方の御領分に中江藤樹といひし人ありしよし、御存知にもや、其手跡などは所持し玉は  
すやと語り出しに、彼人座を改め、藤樹先生の御事は、我父祖以來尊敬いたし候ひて、  
老父我を愛するのあまり、遠方へかく參るに附て、兼て祕藏の一軸を出して得させぬ。  
御所望ならば見せ申すべしとて奥に入り、禮服に改め、一軸を携へ出て床にかけ、遙に  
引きがりて拜せられぬ。其尊敬かくばかりなれば、我も手あらひ口そそぎなどして拜し  
てやみぬ。分部侯にありては、畢竟領地の一農夫なるを、かくまで敬せらるゝ事、代々  
賢を愛し徳を敬ひ給ふことも有り難く、又藤樹先生も眞の大儒なることもはじめて知り  
ぬと申されし。此二事耳に残りあれば、此度よき序なれば、墓にも謁し、講堂をも一見



神主一牌

縁がは一原  
本縁がはに  
作る

釋菜一畧儀  
の釋奠にて  
孔子及び其  
門人を祭る  
儀式

せばやとおもひて、大溝の東の加茂といふ所より南へ入る事八町にして、小川村に至る。農夫老婆までもくはしく道を教へ、迷ふ事もなく講堂の前に出たり。雨戸とざしあれば、其となり志村周助といふ醫者の許へ案内して、講堂を拜し度由いひ入るゝに、まづ立關へ上り給へといふ。草鞋がけなれば、唯かりそめに講堂の案内をといへど、強て足そぎの水など持來るまゝ、やむ事を得ず、草鞋脚半など解て立關へ上るに、周助出迎ふ。四十ばかりの惣髪なり。茶煙草の世話も行届きたり。余講堂を拜見し、神主をも拜し度由乞へば、周助奥に入り、禮服を著て、講堂の鍵を手に持、いざ來り給へと引連て行く。扱講堂を開きたるに、堂はかやぶきにて、間敷四間あり。書院南面にて十五疊縁がは有り。向うと西脇に押入あり。此書院講場なり。其次對客の間八疊に床あり。其次拾疊、其次臺所なり。正面縁側の上に藤樹書院といふ四字の額あり、分部昌命拜書とあり。十疊敷の間に、朱子の白鹿洞の規則を板に書てかけたり。さばかり相違の學風なるに、此文をかけられたるも殊勝に覺ゆ。押入の内に深衣を著せる繪像あり、釋菜の時の圖と云。其前に厨子あり。其内に神主あり。上箱に、先生姓中江、諱原、字惟命、號願軒、稱藤樹先生、慶安元年戊子八月廿五日卒、葬邑東北玉林寺の三十八字あり。箱の

大洲侯一  
大洲の藩主加  
藤泰興  
官祿一原本  
官祿に作る  
備前一備前  
の池田侯を  
指す

内の神主常法の如し。扱悉く見終り、周助宅へ戻り、いかなればかく此堂を司り給ふと問に、父祖代々門人にして、殊に昔よりかく隣家に住み、今にては先生の子孫も無れば、かくは預り來れるなり。殊更今にてはよき門人もなくなりぬれば、毎月六度づゝ村民を集め論語を講ずるも、某を無理に其人に當られて、勤申なり。又春秋の釋菜も、村中集り勤るにも、某を頭取とせるゆゑ、かく鍵をも預り居る事なり。講堂の修覆は領主より力を添られて、領主も折々參詣あるに、禮服を著せずしては堂中へ入り給はずとなり。夫より先生の出處を尋るに、先生三十餘にて伊豫の大洲侯の招に應ぜらる。先生の老母、船をきらひ四國に渡り得ず、江州に残り居て、先生をあんじしたはるゝ故、やむことを得ず、強て官祿を辭しいとまを願はれしに、侯惜みてゆるしなれば、願既に三度に及びて後、願書を出し捨にして、大洲を忍び出て、歸り去れり。定て追手を向られて、重く罪せられんかとて、直には江州へも歸り得ず、京都に深くかくれて住居ありしが、元來孝心より出たる事ゆゑ、侯も罪し給はず、何のさはりも無くいとまをたまはりぬ。それより江州に歸り、老母を養はれしなり。其後、諸國の諸侯より招ありしかど再び仕へられず。備前の招にも門人の熊澤を出されし。幾程無くて死去あり。纔に四



熊澤一熊澤  
蕃山とて有  
名なる儒者  
也元祿四年  
七月廿七日  
卒す年七十  
三

輕尻の馬一  
本馬の荷の  
半量を一駄  
とする駄馬  
の稱

十二歳なりぬ。此講堂の建しも死去二三年前の事なり。先生の嫡子徳右衛門、常省先生と稱す。多病なりしかど、壽は七十二歳まで保てり。其人子無して中江氏の子孫絶え、今は無し。對馬の家中に兄弟の家ありて、今に中江を名乗るとの噂なりと周助語れり。されども其餘教近郷に深く染み入りて、殊更此小川村の百姓は、年若き者といへども毎夜集會して手習し、かりそめにも酒など打のみ、亂舞音曲などをする事なく、まして博奕などはいふまでもなし。故に、いかなる輕き者といへども物書ぬものはなしといふ。誠に此邊の風儀溫和淳朴にして、見る所聞所感に堪ず、あり難き事どもなり。前の尾張肥後の物語、相違なき事を知る。熊澤先生は其門人なれど、其功蹟をいへば、いふべき所もすくなからず。されども其人も今時は得難しと思はる。此人藤樹先生に従はれし初を尋るに、其頃加賀の飛脚金子貳百兩を預り持て京へ登るに、江州河原市より輕尻の馬をやとひ、榎木の宿に泊る。馬かたは河原市へ歸り、馬のすそを洗んと鞍を解しに、鞍の下より財布一ツ出たり。取あけ見れば金貳百兩あり。馬かた大に驚き、今の飛脚の取忘れたるにこそと思へば、其儘榎木に走り行き、飛脚の泊れる宿に至り、對面し、委敷尋問に、相違無れば其金を取出し返しけるに、飛脚は死したる者のよみかへりたる心

貳分一今の  
五十錢  
鳥目一青錢  
のこと

地して、悦びのあまり、行李より別の金子十五兩を取出し馬かたにあたへ、もし此貳百兩なくば我一命を失ふのみならず、親兄弟までも重き罪に到らん。さればその高恩中言葉のいひ盡すべきにあらねども、先當座の御禮までにおくり奉ると、涙を流し悦ぶに、馬方大に驚きし顔色にて、そなたの金をそなたに取納給ふに、何の禮といふことあるべきとて、手にだに取らず。色々にこしらへいへども、さらに受ずして歸らんとする故、やむことを得ず、拾兩とへらし、五兩となし、三兩となし、段々とへらして、つひには金貳歩となし、せめて是許は我心の悦びなれば受給ふべし。左無くては我心もすみ申さず、今宵もいねがたしと、理を盡し、詞を盡しいふにぞ、此金を受申程ならば貳百兩をも留め置申べし。かくかへし申からは、聊にても謝禮を受るは我心にあらず。さりりとて餘儀なくのたまへば、さらば、鳥目貳百文を賜はるべし。是は今夜やすむべき所を是迄追かけ來れる賃錢なり。是は我とるべき錢なれば申請べしといひて、貳百文にて酒をかひ、其家の人ふるまひ、我も酔程のみて歸らんとす。飛脚も感に堪かね、さるにても、そこはいかなる人にておはすと問ふに、名ある者にあらず、又何一ツ知れる者にあらず。唯我在所の近所に小川村といふ所あり。此村に與右衛門といふ人おはして、夜



講釋一原本  
釋を尺に作  
る

ごとに講釋といふことあり。某も折ふし行て聞侍りしに、親には孝をつくすべし、主人は大切にするものなり、人の物は取らぬものなり、無理非道は行ふべからずなどいふ事常々語り給ふにより、今日の金子も我物にあらざれば取べき理無しと心得し迄のことなりといひすて、歸りぬ。飛脚はそれより京へのほり、いつもの宿に到り、扱も此度は辛き命いきのびて、各方にも對面することなりぬとて、有し次第をくはしく語るに、折ふし其家の裏に、熊澤治郎八田舎よりのほり居て、學文修行最中の事なりしが、此物語を聞て、其人こそ誠の儒といふものなりとて、其翌日すぐに江州に到り、小川村を尋て、隨從を願はれしに、人に教申べき程の學徳なしとて、さらに隨從をゆるし給はず。熊澤ひたすらに願ひて、二日が間藤樹の門にたくすみて歸らず。藤樹の老母是を氣毒がり、よしや先内へ入れ申せよとありし故、いなみがたくて内へ入れ、つひに師弟の契約をせられしよし。其後藤樹を備前より招き給ひしに、其身は病身なりと堅く辭し、門人熊澤といふもの有り、御役にも立べき者なりとて熊澤を出されけり。いづれも格別の事どもなり。長物語なれど、藤樹先生の事跡くはしくしらぬ人も多ければ、見聞及所を書附ぬ。江州に遊ぶ人は、必彼講堂見るべき事なり。

○阿古屋松

實方中將の尋説給ひけるといふ阿古屋の松は、昔は奥州と聞しに、今は出羽の内に屬して、山形の城下より坤の方とも覺て、二里ばかりを隔てたり。其地を千歳山と云。其松今も昔の色見えて、常盤の陰榮え茂りて、誠に目度度木にてぞ有ける。塘雨が遊びしは五月五日あやめの節句なりしが、此邊より山形あたりの婦女子、近所あたりに行かふに、布にてつくり、藍もやう有る物を疊みて、必人ごとに手に持り、怪しく思ひて人に問に、所の人答て、昔は是をかぶりて往來したるに、いつの頃よりか、近世の風にて、手に疊みて持許になりしなり。是は上方にいふかづきなり。されど下女なるものはかづくまじき身分ゆゑ、今も手に持事だもなし。唯家童子なる者のみ持ことなりと云。實も、昔繪の巻物などに、女の物語する圖などに、市女笠きて、單のかづき打かぶりたるが、吾妻からけしたるなど思ひ合されて、ふるめかし。すべて奥州筋にては、童の事をワラジといふ。されば人の妻女を家童子といふも古代の詞なるべし。すべての事の昔の佛残りたるは、都遠き片田舎にありといふべし。

實方一藤原  
實方也一  
條天皇頃の  
人、從四位  
上左近衛中  
將に至り陸  
奥守に貶せ  
られ長徳四  
年任所に卒  
す  
かづき一被  
衣、俗にか  
つぎといふ  
物也  
市女笠一中  
高なる塗笠



東遊記 卷之五

○秋田路

事によりて  
一事につき  
ての意か

世に秋田杉と云寫本有りて、秋田の蕨の事によりて書けるものも有り。我秋田を過しは三月の末にて、其蕨いまだ不出といふ。唯大指のふとさ程なるは、諸方にて食せり。それすら上方にてはいまだ見及ざる蕨なり。但其性甚薄く、たとへば竹に似たり。上方の蕨のごとく、中まで實したるものにあらず。それゆゑ、鹽漬又は糟漬杯にしては薄く平たくなりて、見たる所にも賞翫なし。故に京都大坂杯へは送り登す事稀なり。彼地にて聞に、六七月の比盛に出るとなり。最大なるは、秋田城下より十里許隔りて、長木が澤といふ所ありて、其澤に生ずる蕨長六七尺に及び、ふとさ平皿に満る程なり。かの秋田杉にいふ所のものは此所の物なりと云。實に寒國なれば、三月頃は一切の青葉いまだ不出、蕨のふとさを見ざりし事残念なり。惣じて秋田に限らず、仙臺、南部、津輕、松前の蕨皆大なり。就中、蝦夷地に入りては、馬上にて往來するに、蕨の葉傘のごと



虎杖―いたどり  
 烏頭―とりかぶとの根  
 車前草―おぼばこ  
 獨活―うど  
 仙臺萩―千代萩也、葉の形エンジュに似、高さ二三尺に及ぶ草の名

く頭上に覆ひかゝるとなり。ふとさも壹尺貳尺廻りのもの多しとぞ。秋田津輕邊極て北地の糸、松なく、竹なく、其外の草木にも無きもの多し。鳥類も中國のごとく多からず。唯虎杖、烏頭、車前草、獨活、仙臺萩等甚多く、且肥大にして、上方にては見ざるものにて、目を驚せり。又熊笹甚多し。深山は皆是なり。彼地にては根曲り竹と云。蝦夷地にてはシヤコタンと云。蝦夷にあるは最大にしてふとし。長八九尺、ふとさも杖程なるもの多し。奥州の内にて黒き狐を見たり。上方には無きものなり。蝦夷地には有るよし兼て聞り。純黒なる狐の皮は最珍重する事なり。我見たりしは、あまり見事なる黒色にてはなかりし。

○朱谷

奥州津輕の外が濱に平館といふ所あり。此所の北にあたり、巖石海に突出たる所あり。是を石崎の鼻といふ。其所を越えて暫行けば、朱谷あり。山々高く聳たる間より、細き谷川流れ出て、海に落る。此谷の土石皆朱色なり。水の色までいと赤く、ぬれたる石の朝日に映するいろ、誠に花やかにて、目さむる心地す。其落る所の海の小石までも多

辨柄―紅殻に同じ

辰砂―水銀と硫黄との化合物にて多く土状をなす

極月―十二月

く朱色なり。此邊の海中の魚皆赤しと云。谷にある所の朱の氣によりて、海中の魚或は石までも朱色なること、無情有情ともに是に感ずる事ふしぎなり。余もあまり珍らしさに、谷川を傳ひ、奥深く入りて見るに、朱彌多し。土を掘りて見るに、其色益あざやかなり。大なる朱石を打碎き、少く袖にし歸る。其石乾く時は、朱色少し黒みありて、辨柄の色のごとし。此谷の入口には柵ありて、人の入ることを禁じ、守る人ありて、領主の益とせられし事なりしが、卯の年の饑饉に、外が濱わけて甚しく、此あたりは人種の盡たりともいふ程の事にて、守るべき人もなければ、又盜取る人も無し。余が遊びしは僅に三年の後なりしが、柵も破れて守る人なく、通路自由なり。よき時節に來りしともいふべし。極上品の朱砂辰砂には及ばずとも、人近き國にあらばいかばかりの益ならんかし。

○化石溪

越前國大野領分の山中打波村といふ所に、何にても石に化する谷あり。余も彼地に遊ばんとせしかども、打節極月なりしかば、通路雪に閉られて至る事あたはざりき。其邊の



人にくはしく尋問に、大野の城下より、山道九里にして細き谷川あり。其水の流に、諸器物何にても半月或は一月程入置時は、皆石と成る。筆紙下駄草履膳碗の類にても、皆石となるとぞ。余京都にて、先年、木の枝に雪の積れるが其雪ともに石となりたるを見たり。半紙壹束をわらにてつかねたるが、其わらともに化して石と成りたるをも見たり。是皆此谷にて作りたるものとぞ。其頃思ひしは、極陰の地の水に寒氣の時久敷漬置て石と化するにやと考へしが、左にはあらず。夏日にても同敷石となるとぞ。それはいかにして化することぞと委敷尋究るに、谷川の水より沫のごとき物流れ來りて、漸々に其物に粘著して石と成るとなり。然れば、其谷の奥に玉液有りて流れ出、物に附て石となるにやと思はる。蠻夷諸國の事を書し書を見し事の有りしが、其中にも、蠻國の内に諸物の石に化する地あることを載たり。此谷も其類にや。

○浮島

出羽國山形より奥に、大沼山といふ所あり。其山主を大行院といふ。修驗道にて俳諧の數寄人、俳名を鷹窓といふ。此山の縁記を聞けば、人皇四十代のみかど、天武天皇の

みたらし  
御手洗

形相—現象

朝、白鳳年間、役行者の開基にて、蒼稻魂神勸請の地なり。此山にみたらしの大池あり。大沼と名附く。是は池の形大の字に略似たるをもて名附しとかや。此池に奇妙の靈異あり。世間未曾有の奇事なれども、かゝる僻遠の地なる故、尋入る人も稀々にて、知る者すくなし。いかなる事ぞといふに、池の中に六十六の島ありて、其島時々水面を遊行す。島の數六十六といふは、日本成就の形相といふ。其昔行基菩薩も此池に至り、實方中將も此浮島を見物し給ひしとぞ。實方遊ひ給ひし時、四ツの海波靜なるしにや、おのれと浮て廻る島哉と詠置給ひしといひ傳ふ。池のほとりに古松一株あり。一株を實方中將の島見松といふ。實方此松に倚りて島を見給ひしとなり。其時明神感應ありて、池水を卷上げて松の根までそゞぎしとて、一株の松を浪上松といふ。浮島常は池の岸に引附て、渚のやうに見ゆ。其中にて最大なるを奥州島と名附く。其餘の島々も皆國々名ありしかど、今はまぎれて、何國といふこと、しかとわからず。唯一所池の中へ突出たる岸根を、菅原島といふ。此島ばかり動かす。昔より同じ所にあり。又池の向うの方の右の方によりて浮みたる色黒き木の株のごときものあり。是を浮木と名附て、天下の吉凶を占ふとぞ。浮たる時は



天下太平の象なり。沈みて見えざれば、必變を示すと成り。塘雨が遊びしは五月上旬の事なりしが、俳諧の交厚ければ、大行院主のもてなしを得て、一日池邊に出て見るに、水面藍よりも青く、水際には蘆萱生ひ茂り、いとゞさへ山深く人跡絶たる土地なるに、いと物凄く静にて、世外の思を觀ぜり。時夏の半なれど、此邊深山にて寒氣強ければ、藤、山吹、躑躅など、折しり顔に咲亂れて、鳥の嘯までのどやかなるに、心なぐさみて、今や島々の浮出るかと思はなたで詠居けれども、水面には唯三四尺許と、七八尺許の小島二ツのみ有りて、さらに動く氣色もなく、外に島々の數々有るやうにも見えず。日暮るまで守り居けれども、それといふべき事もなし。早日影も西山に傾き、鳥は樹に宿し、雲は高峯に歸れば、いと物すごくなりゆく程に、空しく大行院に歸りぬ。主僧待得て、島遊を拜み給ひしにやと問に、いや其事も無りしといふにぞ、主僧日によりて遊び給はぬこともあるなり。猶逗留して、又の日こそ拜み給へといふ。塘雨いと怪しみて、島の浮遊ふといふはそらごととなるべし。世に云傳ふること、さてもなき事をも珍敷やうにいひなして人を迷はしむるは、世に多き習なり。此池の不思議も其たぐひなるべしと、いとほいなくて其夜は臥たり。其翌日起出て見るに、天氣殊に

たゞに徒  
に  
晝のまうけ  
晝食の支  
度

ほがらかにて、たゞにやむべき心地もせざれば、朝とくより晝のまうけなどを懐にし、けふは終日池に臨みて、ぜひ其不思議をも見届けん、例の二木の松の本に箕居して、池の面を見渡したるに、きのふ見たりし二ツの小島見えず。こは怪し。さるにても動けばこそと、空頼母しく、出るまゝの發句など口ずさみ居ける程に、こなたの岸根少し動くやうに見ゆるにぞ、さればこそと目もはなたず詠居るに、一ツの島とわかれて浮み出つゝ、靜に池の中にはなれ行くさまいと目ざまし。又しばし有りて、向うの岸根はなれ出て、こなたに浮み來る。かくてそこより浮み出る程に、池の中に數々の島出來て、遊行往來す。其さま、物有りて島を負ひ廻るがごとし。目さめ、心動きて、悦しさいはんかたなし。中にも彼奥州島にてもや有らん、二三丈餘にも及びていと大く、其島の上には小松生ひ茂り、藤の花咲かまりて、つゞじに色を争ひながら浮み出て遊行するさま、不思議といふもあまりあり。面白さ限なくて守り居るに、其島直に岸に附くもあらず、右に寄り、左に赴き、心のまゝに遊ぶ。又跡より出来る島、先の島に行きたるに、よの常ならば俱に押行べきに、左はなく、先の島おのづから傍によけて、行べき島を通すなど、誠に心あるさまなり。終日見居たるにも、いかなるゆゑといふこと

赴き一原本  
趣き作る



いとまして  
一暇乞して  
也  
湯殿山一羽  
前東田川郡  
月山の半腹  
に在り

をしらず。さて有べきにあらねば、大行院に歸るに、主僧も浮島を見たることを賀して、浮島の發句などを乞へり。其翌日はいとまして立出るに、江戸の旅人四五人湯殿山登山して歸るさ、此浮島を見物せんとて來れるに逢き、きのふのことを語れば、是非今一度伴ひ申べしといふにぞ、いまだ餘興も盡ざれば、又同道して再び彼池邊に至り見るに、きのふ見し數々の島もなくなり、纔に二ツばかりぞ浮み居て、少しも動く氣色みえず。塘雨は益信じて、やがてぞ遊行すべし、見給へといひて待居けれど、さらに動くべき色もなければ、旅人大に退屈し、いたづらなる所にひま入りては明日の道のつもり悪し、はや行べしとて、むなしく去れり。いと殘多きことなりき。

○大骨

余が奥州に遊びし頃、南部の内宮古近邊の海濱に、ある大風雨の翌日、人の足ばかり長さ五六尺ばかりなるか、肉はたゞれながら指もいまだ全うしたるが流れ上り居たり。魚類かと思ひ、人の足に相違なし。いかなればかく大なるものぞと、其あたりの人驚き怪しみ、其頃其邊専らの取沙汰なりき。余是を聞て考ふるに、南半田村の大骨といひ、其

外にも村里の氏神などに祭れりといふ神體、格別に大なる骨などあり。又古塚などを開きたるに、大なる頭骨を掘出せしこと、奥州邊にては多く聞り。西國北國邊にてかゝることを聞し事なし。奥州にては、かゝる骨を、頼朝の頭又は田原の又太郎の頭など、其外往古の鬼神の骨なりといひはやせど、つらく思ひ見るに、全くさせることにはあらず。むかしの人とて、今の人にかはることなければ、名高き人にてはさほど大なることとはたえて無き理なり。余萬國圖を考へ見るに、日本の東の方數千萬里の外に、巴大温といふ國あり。俗にいふ大人國にて、其國の人は長ケ數丈に及び、過し年、阿蘭陀人諸國をめぐりしついで彼國に至り、水を取らんが爲に陸に上がり見るに、砂原に足跡あり。其形數尺にして、人間の如くにあらざりしかば、恐れて逃歸れりといふ事もあり。又其國に漂流せし人つひに歸りしことなしとも見えたれば、必日本の東方に當りて大人國ありて、其國の人は身のたけ一三丈にも及びたることと聞ゆ。殊に奥州邊ばかり大骨打あけて、西國北國に其事なければ、必定彼巴大温の國の人、漁人などの舟の覆りて海中に死せし骨の、昔も大風雨に日本の東海邊に寄り來りしを取上て、あやしみ恐れて神にも祭り、塚にも納めしと覺ゆ。今度の南部領の大なる足も、彼國の人の漂流せし



仔細一原本  
子細に作る

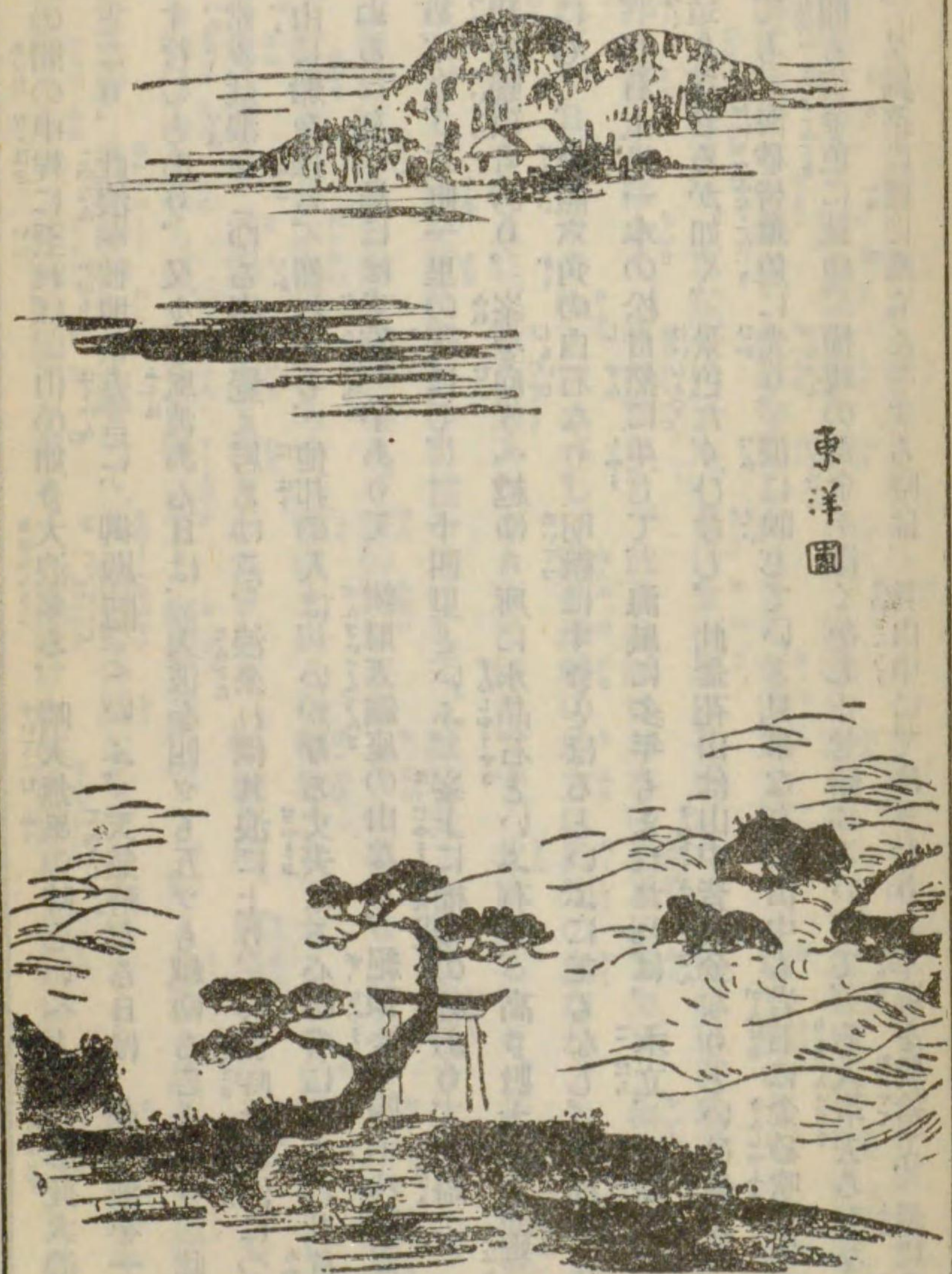
が、大波浪に足のみ打切られて、大風雨に日本の海まで流れ来りしなるべし。北方には小人國ありて、身の長三三尺許といふ。さすれば南方に大人國無しともいふべからず。唯格別に大にして、人情も世界とは相違せるゆゑ、いまだ其國の通路ひらけず、其仔細明らかに知れざるなるべし。近年は、段々に、阿蘭陀萬國を乗り廻りて、諸蠻夷の國に通路ひらけたれば、つひには大人國も知らるべきにや。

○金華山

こがね花咲  
一萬葉集卷  
十八大伴家  
持の作、す  
めろぎの御  
代榮えんと  
あづまなる  
陸奥山に黄  
金花咲くと  
あるをいふ  
迫門一海峽

奥州金華山は、日本に黄金の出初し山にて、其むかしこがね花咲とよみし所なり。其地又日本東方の限にありて、景色無双の地、實に仙境ともいふべし。仙臺より東の方に、東海廻船の入る大湊あり、石の巻といふ。頗る繁華の地なり。其石の巻の渡波といふ所より、磯を傳ひ、山に登り、大なる峠を越え、行程十餘里にして、山鳥といふ所に至れば、船渡しの小家あり。金花山向うに見えて、是金花山への渡り口なり。晝より後は浪高くして渡りがたしとて、皆朝とく船を出して渡るとなり。其渡り纔に三十町許にて、向うの山手に取るやうに見ゆれども、迫門の事ゆるに、浪甚高く、大に危き海なり。此三

金華山の圖



東洋圖



十町許の間の中程に至れば、山の如き大浪來る。晴天無風の時といへども、必此大浪は寄ることなり。此浪を彼地の方言に、御殿隠といふ。天氣靜なる日は、此大浪を一ツ越えてすむことあり。又少し風波ある日は、大波を四ツも五ツも越ゆることなり。此所の船は常々此浪をこゆる事を覺え居るゆゑ、浪來れば其浪に上り、浪引時は其浪につれて、自由に船を操る。然れども、他邦の人は、いかなる丈夫なる心の者にてても、此危さに堪かぬるなり。島には寺院一字ありて、辨財天鎮座の山なり。絶頂まで四十八町といふ。島めぐり、六町一里の詞にて、三十四里といふ。峯上に權現の社あり。箱崎とて天女出現の靈窟もあり。峯を向うへ越ゆる所に水晶石といふ有り、高さ數十丈、廻も數十丈にして、全體六角の白石なり。明徹にすぎとほるといふにてもなし。然れども奇品なり。其石上に一本の松自然に生じて、海風に多年もまれたれば、木立、枝ぶり、人作にて造りなせるが如く、景色たぐひなし。此金花山は山中皆黄金なりといひ傳ふ。けに今にても、海砂皆金色に光り、波に映じていと見事なり。山中も岩石に金砂吹出で、道路の間も皆金色に見ゆ。權現の黄金を深くをしませ給ふといひて、旅人取去る事を堅く禁す。又歸路に船に乗らんとする時は、其山中にてはきたりし草鞋を脱捨て、船に乗

る事なり。是も草鞋に附たる砂金を陸地へ渡すまじき權現の思召ゆゑとぞ。此邊の海にては、海苔、和布、鹿角菜の類を多く生じ、海邊の民是を取りて産業とす。又海鼠を生ず。此海に生ずる海鼠は、金砂を服したりとて金海鼠と稱して、乾し堅めたるを萬邦に傳へて、人皆珍重す。京などにてても、眞の金海鼠は甚得がたく、得れば甚珍重す。誠に其形他邦の産よりは小く、味格別なり。此島は誠に日本の正東に當りて、海中に突出たる所なれば、日本の東の極といふべし。南部津輕の地方は奥州の奥なれども、仙臺より眞北に向うて入るゆゑに、數百里入れども東には出でず、北に入るなり。此邊は仙臺より程近けれども、海を離れて東に出たる地にして、誠に是より東は限無き大海にて、三千里五千里には國ある事なき所なり。波の大なるも尤の事なり。すべて海中の難所といふは、打開きたる大海にはあらず、唯山と山との幅狭くなりたる所を迫門といひて、潮勢も急に成り、波浪も逆立て渡りがたきなり。幅狭き所、底淺き所のみ恐ろしく、余なども初は海を渡らば、随分里數短く、幅狭き所の、しかも底淺き所をこそ選ぶべしと思ひしが、赤間關の渡を越えて、其潮勢の猛なるをおそれしより、松前の渡り場の急潮を考へ合せ、諸國の迫門を乗りて、底淺ければ浪逆立、幅狭ければ潮急なるを知

選ぶ一原本  
撰むに作る



選りー原本  
撰りに作る

りて、唯海は廣く深き所を選りて乗るやうになりたり。理はよく知れたることなれども、實境に逢ざれば心得違ふ事も多きものなり。

○七不思議

彌彦ー西蒲  
原郡に在り  
今彌彦村と  
いふ

越後國彌彦の驛より南に入る事五里にて、三條といふ所あり、甚繁華の地なり。此三條の南壹里に、如法寺村といふ所あり。此村に自然と地中より火もえ出る家二軒あり。百姓庄右衛門といふ者の家に出る火もつとも大なり。三尺四方程の圍爐裏の西の角に、ふるき挽臼を居ゑたり。其挽臼の穴に、箒の柄程の竹を壹尺餘に切りてさし込有り。其竹の口へ常の火をともして觸るれば、忽竹の中より火出て、右の竹の先にともる。又強く吹消せば、即きゆるなり。其火常の燈火のごとし。長さ壹尺ばかり、ふとさは竹の筒程にて、たとへば二三百目の蠟燭をともせる如く、光明甚強し。此火有るゆゑに、庄右衛門家にはむかしより油火は不用、家内隅々までも晝のごとし。挽臼に差込置たる竹を續けば、其火何方迄も行きてともるなり。されど水の如く前後左右へわかれては不出、唯一方のみなり。外へ氣の洩れざるやうに竹を續ぎて導けば、遠くまでも及ぶなり。

印矩ー印を  
捺すに用ふ  
る定規、木  
にて作れる  
小き曲尺の  
如きもの  
たゆるー原  
本たえると  
訓す

陰火なるべしやと疑ひて、懷中に有りし印矩を取り出し、件の火に近けしに、常の火のごとく印矩少しやけこけたり。歸京の日のもの語の種に、やけ残りし印矩持歸れり。其昔はいつのころより出せめしと尋るに、正保二年酉三月此家にてふいごを吹しことあり。其時ふと地中より出しこのかた、今天明六年丙午の年に至り、百四十二年の間一日も絶ることなく出るなり。初て出し時に、挽臼をふせしかば、是を取らば、もしや絶ることも有べきやと氣使ひて、此家普請などある時といへども、此挽臼を動かすことなしといへり。誠に數代の間、此家のみ油火を用ふることなく、又少しの物をば煮、或は焼にも事足りて、大なる寶といふべし。又此如法寺村より十里あまり東北に、カラメキ村といふ有り。此所にも出ると云ふ。余は如法寺村にて委敷見たりし故、其カラメキ村へは行かず。かゝる事唐土にてもありて、あの方にては火井と名附るといへり。日本の地にては、他國には無き事なり。

一、臭水の油は、芝田の城下より六里ばかり東北に黒川といふ村あり、其黒川の東南五六町ばかりに蓼村といふあり、其所に鯛名川といふ小川あり、其川端に少しの岡有りて、杉林なり、其所に小き池有りて、其池に油湧くことなり。其油のわく池、此地に五十餘

芝田ー新發  
田と同じ越  
後國北蒲原  
郡に在り



五貫拾貫一  
一貫は今の  
拾錢也

ありといふ。余は入口の所四ツ五ツを見る。池の大き四疊敷許、或は五六疊七八疊敷許にて、あまり大なるは無し。其池の水中に油わき出て、水と油は別々にきは立て見ゆ。水中にある時見れば、其色銚色なり。日に映じては五色にきらめけり。其上に小屋をかけ、雨の入らざるやうにして、此あたりの里人各此池を領して、毎日油を汲取り、猶少し水の交りたるを、カグマといふ草を以てしほり取る時、油と水とたやすくわかるゝとなり。よく湧池は、毎日油二斗ばかりヅ、を得るといふ。此油灯火に用ふるに、松脂の氣ありて甚臭し。故に臭水と名く。灯火の光は甚明らかなれど、油のへること速にして、しかも少し臭氣あれば、價は常の油の半なりとぞ。然れども、此所より毎日數十斛の油出るゆゑ、此國にては多く此油を用ふ。誠に地中より寶のわき出るといふべし。されば、此邊の人は、他國にて田地山林などを持て家督とするごとく、此池一ツもてる人は、毎日五貫拾貫の錢を得て、殊に人手もあまた入らず、實に永久のよき家督なり。此ゆゑに池の賣買甚貴し。今年も油よく湧池一ツ拂物に出たりといひしまゝ、いかほどの價にやと尋しに、金五百兩なりしといふ。扱其カグマといふ草はいかなる草ぞと問ふに、京都にてシダ裏白草などいふものの類と聞ゆ。其草を夏の間に多く刈、貯置

おのれと一  
自然と、ひ  
とりでに

て、冬に用ふとぞ。

一、鎌鼬といふことあり。是は越後の國中に、いづれの所にも、打節有事也。老少男女の差別なく、面部又手足杯を太刀にて切りたる如く、おのれと切るゝ事なり。疵の大小定らず、或は豎、或は横にて、見事にきるゝなり。されど骨の切るゝことなし。又格別血の出るといふにもあらず、唯寒熱強く發し、時疫傷寒のごとく、其時、其地の傳來にて、古き曆を黒焼にし、さゆにて用るに、數日の間に平愈し、疵の後も見えずなほるといふ。此鎌鼬に出合ふ事、或は何方の堤、又はかしこの辻など、其所大抵は定りてあり。然れども、何のわざといふことも知れず。此事越後にも限らず、奥州出羽佐渡などにもありといへば、北地陰寒の瘴毒人にあたるにやといふ。又或人の説には、鎌鼬にはあらず、かまへ太刀なり。此氣のするどなる事、太刀を構へて切るゝことなるゆゑにいふと、是は僻説なりとぞ思はる。唯深き理屈もなく、むかしより云ひならはしたる名にてあるべし。廣大和本草などには、此漢名を考へ出せり。さる事にや。

一、波の題目といふは、寺泊の海中にあり。むかし日蓮上人佐渡へ配流の時、海上に書給ひし妙法蓮華經の文字今に残りて、法華信心の人、船に乗りて其所に至れば、波の

寺泊一越後  
國三嶋郡に  
在り、今の  
寺泊町



上方一原本  
上み方に作  
る

東奥紀行一  
長久保支珠  
の著にて一  
巻あり

上に題目あらはるゝとなり。  
一、逆様竹は、むかし親鸞上人、此國へ配流の時、携へ來り給ひし杖を、さかさまに地にさし、我説所の法世に弘らば此杖の竹再び榮ゆべしといひ置給ひしに、其杖さかさまながらに枝葉しけり、其後其根に生ずる所の竹、皆逆様なりしとなり。今は其古跡のみ、鳥屋野といふ所に残れり。

一、八ツ房の梅は、文田といふ所にあり。一ツの臺に花實八ツ咲みのる。不思議のものとてはやせしに、近き頃は座論梅とて上方にも多くなりぬ、是等をあはせて、七不思議とはいふなり。猶此外に、三度栗とて一年に三度實のる栗あり、又繋ぎ樵とて、親鸞上人絲につなぎ持給ひし樵の實を植られしに、今に至りかやの實に絲の透りたる穴ありといふ。又七ツ坊主八ツ瀧とて、八ツ時分に見れば瀧の如く見え、七ツ時分には坊主の形に見ゆる山ありなど云。其山を問へばさだかに知れず。大抵方俗のいひ傳へにして、委敷は辨じがたし。  
一、弘智法印の遺骸甚奇物なり。諸方へ持出て開帳をもなし、又東奥紀行にもくはしく其事を載て、既に印板に行るれば、今こゝに略す。

東遊記 卷之五末

○平泉

奥州平泉は、むかし奥羽二州の太守鎮守府將軍秀衡父祖三代居住の古城跡なり。仙臺の城下より行程二十四里餘北の方にして、前に北上川衣川を受け、うしろは高山幾重ともなく重り、實に要害の地なり。秀衡清衡抔建立せる中尊寺今に存在して、昔の佛まのあたりに見えてあはれなり。此山を關山といふ。麓の街道に昔關所ありて、衣が關と名づく。此故に、此山を關山といひて、中尊寺の山號とせり。此近邊の里を、今にても上衣下衣といひて、民家あり。衣といふ里に流るゝ川ゆるに衣川とも名附け、衣の里の關所ゆる衣の關ともいふなるべし。安部貞任が籠りし衣川の城は、此中尊寺よりは一二里ばかりも山に入りてあり。又義經の住給ひし高館は、直に此關山の下にて、纔に街道一筋をへだて、中尊寺より五町に近し。高館の跡は甚狭く纔の所にて、中々當今の城郭杯の如き跡とは見えす、唯暫時義經の住し屋敷の跡といふべし。今は草木生茂りて、芭蕉

當今の城郭  
一當代の太  
守の城



芭蕉の發句  
一夏草やつ  
はものども  
が夢の跡

金賣吉次一  
註、一五〇  
頁に出づ

慈覺大師一  
傳教大師の  
弟子にて比  
叡山第二世  
の座主

の發句のごとし。此あたりは龜井六郎が塚、鈴木の三郎が塚等あり。皆古松一本づゝありて明白なり。辨慶が古跡もあり。又中尊寺の鎮守白山宮のうしろより少し西へ行けば、物見の亭の古跡あり。此所より見おろしよろし。向うに見ゆる山を陣場張山と云、二ツの地名となれり。是は頼義義家、貞任宗任追伐の時、陣を張れる所と云。又それより手前に見ゆる野を長者が原と云。金賣吉次信高が屋敷の跡とて、今に郭石少し残れり。又東北の方に高く見ゆるはたばしね山なり。西行の「聞もせずたばしね山の櫻花、吉野の外にかゝるべしとは」とよめる山なり。櫻多かりしが、今にては歌のごとくはあらず。余が京を出る時、佐々木長春、陸奥にはたばしね山とて、櫻多き山有りといへり。花の頃ならば、必尋ねて見るべしとて、和歌などおくらぬれば、奥州の地に入りてより、日尋求めて、やうく此所にて尋得ぬれど、花無くて本意なし。されど一しほに昔思はれて、例の腰折などつゞる。それより中尊寺に詣でて、諸堂順拜す。此中尊寺は弘台壽院とも云ひて、東叡山の末寺、開基は慈覺大師にして、其後年歴て鎮守府將軍藤原清衡中興なり。清衡は秀衡の祖父にして、此時既に奥羽二州の太守、勢殊に盛なりしかば、此中尊寺を中興して、堂塔四十餘宇、禪房三百餘宇を建立すと云なり。其結構金銀珠玉を

大夫一原本  
大夫に作る

回祿して一  
燒失して

莊嚴せり一  
裝飾せり

ちりばめて、全盛を盡せり。此事堀河院鳥羽院等の叡聽に達し、遂に大治三年丙午按察使中納言顯隆卿を勅使として此國に下し給ひ、御願文の草稿は右京大夫敦光朝臣、清書は冷泉中納言朝隆卿にて、今に此寺の什物とす。猶此外に、右大將頼朝の御教書、又北條相摸守貞時、北畠中納言顯家、淺野彈正少弼長政、豊臣關白秀次公等の文書數々有りとなり。みだりに見る事を許さず。扱右の堂塔伽藍建武四年回祿して、纔に經藏一ヶ所、金色堂一字を残せり。是も星霜久敷移り、段々破壊に及びしを、百八十餘年の後に至り、正應元年鎌倉將軍惟康親王歎き思召、北條貞時に命じ、此二ツの堂に、又別に新に覆ひ堂を造り風雨を避け、修營を加へしめ給ふ。其後今に至り、時の國主より代々覆ひ堂を修理して風雨を防ぐ。此ゆゑに、今日に至り、清衡建立の金色堂、竝に經藏嚴然と残りて、むかしの佛有り、就中金色堂は殊の外美麗にして、日光山の外世間此に比すべきもの稀なり。ことごとく布ぎせにして、厚く漆ぬり、其上に金箔を押して、堂中一樣の金色なり。長押の地紋には、螺鈿珠玉をちりばめ、中壇四隅の柱は七寶を以て莊嚴せり。既に五六百年を経てあれば、螺鈿も貝落ち、珠玉も缺損じ、金箔も斑なれど、元來結構丁寧なれば、今に猶あたりをか、やかす許なり。中壇の上には阿彌陀觀



聞ゆる一原  
本聞ふるに  
作る  
宋板一支那  
の宋時代の  
板行

音、勢至等の佛像を安置し、壇中には三人の棺を納む。中は清衡、左は基衡、右は秀衡なり。秀衡の棺の側に、和泉三郎忠衡の首桶を納めて、今に祭に配す。清衡は大治元年丙午七月十七日逝去、其子基衡保元二年丁丑三月十九日逝去、其子秀衡文治三年丙未十二月廿八日逝去すと云。此堂に納る所の什寶數々多き中に、清衡の納めしとて、紺紙に金泥銀泥にて楷書行書ませ書の一切經あり。是は清衡存生の時、自在坊蓮光といへる僧に命じ、一切經書寫の事を司らしむ。三千日が間能書の僧數百人を招請して供養し、是に書寫せしめしとなり。余も此經を拜見せしに、其書體楷法正しく、行法亦精妙にして、漢土の諸名家を集めて書せしむるとも、中々是に勝るべからずと思ふ。彼時分日本にもかばかりの能書多きに、今の世に誰一人聞ゆる無きは、誠に歎息するにも餘有り。其後四海戰爭の事に、穩なるいとまなく、文華地に墜たる故なるべし。其人の不幸ともいふべし。數多き一切經の事なれば、なるべき事ならば、一二卷ヅ、も世間に出したき事にこそ。經の箱は、黒漆に螺鈿にて經の題號をしるしたり。其箱も亦古雅甚し。此外にも、基衡納めし紺紙金泥の楷書の一切經あり。是は世間普通の經のごとし。又秀衡の納めしは、宋板の折本の一切經なり。此外に玉軸の法華經壹部、小野道風の筆跡な

天台大師一  
傳教大師  
顏魯公一顏  
真卿  
將來の物一  
携へ來りし  
物  
金岡一巨勢  
金岡とて醜  
翻天皇頃の  
有名なる繪  
師  
牧溪一南宋  
の僧にて繪  
を巧にせし  
人  
運慶一後鳥  
羽天皇より  
順德天皇の  
頃の人にて

り。是は余見ることを得ず、殊に残念なりき。又天台大師の影像一幅、地は竹布といふものにて、畫は唐人にて、其名知れず、讚は顏魯公の筆といふ。是も當寺第一の寶物として、見ることを許さず。慈覺大師唐土より將來の物なりと云。其外金岡の畫の十三佛、牧溪の觀音等、種々寶物多し。基衡も又最佛法に歸依し、毛越寺、圓隆寺、嘉祥寺等を造立す。佛工運慶をして、丈六の藥師如來、及び十二神將、其他佛像若干を造らしめんとして、まづ運慶方へ使者を遣し贈物す。其品、

- 一金百兩
- 一七間中徑の水豹皮 六十枚
- 一安達絹 千匹
- 一糠部駿馬 五十疋
- 一信夫文字摺 千端
- 一琉羽 百尾
- 一希婦細布二千端
- 一白布 三千端

猶此外に奥羽の產物珍奇を盡して取揃へ、運慶に贈る。運慶是を得て大に悦び、又奥州の練絹を稱美す。使者歸りて此由をいひしかば、基衡又練絹を三艘の船に積て、別に運慶に贈る。運慶悦び、みづから件の佛像をつくり、玉眼を入れて、三年の間に功を終り、



有名なる佛師也

奥州に送ると云。佛像に玉眼を入る事此時より始れりとなり。是等の事にてても、當時平泉の盛なりし事おもひやるべし。秀衡杯の頼朝をだにあなどり居たりしもむべなり。是に附ておもふに、今の世程太平の久敷事もあらず。それに依ては、金銀も世の中にくさんに成りぬと見ゆ。平泉の盛なるにてさへ、右の贈物に金は纒白兩と見えたり、外の物の多きにはつり合はず。又倭乗坊南都大佛殿建立の時も、鎌倉よりの寄附纒に金五十兩と聞及べり。今にては、常の町人の分限にても千金萬金の寄附するものすくなからず。されば今の世程金銀も澤山にて、よろづゆたかにおごれる時は、昔より無きことといふべし。

○三尊窟

伊豆國は駿河相摸の二國にはさまり、箱根より南海中へ二十五里出衆りたる國なり。故にいづるの詞を以て國號とすると云。志摩國鳥羽の湊より此國の下田の湊まで七十五里の海を遠州灘と稱して、日本第一の大洋とす。此下田より西の方に手石浦といふ所あり。爰に奇異の巖窟あり。山の辰巳に向うて差出たる出崎にありて、岩屋の口狭ければ、潮辰巳―東南

朔望一つい  
たち十五日

高き時は舟を入れがたし。故に此巖窟に遊ぶ者、潮引つめて巖窟のあらはれ出たる時を考ふることなり。余が友塘雨霜月の初に此地に遊びしに、折ふし風強く浪荒かりしかば、天氣を見合せ、潮を考て、十五日まで逗留し、十五日にぞかの窟中に遊びし。是は常の小潮にては又入りがたければ、朔望の大潮を待居けるなり。其日は殊に空はれ、風をさまりて、海上波なく疊の上の如くなりしかば、其比彼地に有り合せし諸國の旅客六人、船頭二人を合せて、都合八人、晝前より纒の小き獵船に棹して、海上十町許をへて彼巖窟に臨む。舟人やがて舟を取直し、艦の方より逆しまに窟中にさし入る。是は穴の内狭ければ、舟のふり廻しならざるゆゑ、出すべき時に順になるべき爲なり。扱六七間も入る程は、穴の口にあかりさすゆゑ、物の色目さやかに見ゆ。それより右の方に折り廻れば、日の光も届かず、闇夜のごとし。穴の口狭けれども南海を受たれば、浪殊に高く、穴の内の岩石に當り碎て、水玉飛散り、雨の降ごとく身にそゞぐ。舟二たけ三たけばかり入るよと思ふ比には、向うの方岩高くして、舟をゆり上ゆり下す。くらさはくらし、浪の音は穴の内にひゞきておびたゞしく、その恐ろしさはいはんかたなし。同行の者ども各念佛するばかりなり。然るに、忽然として向うの巖壁きらめくよと見る程に、さ



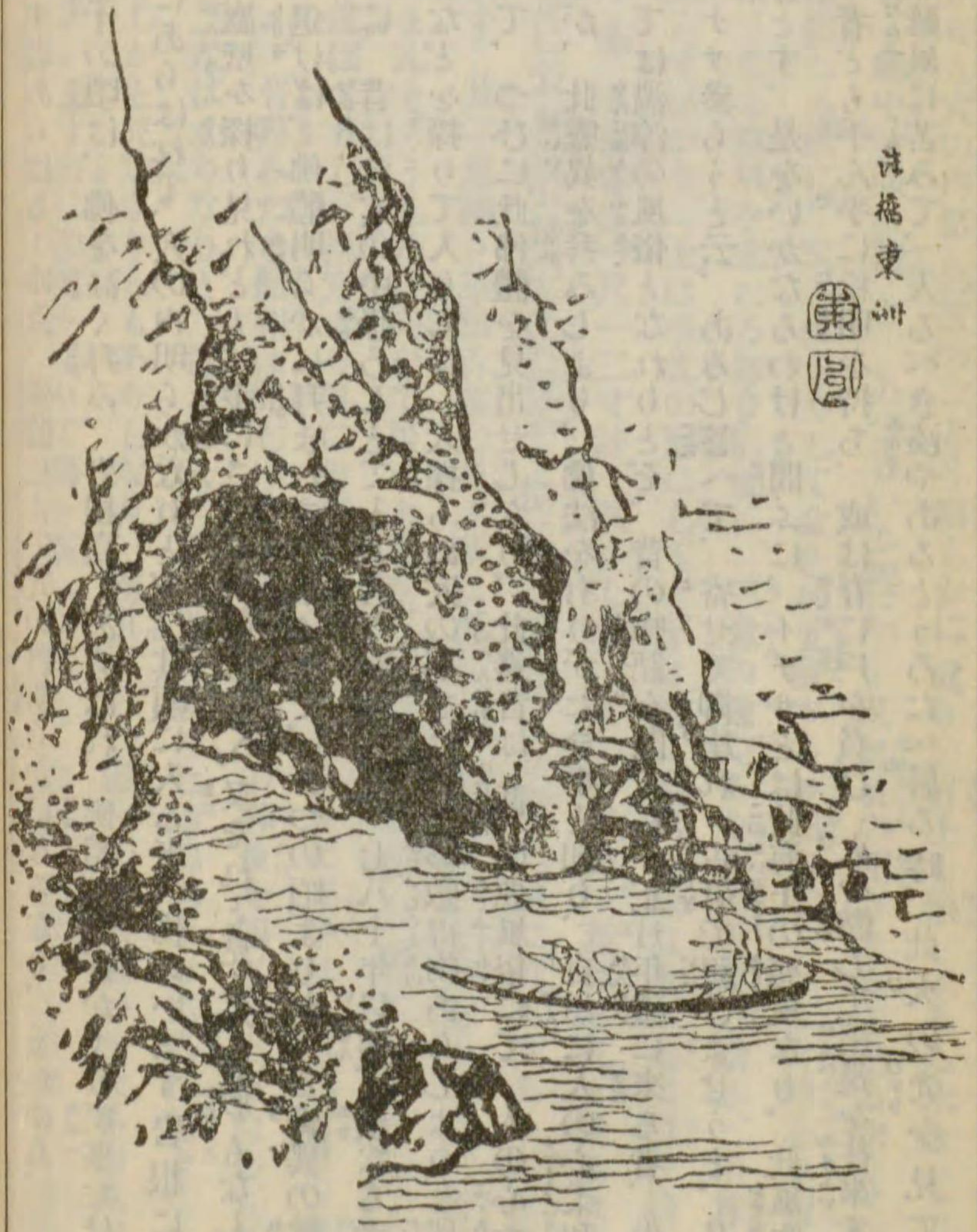
しもにくらかりし穴の内忽、白晝のごとく明らかに成り、打上る浪、玉ちる水までも、皆金色となる。船中一同に驚き、あつといふ程に、又忽眞の闇となりて見る物なし。人々ははと忙然たる所に、又しばらくして金色の光發する事前のごとし。此時心を留めて見るに、向うなる屏風を立たる如き石面に、三尊の彌陀ありくと現じ給ふ。中尊の御長は壹尺五六寸ばかり、上は後光の形にして、下は雲に乗給ふ像なり。前に並び給ふ觀世音と拜み奉る御像は一尺一二寸許、又少し前にはなれて勢至菩薩と見え給ふは七八寸に過ず。世に云來迎引接の尊體現然と慥にをがまれさせ給ふ。誠に目出度ありがたきこと心肝に銘ず。其不思議さ筆頭舌端の及ぶ所にあらず。船頭やがて舟を出すに、塘雨は猶今一度拜まんと、うしろに向ひて居たりしが、暫の内に又初の如くなりしに、其見る所少しも違はざりし。扱穴より外に出て見るに、天日いまだ正午にあり。出て後、同行の者に問ふ。皆拜みたる體相は同じけれども、或は佛の御長を四五尺と見たるもあり、或は二尺三尺ばかりなりと、色々に云。又光明の赫々たるにあまりに恐れ驚きたる者は、佛體をしかと見定ざりしもありしなり。扱其隠れつ顯れつするはいかなるゆゑぞといふに、佛のいます岩に浪打かゝりて佛を覆へば隠れ、浪遠く引退きて岩根まで出わ

ば、佛のいます岩あらはるゝゆゑ、佛體見えて穴の内明らかになるなり。それゆゑ、三月節旬頃大潮干の頃は、佛を高く拜み、岩根高くあらはれ、佛體に浪打かゝり禱事なれば、佛體常にあらはれて、穴の内明らかなりとぞ。其頃に入る者、佛のいます岩根に、舟より上りて巖壁を探り見れども、手にさはる佛體もなく、又それと見るべき形もなし。其岩根を少し退けば、佛體明らかに拜まれさせ給ふとぞ。いつの頃よりかゝる奇異の靈跡ありと問ふに、昔は此穴の中恐ろしとて入る者なかりしが、七八十年前、蟹なる者ふと鮑さゞいなどを探りて入りしに、人探らぬ穴の事なれば、夥敷得物ありしより、一段奥深く入りて、つひに此佛體を見出せしなり。此邊昔は甚の悪風俗にて、人の心おそろしかりしが、此靈異を拜みしより、佛法を有りがたき事と知り、自然に人の心柔和になり、今にては温淳の風俗となれりとぞ。昔の物語を聞くに、正月年禮に来る者、先づ唱へて、イナサ參らうと云。あるじ答へて、寄せて御座れ、古釘で祝ひませうと。是を年始の祝言とす。是をいかなるわけと問ふに、イナサとは此海上の悪風なり。此風吹時は、此邊の者ども手ん手に松明を持ち、或は脊に戸を負ひ、火を燃して濱邊を往來す。沖に行かふ船難風に苦みて、入るべき湊やあるとうろたへ居る時、此火の光を見て、

參らう一原  
本參らふに  
作る、其他  
音便のうと  
あるべきを  
ふとしたる  
所多し



豆州手石三尊窟の圖



は橋東洲  
  


人家やある、船やあると馳來れば、海底の岩に船碎けて破船に及ぶ。翌朝浦々より船を出し、彼破船せる荷物道具を取り掠む。さればこそ、今に至りても、此邊の古き家は、天井板敷なども多くは船の古板もて作りたり。かゝる悪風俗のならばしも、佛法の惠によりて柔和の心に變じけるは、誠に太平の徳化、山の奥海のはてまでも及びて、よき教の行わたりたるゆゑにこそ。此事余の朋友塘雨といへる人、余に少し先達ちて、俳諧の修行、山水の遊觀の爲に、天下を漫遊せし日、まのあたり見及びて歸りての後、笈埃隨筆てふ書をつくり、諸國の奇事をしるし、余にも示し、且又くはしく物語れりしが、其人近き頃かくれければ、其書も散り失ぬべく、其物語も聞知る人もあるまじくなりゆかん事もをしくて、今此書の中に其二事を書くはふるものなり。因に云、余過し年、大坂籠屋町の人檜皮屋佐兵衛といふ者に聞り。其人弘法大師の舊跡を尋て四國遍路せし時に、阿波國より土佐國に越るあたりに、影向の瀧といふ瀧あり。朝巳刻ばかりを影向の時刻として、其頃其瀧に參詣する事なり。其地深山の谷合なるが、朝四ツ時の比朝日東方より出て瀧の水に輝き映すれば、瀧の真中に光明赫やくとして金色の不動尊現じ給ふ。暫時にして又もとの瀧ばかりとなる。かの佐兵衛も參詣して親しく拜み奉れり。

影向一神佛  
 の其姿を現  
 すること



いと難有事なりきと語れり。いつも其時刻は巳刻頃に限れり。信心深き人は拜み、信心無き人は拜む事なしと云。是は天氣の晴曇にもよるべきにや、頗る似よりたる事なり。

○不食病

巨海村一幡  
豆郡西崎村  
の内在り  
西尾一幡豆  
郡今の西尾  
町

三河國巨海村天祥山長壽寺といふは、其昔は魏々然たる大伽藍なり。鎌倉の右大將頼朝の息女足利義氏に嫁して、義氏の室となり給ふ。此ゆゑに義氏三州に封ぜられて西尾に居住し、吉良氏の始祖となる。此室没後堂宇を建立し、寺領をも寄附せられし、則此長壽寺なり。然るに吉良氏衰敗に及びて、寺も段々零落し、今はやうく、名のみ残りて、一字の小庵に地藏尊ばかりを安置し、一人の尼僧ありて香花を供するばかりなり。此庵に住する尼、二十年來斷食の行をなして、奇妙の人なりと、其あたり評判して、參詣信仰の人群集す。余が友塘雨其邊漫遊の折なりしかば、わざく其地に至り、參詣して其容體を見る。顔色は少し青さめたれど、惣身の肉は中人よりは少し肥たるかたにて、言語は少しどもるやうなり。塘雨怪しみ、其あたりに旅宿して、其やうすを聞くに、二

少食一原本  
小食少食一  
定せず

十年來の斷食虚事にはあらず。此尼十四五才の比より少食なりしが、十六七許にて同村に嫁しけれども、病身なりとて不縁し、歸りて其後は尼になりて此庵に住り。段々少食に成り、後には一月に二三度ほど少し食すればよしといひ、其後は段々に不食して、數月の間に少し食することになりて、近き頃は絶えて食せざるやうに成れり。唯折々少しづつ湯を吞計なり。かくのごとく斷食なれども、身體格別につかる事もなく、近き年も信州善光寺に參詣せし數十日の旅行に、一飯も食せずして、歩行も相應にして、無難に歸庵せり。其心より強つとめて斷食の行をするにもあらざれども、自然にかくのごとくなれば、人皆不思議に思ひて信仰し參詣することなり。怪敷事を行て人民を迷す人なりやとて、官よりも疑かまりて吟味の事もありしかど、唯病氣ゆゑのことなれば餘儀なしとて、そのままにあるなり。塘雨あやしみて余に語れり。この病昔の醫書には見えざる事なれども、近き年は世間に多き病なり。香川子も此病を論じて、彼家にては新に不食病と名附たり。余も數人を療せしかど、しかと手際よく愈たることなし。婦人に多くあり。男子にも一兩人を見たり。婦人は人に嫁して、出産にてもする事あれば、其一兩年は常のごとく食して、數年の後はまた不食す。男子にても、婦人にて

香川氏一京  
都の名醫香  
川修庵をい  
ふか



利疾一赤痢  
痢病ともい  
ふ

優婆塞一有  
髮のまい佛  
道に歸依し  
たるもの

も、此病の中に、何ぞ外の病の傷寒時疫利疾等のごとき死生にもかゝる程の大病を煩ひて、其愈かゝりの時には、必ずよく食するものなり。病後一年も過て、氣力常のごとくに復すれば、又漸々に不食に成るものなり。此病はじめは米穀を忌嫌ひ、かき餅、或は豆腐、或は蕎麥等のごときものばかりを少しづつ、食し、或は酒などばかりを吞居て、漸に何も食せざるやうに成るものなり。怪しむに足らず。又一生涯食はよくしながら、糞せざる人もあり。其外奇病怪症天下の内には種々の事ありて、余も見及び、聞及べり。是は我本業の事にて、第一に心を用ひしことなれば、別に病の事にかゝりし事ばかりの珍奇のことのみを書集て、醫話と名附て數卷となせり。此一事は塘雨物語りて、其書集し書にも載たれば、こゝにはしるせしなり。然れども、かゝる奇怪のことには、多くは姦民の人を迷はして金銀をむさほることあり、十に八九は信じがたき事なり。むかしもいつの御宇にかや、一人の優婆塞斷食して佛道を修行し、奇異の靈驗ありと、備前國より奏聞す。帝奇特に思召れ、則召上せて神泉苑に住せしむ。洛中洛外の男女貴賤群集して、信仰參詣す。數日の後は諸國よりも追々に馳登りて參詣するに、其所願成就せずといふことなし。効驗天下に聞えて、上王公より下庶民に至るまで、尊信せず

沙汰一評判

といふことなし。然るに或人ためし見て、彼上人こそ夜ふけてひそかに米數升を水にて飲むと沙汰しけるに、人有て厠をうかひ見しに、米糞山のごとく堆くありければ、扱こそとて、其後は信仰も失せぬ。上人も堪へがたくて、夜にまぎれて何方ともなく逃れ去れり。猶其跡にても、婦女子の類は、米糞上人とて稱し尊びけるとぞ。近き頃の奇特不思議も、多くは此米糞上人の類のみなり。



東遊記後編卷之一

○壺の石ぶみ

名におふ壺の石ぶみは、奥州仙臺の東北多賀城の古跡にあり。即仙臺より松島に至るの道筋にして、街道より纔に二町四十間入り込所なり。南都の墨屋松井某、享保中に道じるしの石を立て、甚明白なり。往昔蝦夷王化に服せず、奥州も大半は其種類の有にして、猶其上にも折々襲ひ來りし比、京都より將軍を遣されて是を鎮めらる。これを鎮守將軍といひ、其居所を鎮守府といふ。此多賀城四達の地にして、其府なり。天平寶字六年大野東人といへる人多賀城を修理し、此石碑を建、四方の路程を記し、見雲真人にこれを書しむ。今に至りては千年に餘る古物なり。殊に其字體甚古雅にして、廣澤が換鵝百談にも稱美し置けり。多賀城修理後數百年過て、秀衡鎮守將軍たりし頃は平泉に居住して、此城は廢し、壺碑も失て、鎌倉殿の和歌よみ給ひし頃は名のみ残れる趣なり。近世伊達政宗より三代目吉村中將の時、此邊方々と尋求られしに、今の碑を土中より

天平寶字六年  
 一淳仁天皇の御宇、  
 紀元千四百二十二年  
 廣澤一細井  
 廣澤とて有名の書家也  
 享保二十年



十二月歿年  
七十八

爾雅一辭書  
の一種にて  
周公の作と  
稱せらるれ  
ど詳かなら  
ず

沙汰一うは  
さ、評判

掘出せりと云。頼朝の時分にも見る事かたきものを、今千年の後に至り、文字も明白に、其石少しも損ぜずして、人々是を見る事誠に不思議の事なり。碑の體、自然石にて、文字を彫たる方計平にみきたり。高サ五六尺、厚サ貳三尺、臺石なし。外に小堂ありて是を覆ひ、四方を格子にして、人のみる様に構へたり。石少し赤み帯て、火を経たるものやうにも思はる。此碑の事は、世上の人皆知る所なればはしくはしるさず。又或人のいひしは、壺はつほと讀字にはあらず、音恫にて、街中の碑を壺碑と云と、爾雅の注にも出たりと云。いかゞあらん。又東の壺碑といふものあり。是は此多賀城よりは七八十里許東北の方、南部の野邊地の近在に壺村といふ所あり、其村に壺山といふ山有りて、此山に石碑あり。村民其碑を尊敬し、社を建て、是を祭り、氏神として往古よりみだりに開く事なし。碑面文字あり。上の方に大字に東といふ字を彫附たりと云。其文はいかなることならん。土民尊敬して、石摺などにする事をゆるさず。故に知る人なし。近年好事の士、此碑を摺り傳へんことを求めども、極遠方の事故、遊ぶ人も稀にて、いまだ世に弘まらず。余も彼地を往來せしかども、其比其邊盜賊の沙汰頻なりしかば、取急ぎて打過し故、其村へもいたらず。今に残念なり。多賀城の碑に西と云大字

扶木集一正  
しくは夫木  
抄に作る、  
藤原長清の  
撰、勅撰集  
に漏れたる  
歌を集む

清輔一藤原  
清輔とて平  
安末葉の人  
治承元年に  
歿す

えぞ世の中  
を蝦夷に  
得ぞをかけ  
ていへる也

あれば、是に對する東の碑有べき事なり。又扶木集、清輔朝臣の歌に、「石ぶみや、つがろのをちにありときく、えぞ世の中を思ひはなれぬ。」又西行の山家集に、「みちのくは奥ゆかしくもおもほゆる、壺の石ぶみ外の濱風」などあれば、是等も東の壺碑にやと思はる。

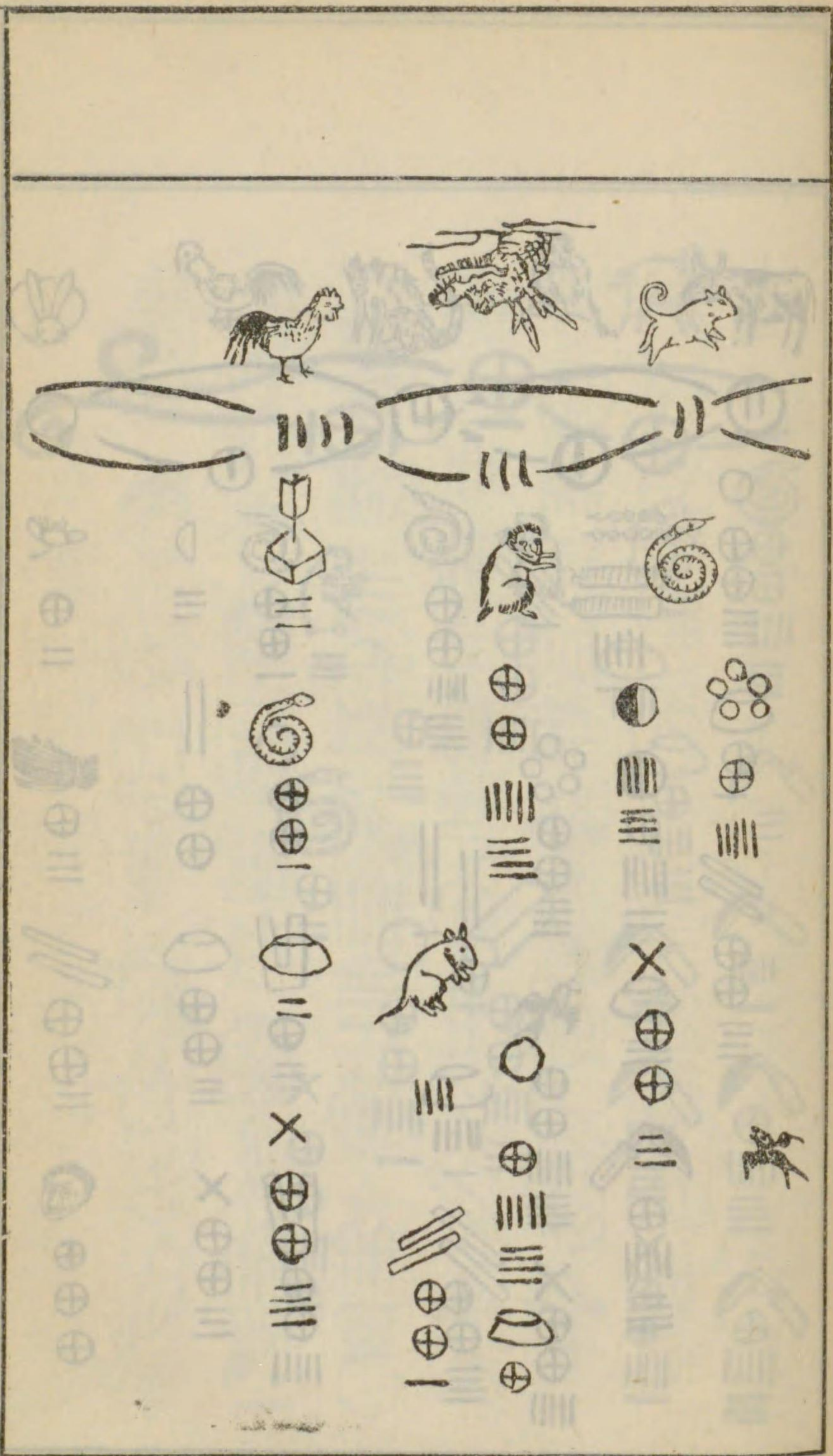
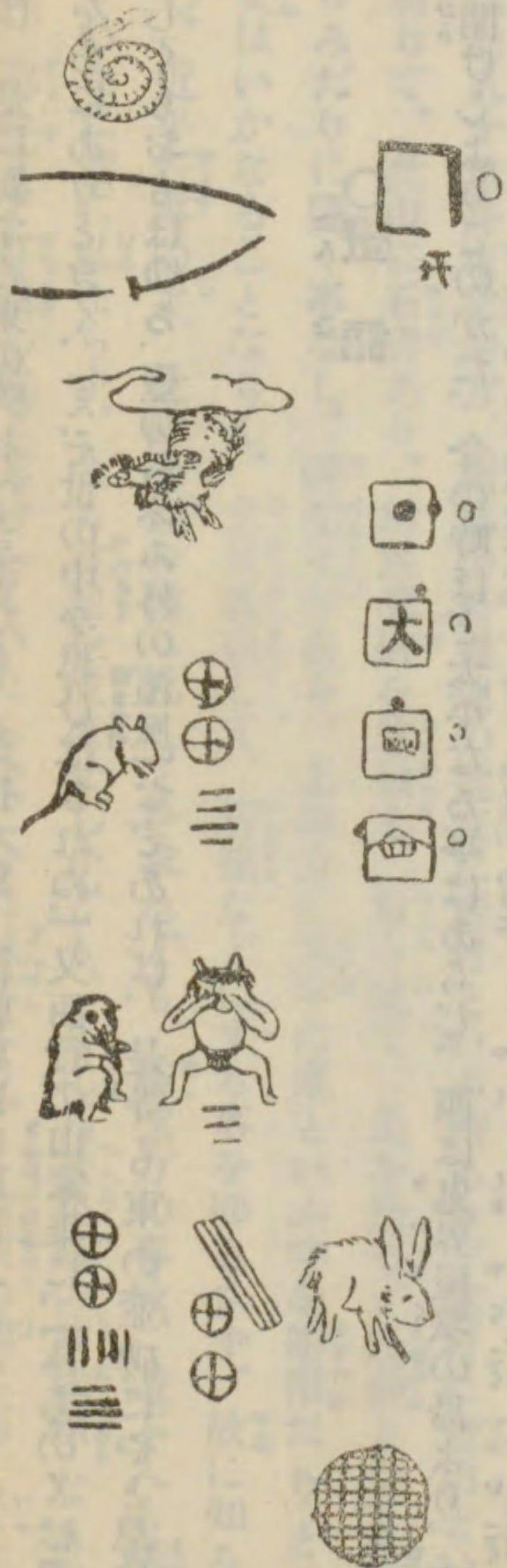
○蠻語

天地開けしよりこのかた、今の時ほど太平なる事はあらず。西は鬼界屋敷の島より、東は奥州の外が濱まで、號令の行届ざる所もなし。往古は、屋敷の島は屋敷國とて異國のやうに聞え、奥州も半蝦夷人の領地なりしにや。猶近き頃まで夷人の住所なりしと見えて、南部津輕邊の地名には、蠻名多し。外が濱通の村の名にも、タツビ、ホロヅキ、内マツベ、外マツベ、イマベツ、ウテツなどいふ所有り。又田名部の地方にも、ヲコベ、ヲ、マ、シリヤなど、其外村々在々の名多くは此類なり。是皆蝦夷詞なり。今にても、ウテツなどの邊は風俗もや、蝦夷に類して、津輕の人も、彼等はエゾ種といひて、いやしむるなり。余思ふに、ウテツ邊に限らず、南部津輕邊の村民も大かたはエゾ種なるべ

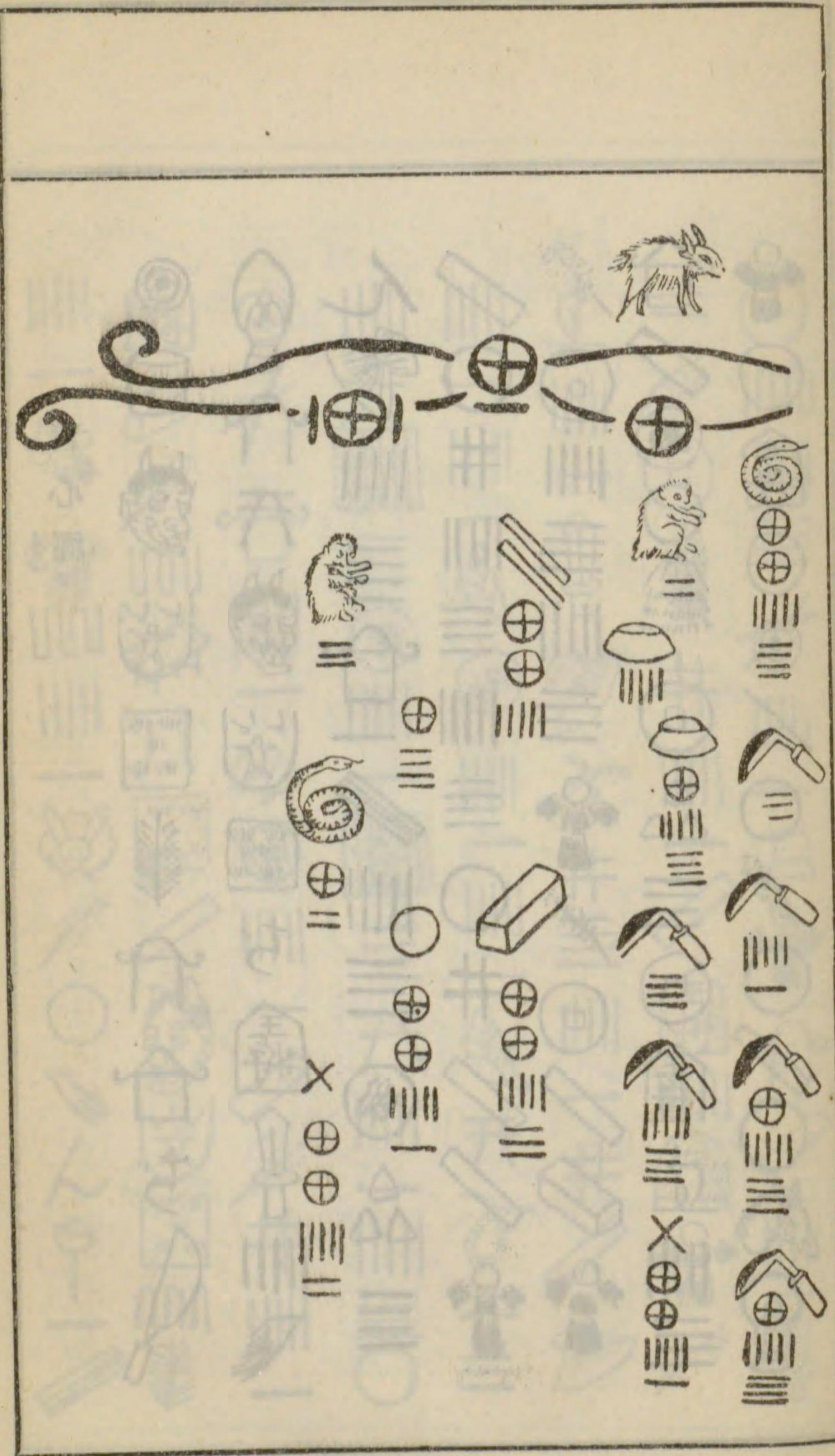
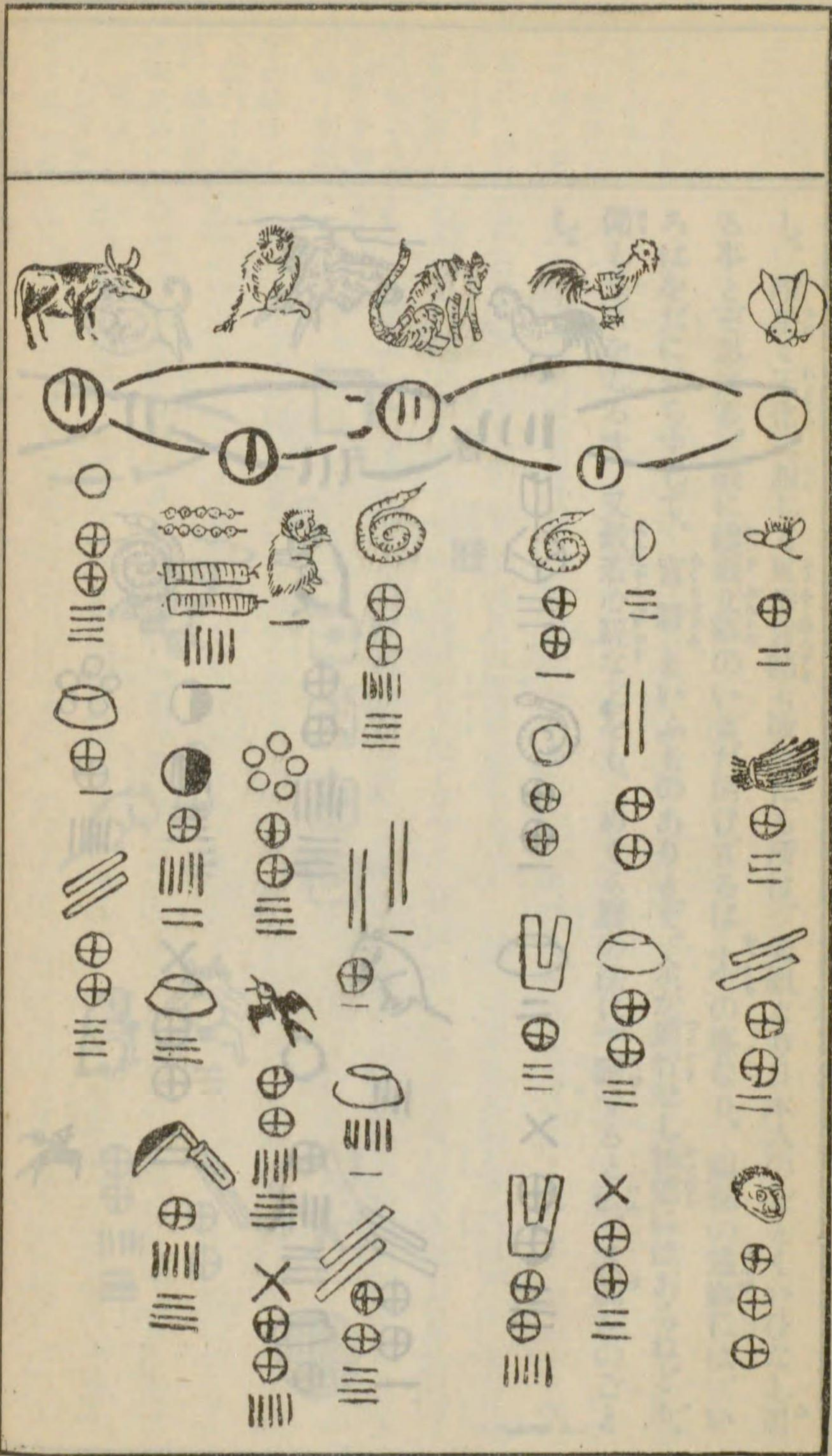


し。唯早く王化に服して風俗言語も改りたる所は、先祖より日本人のごとくいひなし居る事とぞ思はる。故に禮義文華のいまだ開けざるは尤の事なり。南部の邊鄙には、いろはをだに知らずして、盲曆といふものありとぞ。余が通行せし街道にはあらねども、聞しまくをしるす。又般若心經なども、めくら曆の法にて誦すると云。其圖左のごとし。

盲曆

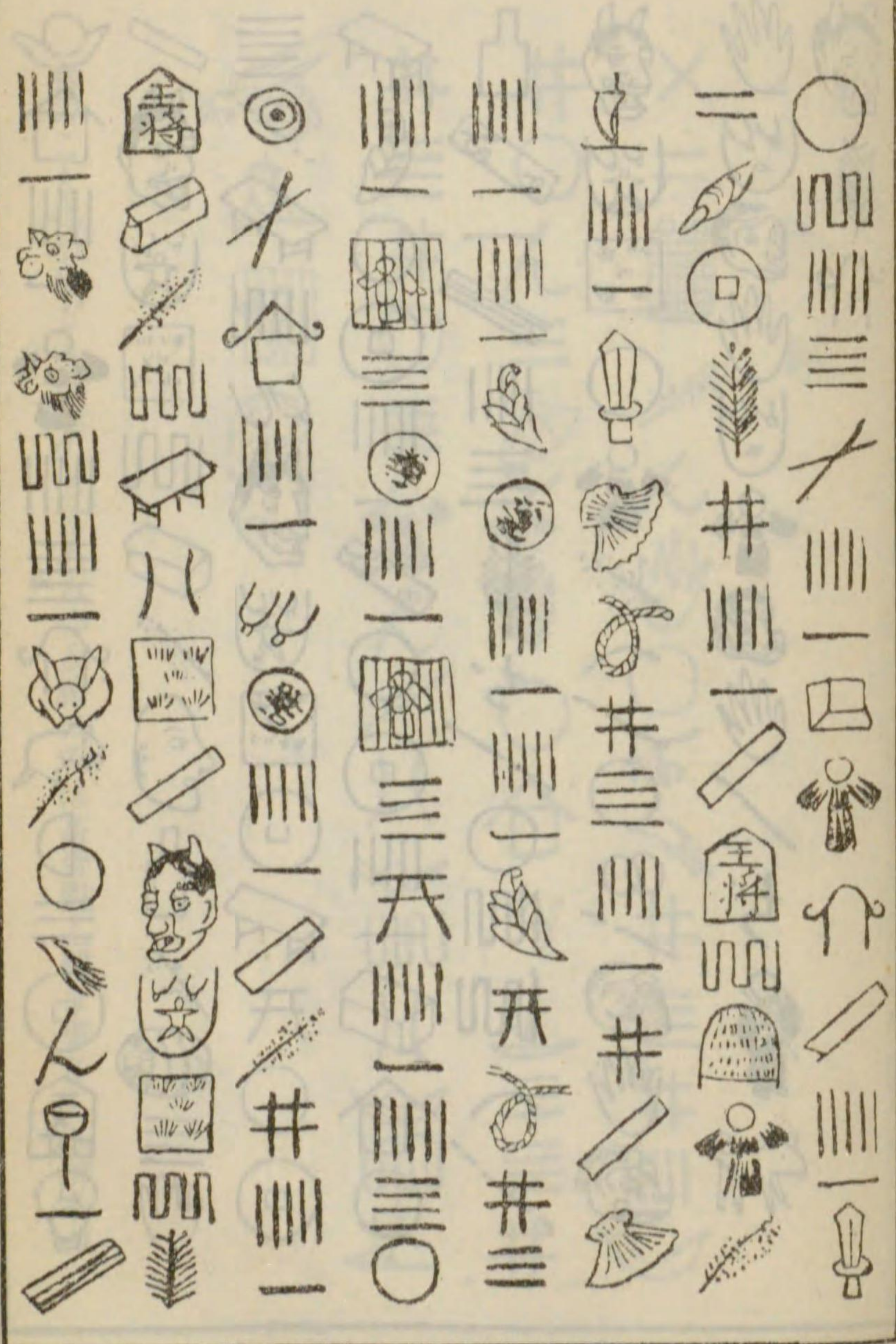
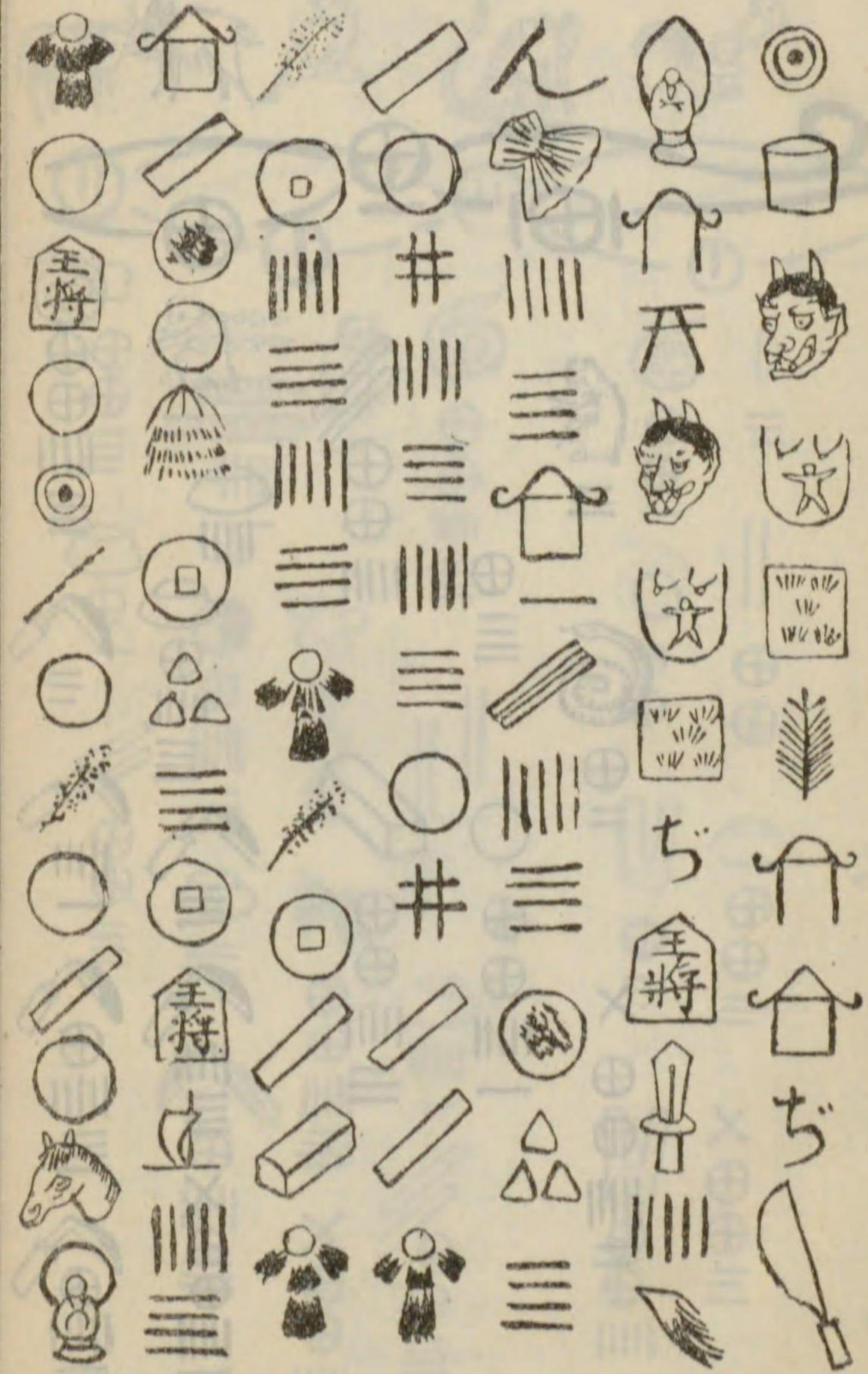








盲心經













○心經原文

摩訶般若波羅密多心經觀自在菩薩行深般若波羅密多時照見五蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不異色色即是空空即是色受想行識亦復如是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨不增不減是故空中無色無受想行色無眼耳鼻舌身意無識聲香味觸法無眼界乃至無意識界無無明亦無無明盡乃至無老死亦無老死盡無苦集滅道無智亦無得以無所得故菩提薩埵依般若波羅密多故心無罣礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅密多故得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅密多是大神咒是大明咒是無常咒是無等等咒能除一切苦眞實不虛故說般若波羅密多咒即說咒曰羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩薩婆訶

結繩の約一  
上古文字の  
未だあらざ  
る時代に繩  
を結びてし  
るしとせし  
事をいふ

右心經の本文なり、引合せて讀べし。是等の事を用ひて、假名文字もいまだ知らざる所は、南部盛岡の城下より七八十里も北西にあたりたる田山村杯いへる極山中の邊鄙なり。誠に古の結繩の約ともいふべし。蝦夷地も唯今に文字無く木に刻を附て覺印と

浪華津淺香山一浪華津  
は王仁の詠  
めりといふ  
浪華津に  
咲くや此の  
化冬ごもり  
今を春へと  
咲くやこの  
花、淺香山  
は采女の歌  
に「淺香山  
かげさへ見  
ゆる山の井  
の淺き心を  
わが思はな  
くに」とい  
へる歌をい  
ふ  
八ツ過る  
午後二時過

するとかや。是等の事にて思へば、西國と東國との文華の格別なる事甚し。九州の山中、いろは假名いまだ知らざる所には、當時も浪華津淺香山の二首を手習ふ事なり。古風をうしなはざる事思ひやるべし。兎角日本は西より開けたりと見ゆ。

○葡萄嶺雪に歩す

天明丙午三月十八日、余越後國平林といふ所を立出、早朝少し雪降る。夫より二里餘にて村上の城下に至る。此所の問屋にて、是より馬を借らんと云に、是より先は雪深く馬足立難しといひて、馬を出さず。三月末の事なれば、いかに雪國なればとて馬足の立たき程の事はあらじ。是は人馬不自由なる故、かくはいふなるべしと疑ひながら、せんかたなく歩み行に、村上一里、猿澤の驛の邊既に雪多し。それより又一里、鹽の町といふ驛にて中食するに、其家の老婆いふには、是より先は雪甚深くしてたやすくは行がたし。今宵は此所に宿り給へといふ。養軒顔を見合せて、いまだ日中にも至らざるに、宿せよといふ、老婆の此家にとめむと思ひていふなるべし。殊に天氣も晴たり。此先の葡萄の驛迄は纔に二里の道なれば、八ツ過る頃迄には行著べしと、あざ笑ひて出た



ふげ田一深

著き一原本  
付きに作る  
此外なほ此  
類多し何れ  
も改めたり

るに、誠に老婆がいへるごとく、鹽の町の出離より雪殊に深く、山川道路唯一面の白雪にて、村離半道許に人の行通ひし跡もありて、目印もありしが、それより先は道筋もわからず、方角をも取失ひて、行べき先をわかかねつゝ迷ひ行に、折々は雪を踏ぬきて川の中へ落入り、腰許も雪の中にあり。或は切り岸などの所に行かへり、雪崩れ落ちて深き所へこけ込などして、養軒と互に助け合つゝ、谷筋の平なる所を道なるべしと志て行程に、谷川、池澤、ふげ田などの中へ落入りては、倒るゝ事數十度に及べり。されども積雪至て深ければ、川の上といへど、身體全く落入ることなし。かく千辛萬苦して、纔に二里の場を半日かゝり、日暮に至りやうく、葡萄の驛にたどり著たり。誠に老婆の詞に従ひ、鹽の町に一宿し、早朝の雪堅きうちに案内者をやとひて來らば、かゝる危き事には逢ふまじと後悔しながら、先恙なくて著しを悦び、湯をつかひ、爐にあたり、寒氣を防ぐに、足より血の流るゝに驚き、思へば、今日度々踏ぬき落入りし時疵附たりしが、其節は血も凍てはしらず、痛をも覺えざりしが、今湯に入り、火にあたゝめて、初て血の出けるなり。其疵の痕今に黒く残り。扱此夜つくづく思ふに、今日の所だにかくのごとし。明日の道は名におふぶだう峠にて、北地第一の雪所なれば、いかなる難

儀にか及ばん。唯早天雪凍て堅き間に、案内者をやとひ越すべしと用意して、十九日まだ明はてぬより立出、案内を先に立、道をいそぐ。誠に聞しに勝りて、數丈の積雪、山は白銀をもて作れるごとく、樹木も見えず。されど案内者有れば道もたどくしからず。雪も凍て落入るの恐もなくして、程なく頂に至れり。此所に矢伏明神とて神祠あり。此所は山の懐なる故にや、雪もやましくなく覺ゆ。神祠の後に巖穴あり、明神の住給ふ所なりといふ。此巖穴の上の方に、甚高き絶壁あり。巖の高さ三十丈餘有りと云。其巖の邊に古木の杉數十本有るに、其杉の梢やうく、岩の半に及べり。此邊は誠に唐畫を見るごとく、奇絶比類なし。雪は一しきりづゝ降來り、寒氣誠に甚し。夫より中村、中次、荒川、小股、小鍋等の村々を通るに、降雪もやみ、空もはれ、天氣殊にのどかなるが、積れる雪は行先いよく深く、數丈に餘れり。村々にて案内をやとひ行に、晝過る比より雪又少しゆるみ、所々踏ぬけて、落入る事昨日のごとし。扱尾國といふ所の前にて大なる峠を登り、夫より下る所あり、甚嶮岨にして、下るべき所なし。案内の者も何れの筋を下らんとためらふうち、雪にすべりて遙の谷底へ落ぬ。余其跡に續きて歩みしが、此體を見て、案内の人のあゆみやうこそあしけれ、雪少しやはらかなりたれば、一足づゝ



宙一原本中  
に作る

力草に一力  
を添へ身を  
支へる料と  
して

おほひ一原  
本おほひに  
作る

足を踏附て、靜に下らば何事かあらんといひつゝ、すゝまんとするに、はや其まゝすべり  
落て、宙を飛ごとく、夢の心ちに一町ばかりもころび落たりしに、雪に埋残れる木の梢  
へ落かまりて留りたり。手足いたみ、腰などうちたれど、そのいたみをも覺えず。やう  
やうと其梢をぬけ出たれど、猶下の谷數百仞の切岸下るべきやうなし。されど又是まで  
落たる事なれば、返り登らん事は猶さらなり、いかせんと思ふうち、力草に持居たり  
し木の梢、其手少しゆるむやいな、又雪の上をすべり落るに、中程よりは首の方逆様に  
成り落て行く。余の梢にかかり居たる内に、養軒は早先に落下りたれば、其上へ落重り  
たり。されども幸にけがなし。其所少し足留りぬれば、養軒と手を合せて上の方を仰  
ぎ見るに、雪山頭の上におほひかゝれば、今や其ナダレの落て、命をうしなはんかと思  
へば、恐ろしく息もつぎあへず、又眞逆様にすべり落るに、千仞の谷底迄唯夢のごとく  
に落著たり。谷底にてはいよく、上の山落かゝるやうに覺ゆれば、唯ナダレの恐ろし  
く、何とぞ一足も早くのがれ出んと、其まゝ谷底を走り行に、谷の底は谷川流れて、歩  
む足の下に雪を隔て、岩打波の音、夥敷びき聞ゆ。雪を踏ぬき谷川へ落入らん事もお  
そろしけれど、それよりも唯上よりナダレの來らん事危ければ、前後をかへり見ず、三

あやふき一  
原本すべて  
あやうきに  
作る

人ともにばらくに成り、唯走りにはしり十町餘をはしり出て、やうく廣みへ出づ。  
川音もやゝ遠ざかり、先命をひろひし心地して、暫休らふ。此所にて漸三人一所に  
成り、互に恙なかりしを悦びぬ。夫より程なく尾國といふ所に著て宿をかる。扱落著て  
後、兩人互に顔を見るに、其色土のごとくにて、動悸もいまだ靜ならず。誠に今日のあ  
やふき事、中々筆には書盡すべきにあらず。命を保てるは是ぞ天助ともいふべし。惣て  
雪國にはナダレといふ事あり、又アワといふ事ありて、年々人の損する事なり。アワと  
いふは冬多し。ナダレは三四月の頃にあり、アワといふは、雪最中降時分に山上の木  
梢より雪泡一ツ落るとき、其アワ段々ころび落るに従ひ、雪こかしをするごとく次第に  
大に成り、麓に至る頃は大山のごとくに成りて落る。是に當るものは、大木も根こぎ  
に成り、折悪敷通りかゝる時には、人馬ともによけさくるにいとまあらず、みぢんに打碎  
かるゝ事なり。ナダレといふは、春の末に成り、地中より陽氣出るに従ひ、數丈積たる  
雪の下よりゆるみ附て、山上よりナダレ落るに、其勢に動かされて、其邊の雪一同に  
崩れ落て、川も谷も埋む事なり。人馬の響又は人聲にてもなだれ落る事ありとなり。是  
にうたるゝ者即死するのみならず、數十丈の雪に埋まれて、雪消盡す迄は知る人もな



岩川に出れば、あゆむべくもあらず。原本之を缺く異本に依て補ふ。此峠昔強盗。此句以下異本之を缺く。強盗出て。原本強盗を出てに作る。

し。此二ツは北地の人の恐るゝ事なり。日頃は唯等閑に聞居たりしが、今日の氣遣、思ひ出すも肝ひゆる心地す。扱此夜、宿の主に、此先にも雪ありやと問に、此先に木ノ股渥美川などいふ所殊に峻岨にして、雪も亦深しと云。扱はいか、せん、此所に雪消るまで逗留せんやなど色々思ひくるしみて、亭主にはかるに、亭主のいふには、是より西北に岩川といふ所あり。是へ出るに間道あり。是は海邊なれば雪至て少し、此近邊唯一里半許雪の中なり。岩川に出れば出羽の濱通の街道なり。されども三里餘のまはり道なりといふ。何三里は物かは、十里二十里にても廻るべし。命有りてこそとて、其翌朝夜こめて、又案内者を頼み、雪いまだ凍れる間に岩川へと志し出るに、いかにも海邊近くなれば雪少し。岩川へ恙なく出て、扱初て虎口をのがれたる心地して、酒など汲で悦ぶに、きのふのつかれを覚え、足腰痛出てあゆむべくもあらず。抑此葡萄峠は羽越の界にて、山の間甚深く、雪中のみならず、四時ともに旅人の難儀する所なり。此峠昔強盗出て旅人あまた殺害し、今も往來の人恐るゝ所なり。

東遊記後編 卷之二

○龍燈

越中新川郡に眼目山といへる寺あり。眼目山と書てサツクワ山と讀む。其わけは知らず。宗旨は禪にして、道元禪師の弟子大徹禪師の開基なり。此大徹禪師此山を開かれし時、山神龍神助力して色々の特ありしよし。今に至り、毎年七月十三日の夜は、眼目山の庭の松の梢に燈火のほる。一ツは立山の絶頂より飛來り、一ツは海中より飛來り、皆松の梢にとまらる。是を山燈龍燈といひて、此あたりの人は例年見る事なり。世に龍燈とて海中より火の出るは多けれども、此寺のごとく、山燈龍燈一度に來りて松の梢に留るは、希有の事なりといふ。越前の敦賀宮の庭にも、龍燈の松とて、例年正月元日の夜かゝる事あるを、其あたりの人は皆見る事なり。

○新潟



ニコ土一軟  
長岡の城下  
古志郡長岡町をいふ  
城趾は本町に屬し多く公園となれり

越後國新瀧は信濃川其外の川々落ちて海に入る所なり。海口近くの一里の所は、川幅廣き事一里二里ばかり、渺々として湖のごとく、入海のごとし。岸より岸まで水甚深く、淺瀬といふものなし。千石二千石の大船といへども、いづくまでも自由に出入りす。誠に川湊にては、日本第一ともいふべし。川幅の廣きも天下無雙ともいふべし。此河を信濃川といふは、此川の水上は信州犀川筑摩川にて、其國善光寺の邊にても、既に東海道天龍川程の大河なり。それより新瀧までは五六十里をへて、其間大小の川々流れ入るゆるゑ、かくばかりの大河となる。されど越後は地勢平坦なるゆるゑ、流甚穩にして、淀河などよりも靜なり。惣じて越後路石無く、皆ニコ土ゆるゑに、川の兩岸も柔にて崩入り次第なり。されども水勢ゆるぎゆるゑに、大に崩る事もなし。其水は常に黄色に濁れり。余は三條と云所より新瀧迄十里の所を、此信濃川の堤通り來りしゆるゑ、此川の體委敷見及たり。長岡の城下より此新瀧迄十六里を、四百石積程の川舟、常に一日づつに上下す。誠に運漕に便利なる事も海内又かゝる川なし。其大なる事日本第一なるに、其名高からざるは、北陸僻遠の地にありて、殊に其川平穩にて奇ならざるゆるゑなるべし。余新瀧の町より又小船をかりて芝出の木崎といふ所迄五里の間を、此川の入江

荷華一蓮の花をいふ

入江を傳ひて乘しに、其間廣き所は二里に餘る所もあり、狭く入込所は纔に二三十間の所もあり、是は本州筋にあらざるゆるゑなり。流甚靜にして流れざるが如し。此日殊に晴天にて、兩岸の景色うるはしく、入江々々には蓮の莖甚多し。夏月には水面一樣の花にて、兒事なる事いふばかりなしとぞ。新瀧の町より舟を浮め、荷華を賞し、又は納涼など、甚繁華といふ。扱船中より四方を見渡すに、西南より東北へ六七十里を見渡して山なし。西北には二十五里の所に佐渡山見ゆ。東方に奥州會津の山見ゆる。かくのごとく、四面打開きたる地にて、北海の廻船出入の大湊なれば、越後第一の繁華の地にて、青樓多くしてにぎやかに、又越後一國の米不殘此湊に出るゆるゑ、諸大名藏多く建。唯北方雪國の事ゆるゑ、冬に成ぬれば河水氷閉て、舟の通行絶え、陸地も雪深く、海上は十月より三四月頃までは廻船も出る事あたはざれば、夏一季住べき國といふべし。

○三馬屋

三馬屋一東  
津輕郡三厩  
灣の西偏にあり

奥州三馬屋は松前渡海の津にて、津輕領外が濱にありて、日本東北の限なり。むかし源義經、高館をのがれ、蝦夷へ渡らんと此所迄來り給ひしに、渡るべき順風なかりし



タツビ一龍  
飛、一に立  
火又達比と  
も書く

かば、數日逗留し、あまりにたへかねて、所持の觀音の像を海底の岩の上に置いて順風を祈りしに、忽風かはり、恙なく松前の地に渡り給ひぬ。其像今に此所の寺にありて、義經の風祈の觀音といふ。又波打際に大なる岩ありて、馬屋のごとく、穴三ツ竝べり。是義經の馬を立給ひし所となり。是によりて此地を三馬屋と稱するなりとぞ。扱此所より松前へ海上十里なり。此三馬屋の西北に當りて、タツビとて突出たる山あり。是より七里なり。されども松前への渡海は、皆三馬屋より渡るなり。此渡たやすからず、海中に別に大河のごとく漲り流る、潮筋三筋あり。南をタツビの汐といふ。其次を中の汐と云。北を白神の汐と云。皆幅は纒なれども、其流の急にして汐先の勢五十里に及びべり。晝夜とも常に西北より東南へ落て、さし引往來なく、あだかも海中に三ツの大瀧をかけたるがごとし。下の方、松前の箱館と南部のヲコベの間の海にては、其汐合して一筋と成り東へ落るゆゑ、いよく急なり。松前三馬屋の前の海底には、大なる巖あるゆゑ、其汐三ツにわかるゝといふ。松前へ渡る船は、至極の順風の強時を見合せて、帆を十分に張り、件の汐の所に至れば、むしろ杯を海中へ抛入て、其ひまに矢を射るごとく横に乗切る事なりとぞ。少しにても風たゆむ時は、此汐に押落さるゝなり。もし落さるゝ

時は、五十里程またゝく間に流れ下りて、大海へ出て、汐の勢少しゆるき所に至りて船をとゞむ。五十里より前方にて船を留る事は、人力にては及ばずとなり。其汐は初にもいへるごとく、常に西より東へ落るのみにて、其理解しがたき事なり。かくのごとき所ゆゑ、我も松前へ渡らんと三馬屋にしばし逗留せしかど、順風なくして得渡らずして歸りぬ。毎日順風なる事もあり。又二十日三十日も順風なき事もあり。それゆゑに、反つて此渡海にては昔より難船なしと云。南部の田名部のサイ或はヲコベの邊より、松前の箱館邊は甚近くして、天氣よければ海を隔て、衣類のほしてあるも見ゆると云。南部のサイ、ヲコベの邊は、三馬屋などよりも大に北東へ出たる地なり。三馬屋より北の方に藍のごとき山々遙にみゆる、是蝦夷地の山といふ。又田名部のヲコベの邊の山なりといふ。其邊實に日本の東北の限なれども、湊にあらざる故、他國の人は名をだにしらす。

○狐の義理

越後村上の近在に、百姓夫婦に娘三人持てり。天明巳年の事なりし山、家内に鼠荒て



マチン一馬  
錢、東印度  
に生ずる馬  
鏝科に屬す  
る植物の類  
子にて有毒  
なる藥品也

巡禮一國々  
を巡りて諸  
所の神社佛  
閣を禮拜す  
ること

物をそこなひければ、マチンを飯にまじへ、鼠に飼ひ、二三疋も取りて庭先に捨たりしに、其夜近所の狐の子來りて、彼鼠を食たるに、マチンをあたへたる鼠なれば、狐も其毒にあたりて死たり。親狐其家のあるじを大に恨み、姉娘に取附て、色々とうらみ口ばしり、數日なやみてつひに死せり。又其次の娘にとり附て、唯一月ばかりの間に、三人の娘死しぬれば、父母甚歎き悲しみ、其夜庭先へ立出ていひけるは、鼠を捨たるは汝が子にあたへ殺さんとの事にはあらざるに、汝が子むさほり食ひて死したり。是元來汝が子のあやまりなるを、此方のしわざのやうに心得、此方の愛子三人までを取殺すとはいかなる事ぞや。畜生とは云ながら、あまりなる事かなと恨かこちけるに、彼親狐此道理につまりしにや、其翌晚庭先に老狐二疋死し居たり。百姓夫婦是を見て、昨夜此方より恨をいひし道理にせめられ、かくみづから死したりと見えたり。不便のわざなりとなけき、つひにそれより無常を觀じ、夫婦とも剃髮し、田地を賣り、家業を捨て、四國西國へ巡禮に出たり。此春其者此邊へも來りしと、越後所々其はなしありけるまゝ書附侍る。

○駿河名

盛岡一原本  
森岡に作る

奥州南部の地は、日本東北の極ゆる、殊に野鄙なり。然れども、其人甚質朴にして、又甚神佛を信ず。就中伊勢太神宮を深く信じ、いかなる貧しきものも、男女とも參宮せざる者なし。余盛岡近所にて馬に乘しに、其馬かたの物語に、我祖父代々駿河と名附といふ。余も驚きて、馬かた杯をする身の父の、いかなればかゝる國名を名乗る事ぞ。御身の父祖はいかなる家筋の人にやと問ひしに、馬かた答へて、此名には深き由來こそ侍れ。某が祖父參宮せしとき、道すがら諸國の景色土風を見及びけるに、其中に駿河國程よきはなしと思ひけるが、歸りての後も猶彼國ゆかしく覺えけるまゝ、みづからの名を駿河と附て、一生を終ぬ。我父も亦、其父の名なれば、同じく駿河と名乗りぬ。某も又、駿河と名乗べきを、在所の庄屋あまり大なる名なりとて、いなみけるまゝ、某はかり又助と申なりといへり。余も覺えず馬上に笑を催せり。誠に是等の事にも、彼地の質朴なること思ひやりぬべし。



○三本木臺

七の戸一陸奥國北郡七戸村  
さばる一原本さわる  
野邊地一北郡今の野邊地町  
八つ幸田山一青森の南七里許にあり通常は八甲田山と書

夫南部の地は廣大無邊にして、何れの國といへども此地の廣きに比すべき所なし。殊に七の戸邊に三本木臺といふ野原あり、唯平々たる芝原にて、四方目にさばるものなし。此原東西凡二日路、南北半日路程ありと云。其間に人家もなく、樹木も一本も見えず、實に無益の野原也。雪中には、此邊の人といへども四方に目印なければ方角知れず、五日も往來やむ事ありとかや。此外にも野邊地といふ所より七の戸迄來るにも、五十町道四里半ありて、東西は猶廣し。此所も唯一面の芝原なり。此原は少し高ければ四方の山々見ゆる。西に八つ幸田山あり。西南には十三四里を隔て、三の戸嶽見ゆ。東南は廿里許をへだて、八の戸嶽みゆ。又遙の南五十里隔て、盛岡の岩鷲山見ゆ。かくのごとく、四方豁然として數百里一望に歸し、廣遠なる事大海を望がごとし。右岩鷲山見ゆるにて、其地の廣平なると、岩鷲山の高きを思ふべし。又一の戸より沼宮内まで、一驛の間道中記にしるす所七里なり。か様に宿より宿へだまり、人馬の繼無き所他の國にはあらず。全體此邊人民甚少し。野邊地より北を田名部といふ。田名部の地は高五千石のよ

廣漠一原本廣漠に作る

し。然るに田名部の地の北海へ出張たること五十里許もあるよし。是にても中國西國の一ヶ國の地面よりも廣し。然るに其高纜に五千石と云。是にて人民の少きを知るべし。惣て南部の地は海廣く、山深く、平地も右に云ごとく廣漠なれば、新に開きたにせば、上の田畑幾千百萬石を得べし。唯極邊土ゆる、人民みたずして、當時纜に十二萬石の地と定られたり。しかも其土地は甚肥たり。唯耕作の人なきを惜むべし。又南部の地に、南より段々、一の戸、三の戸、五の戸、七の戸、八の戸、九の戸、野邊地とて、戸の字の附たる地多し。戸の字を皆へと讀なり。皆三里五里或は七八里を隔て、山に據り、川を受て、要害の地なり。多くは城跡と見ゆ。今にても、戸の字附たる所は皆町作にて賑なり。往古蝦夷を防し關所木戸なりと覺ゆ。それゆゑ、今に至りても猶其名の残りたるなるべし。其内野邊地といふは、北の終なり。又南部の地は、今も六町を一里と云。余初宿より宿の間を尋るに、或は廿五里、三十二里杯いひしに驚しが、後には馴て常に成たり。道平なる所などは、馬に乗りて道をいそぎし事ありしが、南部の地には多く六町を一里と云、六十町を大道一里と云。其地の人に里數を尋るに、其人大道か



錦木 藻鹽 草に云、凡 夷俗求婚、 先立錦木其 女之門、曾 有男女許嫁 未成婚而死 里人哀之、 作塚合葬故 名

○錦木

錦木の古跡は、南部領と津輕領との境小湊と云所の傍にあり。かい道より東南の方へよほど入込たる所なり。其跡にツキと云木の檜木に似て殊に大木なるが一本残り有しが、四五年以前に雷火にて其木焼失せりとなり。又南部三の戸の西の方の在中に、錦木の古跡とて、巡見使なども一見の地ありと云。何れが誠の古跡なるにや。都て名所古跡も仙臺より上方の地に甚多し。津野、南部は甚少し。出羽の國にても、秋田邊は古人の遊びし事なしと見ゆ。唯西行一人は極邊の地にも遊びしにや、外が濱、岩城山等の和歌残り。其外の名所は纔に津輕野、善知鳥宮、けふの里、此錦木の塚など許なり。東の壺の碑、野田の玉川などは、南部の内とも云。南部、津輕、秋田邊は、むかしは皆夷人の住家なりけると覺ゆ。やうく、此二百年許こそは、かく全く日本の地と成れりといふ人あり。

津輕野一中 津輕郡和徳 村の内 善知鳥宮一 青森市の西 在りて外 濱の古祠也 祭神不詳 野田の玉川 九戸郡野 田村の内

○龍鱗

越後糸魚川の近在、黒姫山の麓、姫川の岸に、水に臨みて大なる岩出たる所あり。先年姫川大洪水の時、水引て後、獵師彼岩の邊へ行しに、何とは知らず白く滑なる脂のごとき物多く附居たり。又岩の角の所に、大なる鱗とみゆるもの五六枚附たり。其大さ五六寸づゝあり。何物か洪水に押出され來りて、此岩角に強くすれて、鱗落ち脂も残れるなるべし。誠に此姫川は瀧のごとくなる急流にて、大河なれば、其洪水の勢は、いかなるものも押流さるべし。彼獵師其鱗を取歸り、今に所持せり。人皆龍の鱗といふ。

○蚌珠

山から出るを玉といひ、水に生ずるを珠といふ。唐土にはむかしより卞和が玉、合浦の珠などいひ傳へて、名高き玉ども數々聞え、限無き世の寶ともてはやし、君子温潤の徳などにも比せり。我朝には、昔より格別に名高き玉を聞かず。神代に曲玉などいへど、今古塚より掘出せるを見るに、格別珍愛すべき物とも見えす。又珠玉を産する山川をも

卞和が玉一 韓非子卞和 篇に出づ、 楚人卞和と いふ者の荆 山に得たる



璞也、連城の壁ともいふ  
合浦の珠一合浦は支那の名珠の産地なるより凡て名珠を合浦の珠といふ也  
折ふし一往々  
蚌珠一蚌より出づる珠也、蚌は蛤の類

聞及ばず。唯越後に在ける頃、新潟の人の語りしは、此近きあたりに福島潟といふかたあり。此潟に珠をふくめる貝あり。其大き三四尺わたりもあらん。月明らかなる夜は、折ふし其貝口を開くに、其珠大さ拳の程もあらんと見えて、暁の明星の出たるごとく、光明赫やくとして水面にきらめく。人は近づく時は、忽ち口を閉て水底に沈み、或は口を開きながら水上を矢を射るごとくに去る。其貝出る所定らず。何時見るにも其大さ同じ程なれば、唯一ツの貝と思はる。折々見るものあれども、昔よりある貝にして殊に光あるものなれば、人恐れて取事なし。又あまり程近く見る事なければ、何貝といふ事をしる事なし。唐土杯にていふ所の蚌珠にやと沙汰するのみなり。  
此福島潟といふは、越後にて尤大なる潟にて、徑六七里に餘りて、江州の湖水を見るがごとし。其外にも鎌倉潟、白蓮潟、鳥屋野潟などいひて、越後には潟と名附るもの甚多し。他國には無きものなり。此越後は唐土の江南の地に似て、廣大なる國にて、しかも疊を敷たるがごとく甚平坦なる土地なり。其中に大河流る。其土地甚平なる故に、川の流急ならず。所々にて河水兩方へくほみ入りて溜り水となる。是を彼地にては何方向といふ。皆甚大にして、二里三里四方、或は五六里四方なるものあり。他の國は

洞庭湖一湖南省岳州府に在り支那第一の湖にて楊子江に注ぐ

青草湖一同じく湖南省岳州府にあり楊子江に注ぐ

滄浪の水云々一孟子離婁に有レテ子歌曰、滄浪之水清兮可三以濯我

地狭く、たとひ廣き所にても土地に高下あれば、川水急に流れて、左右へくほみ入のいとまなし。唐土なども、繪圖を以て考ふるに、洞庭湖、青草湖杯、すべて湖といふ者、則越後の潟と同じ趣なり。此故に皆長江に傍て湖あり。北方の地は地面に高下ありて山多く峻岨なるゆゑに、黄河に湖ある事なし。日本にては、唯越後のみ潟あり。其他には無し。但し出羽の八郎潟、常陸の霞浦杯、少し似たれども其實は又異なり。

○養軒が詩

飛馬川の波浪、尾國の雪、羽州の鬼、津輕の饑渴、其外千辛萬苦身の上も危き事度々なりしかど、旅中の艱難はかねて思まうけし事なれば、召具せし養軒もつひに難儀の事を云ざりしが、奥州の地にて、或夜あやしのわらやにやうくと宿をかりて、足すまぐべき湯もなければ、うらの谷川を滄浪の水と見なし、夕暮よりしめやかに降すさむ雨の音に、あすの途さへあんじ過し、眠る心ちもあらざれば、兩人さしむかひて、扱も都を出しは去年の秋なり。いつしかに年暮、春も去りて、今ははや四百餘里を隔てたり。誠にそこの故郷よりは六七百里に餘れる行程を隔てたるも、思へば心細くやはあらぬ。年老



縷滄浪之水濁兮可三以濯我足とあるを引く

しなる一原本しほるに作る

其人一然るべき人

給へる父もいませり。今程はいかゞ居給ふやらん。こなたの事をも思ひわすればし給はじなど、取集ていひ出れば、養軒も打しをれて、此程過來つる危かりし事共語り合ひ、此行先何卒して危き事を侵さず、命全うして、京へも歸り、又國許の老父にも逢たきものを、最早旅もよき程ならずや杯、少し心弱くさしうつぶき居たる折ふし、時鳥頻におとつれしかば、養軒矢立を取出し、

相携千里遠京畿 旅館夜深燈影微  
窓外杜鵑聲切々 請君細聽不如歸

養軒もとより文字の才乏しく、殊に詩歌の道ははまだ學びもせず。されど實境に在りて實情を述るに、余も是を吟じて覺えず悵然として、是より歸をいそぐ事とはなりぬ。初家を出んとする時、門生子皆從んと請ふ。然れども召具するには、其人にあらざれば難儀に及ぶ事なり。第一大勢は悪しく、一人に限るべし。扱數百千里の行程なれば、心弱き者、足弱き者、多病の者、皆あしき。辛苦をいとふ者あしき。大酒する者あしき。短慮なるものあしき。其父母愛に過る者あしき。其主許さざる者あしき。是等の事をえらめば具すべき者甚得難し。西遊の時は越中より來り居し文藏といふ者を具す。此度

選める一原本撰めるに作る 増穂の薄の

は日向より來り居し養軒を具せり。此養軒は、余が西遊せし時、肥後の球蔭にてあるじとせし青井信濃守の家に儒學修行の爲に來り居りしに、五十日が間同居せしかば、其時醫の術を少し傳へき。余が青井を辭し去る時、養軒從ひ來らんとせしかど、其父日向國にありて、いまだ漫遊の事を乞はず。其主君東都にいまして他邦に移る事を願はず。君父に不請して師に從ふの道なしといひしに、理に伏して、肥後に残り留れり。其後養軒日向に歸り、此事を父に語り、残念なりといひしかば、父誠怒りて、汝いさみなしといふべし。好事は得難うして失ひやすし。其時直に從ひて九州にも四國にも押渡り、稽古の功を積ん事こそ老父が悦ぶ事なれ。唯一封の書をだに送らば、何ぞ我許を待ん。主君へのいとまは老人よく取成して願ひなば、肥後に行たるも、四國に渡るも、主君のいとまの出し事は同じ事なれば、など相濟ざらる事の有べき。よしなき事を思ひ過し、時におくれし事かへすくもいさみなき事なりと、強くしかれり。其故、又其次の年に至り、再び遊學のいとまを願ひ、京師に登りて余に從ひしなり。されば今度も此養軒を選める事、其父の詞の勇なるを感じ、且は養軒が生れ附、右の注文によく叶へるを以て具せしなり。誠に其父の詞のごとく、物學ぶ事は増穂の薄のごとくならざれば成就し難きもの



如く一登蓮法師といふものますほの薄まそほの薄といふことを攝津の渡邊の聖の許に雨中人の止むるをも顧みず尋ねに罷りたりしをいふ、徒然草に出づ

なり。されど其父既に七十才に餘り、子としては唯一人の養軒を、修行の爲にはおのれが愛を割て、師に千里外に従はしむる其志、人の親たる者のよき手本なり。是ぞ眞の子を愛するといふべし。さればこそ、此度も東遊の事を日向へ申送りし計にて、其許をまたずして發しぬ。それより東北のこらす遊歴して、東都まで歸り著ぬる日は、我身の事よりも、先養軒が旅中病る事もなくて恙なく従ひたりしを嬉しくぞ思ひし。

東遊記 後編 卷之三

○四五六谷

舟津一吉城郡船津町

四五六谷は越中飛驒信濃三國の間へ入り込る谷なり。富山へ落る神通川を逆上り、又其支流を尋てのほるに、甚深遠にして、其奥を究る者なし。近き年飛州舟津の人兩人、此谷の奥を究んとて、三日の罫を用意して、段々川にそひて入りしに、其食も乏くなりぬれば、魚を釣り食うて猶數日の間尋入りしに、ふと伴ひし者の魚を釣り居る顔を見やりたるに、異形の化物なり。大に驚きて聲をかけたるに、魚を釣り居たる者も驚きてふりかへり見るに、其呼たる者の顔亦異形に變じて恐しさいはんかたなし。たがひにかくみゆるからは、此地に變こそ有るらめとて、いそぎ逃歸れり。遙逃出て、たがひに顔を見るに、何の變もなく常々のごとくなれば、此奥こそ山神の住所ならめ、人の入る事を忌嫌ひてかゝる變をあらはせしならんと恐れて、其後は奥深く入る者なしとなり。此事を其頃語り合ひしに、飛驒の高山の人其座に在りていふ様、それは山神の變にはあらず。



山と谷との日受によりて人の顔異形に見ゆるものなり。飛州の中に、人の往來する谷道に、人の顔長くみゆる所あり。其谷をしぼし行過れば、顔色常のごとし。此道を通り馴ざる人は大に驚く事なれども、所の人は常々に見なれてあやしむ事なしと云へり。外の國にてはいまだ聞及ばず。いと珍敷事なり。

○齋藤五郎兵衛

越前國敦賀より西北に當りて一里許、常宮參詣の道に、繩間村といふあり。海邊にて、多くは皆漁家なり。此村の庄屋を齋藤五郎兵衛といふ。此家は齋藤別當實盛が生れし家本なりとぞ。其時より今に代々家相續して、齋藤五郎兵衛と名乗、家柄なれば、所の庄屋を勤て、實盛が遺物等今に多く所持せりと云。誠に邊鄙の百姓には浮沈盛衰なく、數百年の家を保てる者多し。余も常宮に參詣せし時、彼家にも尋て、實盛が舊物も一見したく思ひしかども、常宮の歸りは夜に入りて、其事とくのはず過たり。あまり邊土ゆる、此名をしれる人だにもなし。埋れ居るも本意なき事なり。

庄屋一徳川時代に領主が十民の中より命じて一村又は數村の事を治めしめしもの、村長の事

○北極星

北極星出地の高下によりて、地球の南北を知る事なり。地上にて眞直に二十五里程を隔つる時は、天にて一度を違ふ故に、北極星の度數を知れば、居ながら國の南北を知り、又國の寒暖を知る。醫者も國々の氣候をしらざれば、其國の陰陽の變化を盡さず。故に疾病をも察する事あたはず。扱古人天學に精しき人萬國の度數をしるし置、又日本にても諸國の度數詳にしるせるものあり。余も漫遊のついで、猶みづから北極の度數を測試て、後日の考の一助とせんと、旅中にも用ふべき測量の器を新に工夫し、造り出して、携へ行、國々にて測り見しに、先越中富山にて見る所、北極星地を出る事三十六度半強なり。出羽國秋田四十度半なり。奥州津輕碓が關四十一度四分なり。同青森四十一度七分なり。同三馬屋四十二度二分なり。南部盛岡の四里北に濫民、云所あり、此所四十度七分なり。殊に三馬屋は日本極北の地なれば、別して丁寧精密に測りて、分厘を不違所四十二度二分なり。猶南部地の佐井、チコベの邊は、其鼻大に北に出れば、四十三度にも至るべし。其地に至り得ざれば測らず。誠に津輕地は寒氣甚敷、海濱皆

天學一天文學

佐井チコベ一共に北郡にありチコベは奥戸也



韃地一韃坦地方

洛陽長安一洛陽は周の成王の定めたる都にて今の河南省河南府城也。長安は周の武王の時始めて營みて鎬京と稱し唐の時長安と改む今の陝西省西安府也

韃地の沙漠に似たるもむべなり。唐土の北京も四十度程の地なれば、其沙漠も四十二三度の内外なるべし。又日本にて極南の地は大隅國佐田岬なり。是三十一度弱の所なり。是を以てみれば、日本も南北十二三度に及ぶ國なれば、小國とも云ふべからず。京都は皆人のしる如く、三十五度強なり。江戸は三十六度強なり。唐土にても洛陽長安杯三十五六度の地と云。齊魯二十六七度の所と云。殊に唐土にても、日本にても、中和の所なり。三十五六度の國は四時の氣候正しくして、人物も聖賢を出し、草木もよく暢茂す。南に過れば、その氣溫暖にして物をとらかし、石までも柔にして、山岳も高からず穩なり。北に過れば、其氣寒冷にして物を凝らし、水までも氷り、山岳も峨々と聳えて高し。陰陽薰蒸の鹽梅至極奇妙なるものなり。

○登龍

越中越後の海中、夏の日龍登るといふ甚多し。黒龍多し。黒雲一村虚空より下り來れば、海中の潮水其雲に乗じ、逆卷のほりて黒雲の中に入る。其雲を又くはしく見れば、龍の形見ゆることなり。尾頭などもたしかに見え、登潮は瀧を逆に懸るがごとし。又岩瀬

淇園子一皆川淇園は儒者にて書畫を能くせり文化四年五月歿す年七十四

と云所、宮崎といふ所まで十餘里の間に竟りて、黒龍登れるを見しと云。又鐵脚道人退冥の手代、越後の名立の沖を船にて通りし時、海底に大龍の蟠れるを見しといふ。蟠龍を見ることは此手代に限らず、彼海底には折々あることなり。是等は皆慥なる物語なりき。奇怪の事なり。過し年、淇園子の割記を見しに、其中に、或人江戸より船にてのほりしに、東海道の沖津の沖を過る時に、一むらの黒雲虚空より彼船をさして飛來る。船頭大に驚き、是は龍の此舟を卷上んとするなり、急に髪を切て焼べしとて、船中の人々のこらす頭髪を切て火に焼しに、臭氣空にのほりしかば、彼黒雲たちまちに散失たりと載られたり。是も亦珍らしき事なり、唐土の書にて見れば、蟄龍の登るは必雷の震するを待事なり。龍の伏する所へは雷落ると見ゆ。日本にては、龍と雷の相應する事を聞ず。余近頃阿蘭陀のエレキテイルを作りて、其クサリの先を茶碗に入れ、此茶碗に水を入れ置て車をまはし、其茶碗の上に指を近附れば、其水自然に逆卷登勢あり。上に應ずる物なければ其水登る事なし。其氣の上下相應する事、小器の中といへどもかくのごとし。況や天地の大なる其氣も、亦それに應ずれば登龍のごとき事もなしとは云べからず。



○黄鐘調

兼好一南北  
朝時代の法  
師にて歌文  
に長ぜし人  
也  
黄鐘調一十  
二律の一に  
て律の調也

撞鐘は黄鐘の調子に鑄るものなりとぞ。兼好が徒然草にも、大坂の天王寺の六時堂の鐘は黄鐘の調なる事をいへり。余も天王寺に行たれど、鐘を撞の時にあらできかず。又過し年西遊して、播州の刀田山鶴林寺にて、律に叶へりとおもふ鐘を聞き。此事委しく西遊記にのせたり。是も聖徳太子の時の鐘なりき。今度又越前敦賀の常宮に詣でしに、此鐘尋常の物ならずと人々いふに、近く寄りて見れば、龍頭の傍に穴ありて全體の形古雅なり。銘をみれば朝鮮の文なり。豊臣公の頃、大谷刑部此地に主宰として在りし時、朝鮮國より奪ひ來りし鐘を此宮に獻せしと云傳ふ。其銘文に曰、

大和七年三月日菁州蓮池寺鐘成内節傳合入金七百七十三近古金四百九十八近加入金百十近

- 成典和上 忠門法師
- 上座 則忠法師
- 郷村主 三長手
- 朱蕉吠余
- 游絲甜法師
- 都乃法味法師

作報舍

寶清軍師

龍碎軍師

史六

三忠舍知

行道舍知

成傳古

安海哀大舍

哀大舍

節州抗

皇龍寺

覺明和上

かくのごとし。朝鮮文にて甚讀難し。此音を聞ん事を思へど、撞事禁制といふ札を掛たり。入相には寺僧出て撞よしをきけば、入相には必聞べしと思ひしに、言葉石の爲にさざいが嶽に登りて、夜に入りて此寺に歸り下りしかば、入相を過て又鐘の音をきかず。残念いふばかりなし。よつてつらく思ふに、此鐘に穴を穿てる事黄鐘の調にせんためなるべし。鐘を鑄て後、跡より穴を穿てば、穴の大小によりて調子高低すべし。黄鐘に合する所まで穴を廣め、黄鐘の最中にて穴をとむ。全く鐘を黄鐘に鑄んと欲せば、數十遍鑄改るとも其最中に至る事は難かるべし。彼西園寺の鐘を幾度も鑄かへられしも、初より全く鑄んと心得し故なるべし。跡より穴を穿たば、一度にてよく調ふべし。されば古き鐘にして穴あるは、皆必黄鐘の調子なるべし。尾上刀田山の鐘、此常宮の鐘など、古人心を用ひし鐘と見えたり、近き世は、僧徒律の事不案内に成り下りて、

全く一完全  
に  
尾上一播磨  
國加古郡に  
在り刀田山  
の所在地也



双調一十二律の一にて亦律の調也

據らざる一原本寄らざ

聞知る事もよくせず、又鐘は黄鐘に鑄るといふ事だも知らずして、みだりに鑄る事に成りし故に、鐘に穴あるは奇妙の事と思ひて、何の爲にせしといふ事をする人もなくなり來れりとぞおもふ。さればこそ、日本國中に黄鐘の調に叶へりと聞ゆる鐘をいまだきかず。又穴ある鐘を外にて見る事なし。余も尾上の鐘を見し頃は、穴ある事をいぶかしく思ひしが、常宮の鐘を見、刀田山の鐘を聞いて、初て其調子の爲にせし事を悟りき。今より後、鐘を鑄る人、穴をさへ穿たば、其黄鐘の調子にせん事いと心やすき事なるべし。又或人の攝州南長柄村鶴満寺の鐘古き鐘なりといひし。是は程近き所なれどいまだ見ず。其調はいかなりや。又一とせある神道者の神前の鏡は雙調の物なりとて、諸方求けれど、其調子に叶へる鏡なかりしかば、余が知れる人新に鏡を鑄けるに、數十度鑄改しかども、つひに雙調の最中には叶はざりしかば、やむことなくて雙調に近き鏡を磨り減らして、雙調に合せたり。是等も又彼鐘に穴を穿てる事に相似たりし。余東遊せし頃、かく思ひてしるし置けるが、其後天王寺の鐘を聞いて、古鐘にあらざる事を知りし。長柄の鐘を見て、唐土南北朝の北燕の物にて、其律眞の黄鐘なるを感心し、又近き頃黄鐘調の鐘を鑄さしめて數十度に及びて其法をさとり、強て穴にも據らざる事を知れり。其

るに作る

坂上是則一平安時代の歌人

妻子一普通は妻籠と書く西筑摩郡の西部に在り

くはしき事は、別に音律の書にあらはしたれば、此記には略せり。

○箒木

坂上是則の和歌に、「菌原やふせやに生ふるはき木の、在りとは見えてあはぬ君かな」とよみし箒木といふ木、信濃國菌原山にあり。在りと見えながら無きといふより、源氏物語杯にも、箒木の巻に、一部の趣意にて、紫式部も心をこめしと云。其事餘り奇怪なるゆゑ、もしやそら言にもやと思ひ居しが、信州に遊びし頃、まのあたり見て驚く。東都へ行木會街道の驛に妻子と云あり。其妻子の驛より、木會街道を離れ、間道に入る。是は飯田の城下へ出る山道にて、其間十里深山幽谷計にて、樵者の行通ふ細道なり。蘭廣瀬杯いふ在所を過て、箒谷といふ所あり。此箒谷といふ所より、箒木を見る所なり。木會峠と云大なる峠の手前なり。此邊王平、勝負平杯いふ少しづくの平坦の地あり。扱此箒谷の道の右の方は甚深く大なる谷にて、底に谷川の音聞ゆ。其谷を打越して向うに、雜樹隙なく生ひ茂りたる山あり。其山の七八分目とも思ふ程に、モミの木の高く大なる一本秀て見ゆ。其モミの木に傍て、左の方に木葉眞丸に茂りたる木あり。たとへ



金賣吉次一  
京都の兩替  
商也名は末  
春、奥州下  
向の途次牛  
若丸を伴ふ  
牛若長じて  
義經となる  
に及び召さ  
れて土とな  
り堀彌太郎  
光景と改む

ば菜園にある箒木のしけれるに似たり。其モミの木と箒木と二つは、雜樹茂れる中に格別に秀で、まぎれなく見ゆ。是即むかしより名高き蘭原山のはまき木なり。かく明白に見ゆるものの、其木の下に行て見る時は影もなしとなり。唯モミの木は、こなたより見るごとくに在りとなり。それゆゑに、昔よりありとは見えて逢れぬともいひ、あるがごとくにして實は無き源氏物語の類にも用ひ來りつる事とぞ。箒谷の見る所よりは世町許をも隔てたり。所の百姓のいひ傳へには、天照太神の御時より有る神木なりと云。又余に教へし者のいひしは、此はまき木は奥州の金賣吉次の通行せし時よりある木なりといひし。いづれにもせよ、坂上是則の頃より名高き木なれば、むかしよりの名木なり。今にてはかく邊鄙の中の邊土なれば、見る人も甚稀なれども、昔は此道筋奥州への本街道にて、彼鎮守府杯へ下る京都の官人衆も見及ばれぬる事なりとぞ。此邊に浪合杯いふ所も程近く、王平、勝負平も古戰場といふ。又是より東に風越の嶺などいふ名所もあり。古歌なども見ゆれば、今の如く入り込たる極山中にてはあらざりしと覺ゆ。又箒木の有る山の後に、伏屋といふ小村もありとなり。古歌の詞を今は里の名とせりとぞおもはる。何れにも奇妙の神木、世に珍敷ものなりき。友人蝶夢師も見に行しとて語り

合り。

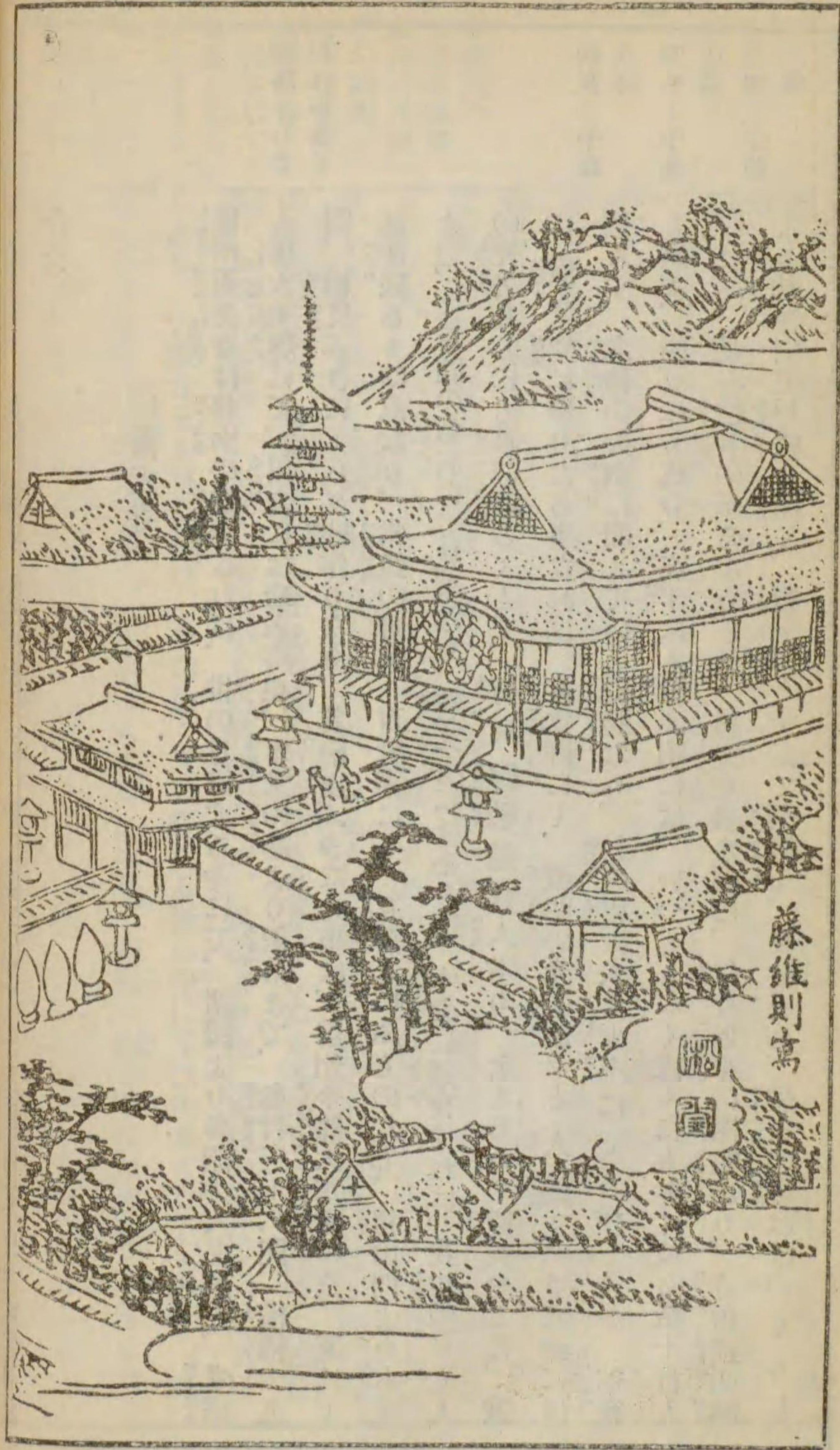
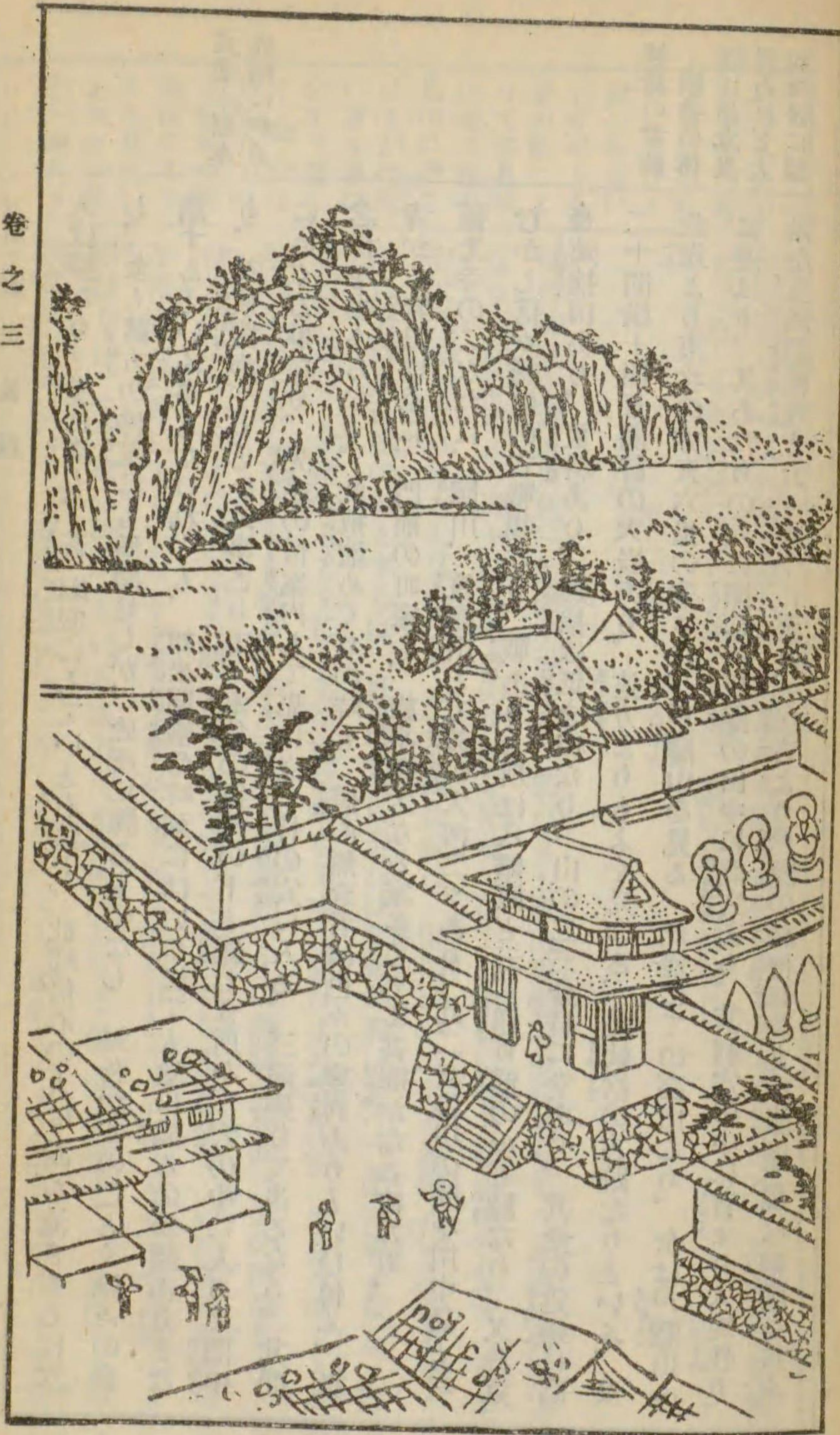
○善光寺

雨落—あま  
だれを落す  
ところ

初夜—午後  
八時  
四ツ—午後  
十時  
丑刻—午前  
二時

信州善光寺は格別の靈場なれば、世の尊信する寺にて、諸國より參詣の人甚多し。堂塔も廣大美麗にて、田舎には珍敷寺也。本堂雨落より雨落まで、奥行三十六間、横幅十九間、檜皮ぶきにて八ツ棟作りなり。其檜皮ぶきなる事は、信州全體大寒國ゆゑ、瓦にては凍破るゝゆるなり。常竝の町家、百姓家にも、瓦葺といふものなし。扱山門より本堂まで、二百間の敷石にて見事なり。善光寺にまゐりて、本堂に通夜すれば、我親敷せし人の死去りしにも再び逢るゝとて、毎夜、夥敷通夜人有り。余も參りて通夜せしに、誠に廣き堂に參りたる事なれば、甚物靜にて、燈明の光も細々と人顔もさだかには見えす、念佛の聲幽に聞えていと殊勝なり。初の程は人も少々にてさびしきが、初夜も過ぎ、四ツにも成り、夜半にも及ぶ頃には、いつともなく段々に人多く成り數十百人に及ぶ。是を亡者の參るなりと云。扱丑刻過る頃に、毎夜如來の開帳あり。寺僧遙の脇より絲を引て戸帳を開く。暫してやがて閉帳す。夜は更ぬ、燈火の影はほのくらし。







戒壇一原本  
戒壇に作る

姨捨の古跡  
—姨捨の傳  
説は諸本異  
同あれど大  
和物語に據

人は静なり、堂は廣し。甚幽寂にしていと有難し。此時信心の人は涙を流さざるはなし。余も諸方の佛院にも參詣せしが、此所に勝るものなし。毎夜かくのごとく誰々の參詣するといふ事もなければ、如來開帳の時刻にはいつにても堂に滿るの參詣ありとなり。又戒壇めぐりといふ事ありて、本尊の御座の下と覺しき所を、穴の中に入りて闇中にめぐる事なり。先達の僧案内して先に立、件の穴に入る。三遍廻りて出るなり。其間念佛を唱ふるなり。此戒壇めぐりの時も、信心無き者は色々の變異ありといひ傳ふ。此寺かく繁昌ゆゑに、門前の町家も、旅亭杯大なる家多くして甚賑かなる町なり。

善光寺のこなたに、犀川、筑摩川とて甚の大河二ツあり。此二ツの川の間を川中島と云。むかし信女謙信の古戰場なり。戦ありし所は八幡原と云。通り筋の少し脇なり。又此近邊姨捨山あり。更科あり。姨捨は低き山なり。山の二三分目に堂あり。其堂の近邊に高二十間横十四五間許の大岩あり。遠方よりもよく見ゆる。是姨捨の古跡なりといふ。又此邊より東北の方五六里の遠さに、戸隠山を見る。此邊にての高山なり。余は戸隠山へは遊ばず。其あたりの人に聞に、戸隠の山中に洞穴あり。其洞穴の中に昔より大蛇住り。是を九頭龍權現と云。唯今に至り、往古より戸隠の社僧毎朝九頭龍權現へ御膳を供ふ。

れば一人の男幼少の時より親の如くにしける姨の年老いたりけるを妻の勸によりて或月明の夜其處の高山に捨てけるが年頃の恩を思ひ出でて悲しく「我心なぐさめかれつ更科や姨捨山にてる月を見て」と詠みて又迎へ來れり

○諏訪湖

件くだんの洞ほらの中へ入れ置おきて歸かへるに、明朝みやうてうは其膳部ぜんぶ皆食くひ終おりてありとなり。此權現ごんげんの靈驗れいげんいちじるしき事言葉ことごたにつくし難がたしと云。誠に奇異きいの事なり。

信州諏訪しんしゅうすわの湖うみは周廻めぐり三里せうりの小湖せうこなり。然れども亂山重疊らんざんちゆうたうたかの中にありて、景色けいしよくは無雙むさうの地なり。此湖邊こしやうより湖上こじやうに富士山ふじさんの北面ほくめんを見る。富士山峭直せうちよくにして寶永山ほうえいを見ず。富士の形かたちは此湖上こしやうより見るも又奇あなりと云。扱あ此湖こに、世俗せぞくにいふ七不思議ななふしぎといふ事あり。其中うちにも殊更ことさら奇妙めうの事とするは、此湖水こすゐ冬ふゆに至いたれば寒國かんこくの習なにて一面めんの氷こほりとなる。厚あさ數尺すうせきに及び、金鐵きんてつのごとくにして平地へいぢに異ことならず。霜月しもづきより翌年あつねの二月にがつまでは、人馬じんば皆みな氷の上こほりのうへを往來わうらいして少しも恐おそるゝ事なく、下の諏訪すわ、上の諏訪すわ、其間三里せうりの所ところなるを、冬は氷の上こほりのうへを一文いちもん字じに通行つうかうする故ゆゑ、纒むす一里いちりに成なりて甚便利べんりなる事なり。いかなる重おもき荷物にものつを附つたる馬車うまぐるまにても、むかしより氷破こほりやぶれて水底すゐていに落お入りしためしなとは不思議ふしぎなりと問とひしに、冬ふゆの初はつめに神渡かみわたといふ事あり。其神渡かみわたありて後は氷破こほりるゝことなし。春はるに成なり又神渡かみわたあり。其後は氷こほりいまだ厚あしといへども、恐おそれて一人も渡わたるものなし。其神渡かみわた



これより姨捨山といへりとなり

はいかなることぞといふに、冬のはじめ、一夜湖上大なる音して物を引通ることし。夜明て見れば、氷の上を一字に格別の大石大木などを引通りたるがごとく、氷左右にわれ分れて一筋の道附たり。是神渡濟みたりと云。此後は人馬往來して過無し。二月の末又此事あり。其後は渡をやむる事なり。傳へいふ、諏訪明神は狐を眷屬とし給ふなり。狐は氷を聞ものなれば、此神渡は明神の使しめの狐の所爲なりと云。又諏訪に温泉ありて、諸人入湯する所なり。湖水の中にも温泉あり、常は知れず、唯氷りたる時は湖中にて其温泉の湧いづる所ばかり氷らずして、氷に所々穴ありて湯氣のほる。又下の諏訪の拜殿の板壁のふし穴より、上の諏訪の塔の影さし渡し一里を隔て々さし入る。又上の諏訪明神のみたらしのほとりは、四季ともに毎日少し許にても雨降らずといふことなし。又明神の廻廊の板敷釘を用ひず、人歩行するに音なし。其外不思議数々あり。東海道にある天龍川は、其源この諏訪湖より流れ出る。小湖なれども底深く、魚鼈甚多くして、此邊利益ある水なり。

○鶴岡慈悲

みたらしし御手洗

鶴岡一羽前  
國西田川郡  
今鶴岡町と  
稱す

中老頭一昔  
時四十歳前  
後の年寄を  
中老と稱し  
其中の名望  
ある者を選  
びて中老頭  
といへり

天明卯年の凶作に、奥州津輕南部最饑饉して、足腰の立る者は四方に走りて食物を求む。羽州秋田、隣國の事なれば饑人の來る事數萬人、秋田の地も亦凶年の事なれば救ひ足る事あたはず。其饑人溢れて又鶴岡に來る。路頭饑人にて押あへりとなり。食を得ざる者はたちまち其地にて餓死するに依て、鶴岡の人も各身上の限力を盡して救ひし事なり。其中にわきてあはれに聞しは、鈴木今右衛門といふ者、本は鶴岡の中老頭を勤し者なりしが、少々貯も出來しかば、近き頃は役義を引て、自ら耕作して渡世しける。此人元來慈悲心深く、此度も身代の限出し饑人を救ひけるに、猶夥敷き餓死を見るにしのびず、所持の田畑竝に諸道具等迄ことごとく賣拂ひて、其力の限救ひける。其妻も又心立よき女にて、自分の衣服の類を大かた賣拂ひて救ひけるに、晴の衣服纔に二ツのみぞ残り。しばしが程は此二ツ残し置しが、或日此二ツの衣服も賣りて救はんと云。今右衛門是を聞て、女は殊更衣服などを愛するものなるに、是をも賣りて饑人を救はんと云ふは殊勝の事なり。然れども、男と違ひ、又外へ出る時は著替の一ツは無くて叶はざる事なりといひしかば、妻さればこそ此著替をも賣べく存するなり。著替あればこそ外へ出る心もあれ。外へ出るによりて櫛もかんざしも入用なり。今著替を賣りて外



解物一裕なるを引解きて一重となしたる類なるべし

大地一寺

非人一元來罪人の事なりしが後は

へ出る事ならずば、櫛も無用なり、かんざしも無用なり。無用の物には心も残らず候へば、是らをも賣拂ひなば、又餘程の人をも救ふべしとて、つひに皆々賣て救ひぬ。其娘十二才に成りけるが、同じ年頃の小娘饑つかれ食を乞ひて門に立しに、其體誠にあはれにて、餘寒の嵐烈しければ、衣服ゆたかなるさへ堪がたきに、小娘はやうく解物のひとへ一ツを身にまとひ、振ひこゑたる有様、母親見かねて我娘を呼び、其方は綿入二ツを重ねてあたゝかに著たるが、あの子は誠に不便なる有様なり。年の程も同じ位なれば衣服も程よかるべし。最早段々暖氣にも成事なれば、あまり寒からずば其綿入一ツぬぎてあの小娘にとらせまじやといへば、娘心よけにとくしんして、上に著たるよき方の綿入を與へたり。父母ともに涙を流して悦べりとぞ。又鶴岡の町はづれに沙塚といふ所あり。此沙塚に道心者あり。禪宗なるが、道徳も學問もありとて、是まで年來大地の住職をも方々よりすくめしかど、皆辭退して、沙塚に小き草庵を結び、毎日たくはつして其日を過し、衣服は木綿より外は著す、古び垢附ば信者より新に作りて與ふるに、是迄著せしふるき衣服はすなはち乞食非人に與へて、一ツも別に貯ふることなし。其名をしれる人なくて。皆唯沙塚の和尚とのみ呼來れる。此和尚彼饑饉の時、鶴岡の町々其外在

専ら乞食の徒をいへり

在にも富る家にはみづから行て、かゝる折こそ慈悲を加へ給へとて頻に勸化し、晝夜かけめぐりもらひ來れる程づゝ、毎日々々饑人を救ひけるに、兼て此和尚を信仰の人追加勢して世話せり。始終饑人に與へ施せしものをつもり見るに、凡米百八十俵に、金六十兩を此和尚の力にて施しける。此和尚常々は人に物を乞事なく、其日限の事のみして、明日の貯もせず、法儀堅固の僧なれば、諸人ともに信仰歸依して、皆々多くの米錢を寄附して、饑人を救はせける。此二事、鶴岡より酒田へ下る川舟の乗合にて、鶴岡の人々口々に話して稱美しければ、矢立の墨にて書附歸れり。誠に鶴岡は莊内と稱して米穀澤山の國にして、元來大富國なり。富るが故に人の心も溫和にて、かゝる仁慈の事も多かりきと覺えし。



池田の長一  
池田の宿の  
長者  
熊野一平家  
物語には熊  
野は母の名  
にて女の名  
は侍従とあ  
り

東遊記後編 卷之四

○熊野御前

東海道筋天龍川の東岸に池田といふ所あり。此所は熊野御前の古郷なり。傳へ云、熊野は池田の長の娘なりと。そのむかし京に出て、内大臣平宗盛に仕へけるに、池田に残れる熊野が母病重しと告こしければ、いとまを得て老母の病をとひたしと頻に願ひしかど、宗盛の寵愛深かりしかば猶も許さず、彼謠曲に作れるごとく、一日花見の酒宴に召具せられけるに、熊野は君の寵も花の盛もこころならで、かくなんよみける。一いかにせん都の春もをしけれど、なれし東の花やちるらん。一宗盛此歌を聞て、感に堪かね、其座よりいとまたびけり。熊野は數ならぬ女なりしかど、其至孝の名今に朽すして、其里に至れば人をして昔をおもはしむ。さばかり盛なりし平家も暫の榮花にて跡かたもなし。纔に池田の里と天龍川の水のみ昔の俤にて、富貴榮耀いづくにかある。唯をしむべきは名にして、名の實は忠孝なり。



○羽州之鬼

小佐川一羽  
後國由利郡  
上濱村の大  
字、普通は  
小砂川と書  
雨中なれば  
云々一雨降  
りて薄暗け  
れど、案外  
時刻はなほ  
早きかも知  
れずと思ひ  
ての意

出羽の國小佐川といふ所に至らんとする比は、早申の刻も過つらんと覺えて、山の色もいとくらく、殊にきのふよりしめやかに雨降て、日影もさだかにはしれず。先の宿までは又三里もあれば、とても日の内にはいたりたからんや。されど雨中なれば思の外に時刻移らぬ事もやあらんと疑ひて、行逢ける老夫に先の宿迄ゆくに日は暮ましやと問に、眉をひそめ、道をさへいそぎ給は、行著もし給はんなれど、見れば遠國の人々にこそ、此程は此あたりに鬼出て人をとり食ふ。初は夜計なりしが、近き比に成りては、白晝に出て、此道行かふ者は人馬の差別なくくはれざるはなし。是迄の道も鬼の出ぬる所なるに、くはれ給はざりしは運強き人々也。是より先は殊さら鬼多し。旅するも命のありてこそ。何いそぎの用かは知らねども、日暮に及んで行給んは危しと云。養軒も聞より笑ふ。いかに邊土に來ぬればとて、人を驚かすも程こそあらめ。鬼の人を取り食ふ杯は昔、嘶の草双紙などに有事にて、三才の小兒も今の世には信ぜざる事なり。其鬼は青鬼か、赤鬼か、虎の皮の犢鼻褌は古きや新きや杯、嘲り戯れつゝ暫來て、猶時刻のお

おぼつかない  
ければ一氣  
にかゝる故

ほつかなければ、あやしのわら屋に入て、日あるうちにむかうの宿までのき著べしやと問に、此あるじもおどろきし體にて、旅の人は不敵の事を宣ふものかな。此先はかばかり鬼多きを、いかにして無事に行過給はんや。きのふも此里の八太郎くはれたり。けふも隣村の九郎助取られたり。あなおそろしといひて、時刻の事は答もせず。同じ様にも人をおどろかすものかなと笑ひて出つゝ、又人に問に、又鬼の事いふ。あやしくも猶をかしけれど、三人まで同じ様に恐れぬるに、何とやら誠しやかに成りて、養軒何とか思へる。詞もあやし、殊に日足もたけぬと見ゆ。雨猶そほ降てけしきも心細し。さのみ行さきいそぐべきにもあらず。人里に遠かりなばせんかたも有まじ。猶くはしく尋問て、鬼の事は、今夜は此里に宿りなんといへば、養軒も同意して、それより家ごとに入りて尋問に、口々に鬼の事いうて、舌を振はして恐る。扱はそらごとにあらじ。古郷を出て三百里に及べば、かゝる奇異の事にも逢事ぞ。さらば宿求んと、あなたこなた宿をこひて、やうく六十に餘れる老婆と、二十四五許なる男と住る家に宿りぬ。足すまぎて、圍爐裏によりて木賃の飯をたきくも、又彼鬼の事尋れば、老婆恐れおのゝきて、何事かかき附やうにいふ。邊土の女、其言葉一しほに聞取がたくて、何事をいふ

かき附やう  
にせき込



みて物語る  
さまをいへ  
るなるべし

ともしれず。さらば其鬼はいかなる形ぞ。額に角を見て、腰に虎の皮のふんどしせりや  
といへば、男かぶりをふりて、左様のものにはあらずと云。然らばいかなるものぞとい  
へば、唯犬のごとくにして少し大なりと云。せい高く、口大なりやと問へば、其ごとし  
と云。扱は狼にてはあらずやといふに、狼ともいふと聞しと答ふ。養軒顔を見合せ、扱は  
大かたならぬ恐なりといふにぞ、先程よりの詞ども俄に誠に成りし心地して、おそろ  
しき事いふばかりなし。段々くはしく聞に、此小佐川の人も六七人も喰殺され、きのふ  
も此向うのウヤマヤの鬮の者に飛かまりしに、彼者強勇の男にして、ひと組附、一身  
の力を出してつひに狼を組伏せたりしに、身に寸鐵も無れば、組伏せはふせながら、  
いかんともしがたし。やうくにかたはらの石をひろひ、其石を以て狼の頭をたつき  
碎て殺しぬ。されど其身も數か所手負て、家に歸りて死せりなど、此間の事共恐ろしき  
限取集ていふにぞ、是は狼に病附て、白晝にも數十疋出て人を害するならん。我々、  
禽獸の爲に、此邊境に來りて命を失ん事、いか許口惜しき事なりと思ひめぐらせば、其  
夜は目もあはず。是より歸らんにも危し、行ん事も猶さらなり。此里に住はつべき身に  
もあらず。盜ならば衣服をも與ふべし、仇ならば智略をも施すべし。いかにせむ、異類

虎を手打に  
する論語  
に所謂暴虎  
馮河死して  
侮無きの類  
をいふ

さめめき一  
騒ぎ立つの  
意にて大い  
に元氣附き  
たるさまを  
いふ

の獸の爲に勇を振むこと、誠に虎を手打にするのたぐひにして、志有る者のすべき事に  
あらず。されどさしあたりたる事にせんかたもなく、殊にあすのみに限らず、行先は連  
山波濤のごとく見ゆれば、あの中を越え行んに、いかなる此上の猛獸か出んと、あらぬ  
思を費して、程なく夜はあけぬ。中々に打立べくもあらねば、件の男をよびて、此  
里に馬あらば二疋かりて與へよ。賃錢はいとはじとひたすらに頼しに、駄賃馬は此あた  
りにはなし扱としぶくにいひつゝ出行しが、程なく歸りて、馬二疋しかくの賃にて  
さきの宿迄かり來れり。其上此近隣に秋田へ越ゆる商人兩人宿り居て、鬼に恐れ、是も  
馬二疋をかりて居たりしが、そこたちの事をいひたれば、よき道連なり、同道して給は  
らんやと、某に頼めりと云。扱はよき味方を得たり。此方よりこそ頼たきものをと、そ  
れより彼商人と申合せ、彼兩人にこなた兩人、馬四疋に馬士四人、手ごとに長き棒を携  
へ、鹿狩などに出る様に出立て、小うたうたひ、連大勢のいきほひさ、めき出たれば、  
少しは安堵して、よべ思ひ煩ひし程にもあらず。されどもしや出來らんかと、四方に眼  
をくばり行過しに、運よくて無難に向うの宿に著たり。關こゆるあたりにては、彼きの  
ふ石にてたつき碎し狼の頭ばかり落残れり。其體は何方へ取去しや見えぬ。見るだに



病なくとも  
一狼に病附  
くことなく  
ともと也、  
前に狼に病  
附てといへ  
るに應ず

恐ろしき事なりき。誠に此道筋三里が程には人家もなく、高き芝原にて、細き道筋數々附り。病なくとも狼の出べき土地とぞ覺ゆ。猶其先の宿々も彼商人と一組になり、皆々馬に打乗て、用心堅固にして行しに、五六里が程過しかば、鬼の沙汰もやみぬ。誠に人を取食ふものゆゑに、此あたりにては狼を鬼といふなるべし。古風なる事なり。程過て今に至ればをかしき物語ともなりぬれど、其時の物あんじ筆の及ぶ所にあらず。

○松島

初夜一午後  
八時  
奥なまり一  
奥州なまり

五月八日、奥州松島見物のために、鹽竈の町杉坂といふ所の津國屋和助といへる旅館に宿す。あるじいふは、明日の松島御見物は幸の御友こそあれ。初より奥の座敷に泊り給ふは禪僧にて、四五人連なり。明日は舟かりて松島見物せんと宣ふ。同船して見物し給へといふ。それこそは能き連なれ、旅の僧、物語も珍らしからんと楽しみ居たるに、奥の座敷僧にも似ず振舞て、高聲に笑ひのゝしりけるに、初夜過る頃にはこの町の妓婦四五人を召來りて、酒をも肉をも吞食ひ、出家の小唄、淨瑠璃、さすがにふしつたなく、殊に奥なまりにて聞も苦し。妓女のひける三味線は薩摩などにある六調子といふに

をいふ  
六調子一三  
味線の調子  
の名、本調  
子よりも一  
段高き調子  
也

名だたる一  
名に高き

似たり。其かまびすしさいふもさらなり。亂酒放逸こなたの座敷まで安からず。扱も無慚の法師原やと、うとましくて其夜は明ぬるに、いざ船かりて乗らんといふに、彼遊女そのまゝに携へて、衣かなぐりすて、鉢巻横ざまにしまして踊り狂ふにぞ興さめて、此法師らと同船せば、あたらし松島の風景もいかでかのどやかに見るとまあらん、あら不祥の法師やと思へば、詞かはすさへ口汚るゝやうにて、同船の事はやめたり。それより唯二人、鹽竈の浦より松島の雄島まで二里半の所を、賃錢纜に四百文にて小船一艘を買切漕出す。天氣殊にのどかにて、風さへ靜なるは、天幸を得たりといふべし。東に向うて行に、岸より纜に五六町の所に小島あり、辨天島といふ。夫より十八町にしてかの名だたる籬が島あり。右の方に東宮瀆といふ里あり。向うの沖の切戸の出崎を湯が崎と云。左の方を崎山と云。皆漁家なり。籬が島より左に折て、舟の頭北の方に向ふに、東の方に島々連れり。大なる島近く隔りて、其島の切戸より東海を見る。其大なる島より外にある島々、我舟の過るに従うて北よりして南に移る。小島切戸より數々の島を繰出す事の、のぞきからくりを見るごとく、又芝居杯の引道具をみるがごとし。其島皆甚大ならずして、色々の形あり。多くは皆其形を以て島の名とす。地藏島烏帽子島等は其形



尤よく似たり。其外、

旭島	大黒島	貝島	籠島	主水島	都島	橋かけ島	大鼓島	二子島	兩犬島	筆捨島	沖唐戸島
翁島	夷島	伊勢島	化粧島	柵島	二王島	旗が島	青海島	鐘かけ島	鍋島	松の島	
千貫島	ふくら島	小町島	鞍懸島	箕輪島	鹽焼島	内裡島	汐干島	蛇島	親船島	水島	
經島	雄島	毘沙門島	あぶみ島	鎧島	物言島	后島	松が浦島	鼓島	屋形島	水島	

猶此外に、船頭色々の島をさして教へしかど、書しるすまに船行過て、四方の景色を見洩さじとするに心のいとまなくして、十分の一もしるし得ず、八百八島有りと云。誠

見佛禪師一  
高僧也松島  
に栖むこと  
十六年法華  
を誦するこ  
と六萬遍能  
く鬼神を使  
役して靈驗  
を示す鳥羽  
帝其の徳を  
聞き佛像寶  
器を賜ひて  
旌表す終る  
處を知らず  
眞壁平四郎

に數百に餘れりと思ふ。鹽竈の千賀の浦より松島迄二里半の間、泉水のごとく海亦甚深からず、五六尺或は七八尺許に見えて、底甚明なり。かくのごとく、島の間皆入海なれば、風ありといへども波立事なしといへり。此島々の松皆赤色にして、枝皆下に垂れ、作れる松のごとし。故に其景色艷美にして猛からず。扱舟を雄島に附て、上り見るに、雄島頗る大なり。此島は見佛禪師の座禪の地なり。堂宇今に連れり。島の南の邊に高さ一丈に餘れる碑有り。元の僧一山鎌倉建長寺に住持せし時、見佛禪師の爲に書する碑にして、字體は草書なり。昔封じて文字見えがたき所多し。世の人石摺にして珍重する石碑なり。其外、此雄島には、芭蕉の朝な夕な吟をはじめ、俳諧者流の發句の碑、或は騷人の詩碑等甚多し。然れども此佳景に對すべき作有ぬとも覺えず。扱雄島見めぐりて、大なる橋を渡り、他の島にのほり、又其島より橋にて松島に渡る。今松島と名附る所は陸地にて町家軒を並べたり。多くは皆旅館なり。松島の町は耕作の地少ければ農人にもあらず。又此地は瑞巖寺の下にて、殺生禁制の所なれば漁獵の者にもあらず。他の街道にあらざれば商家にもあらず。大かたは唯松島の景色遊覽の人を宿して渡世とする事なり。瑞巖寺は町の西北にあり、禪宗にて大地也。開山は世に名高き眞壁平四郎入



入道一法心と號す俗の時眞壁の郡守に仕ふ一日郡守事を以て履にて平四郎を蹴しかば平四郎憤然として世を厭ひ海を踰えて宋に入り佛鑑禪師に參して悟入し後歸朝して瑞巖寺の開山となる西湖一支那の浙江省の孤山の麓に在る湖

道なり。此松島の町よりは景色見えがたし。景色は唯舟行の間なり。扱兼て仙臺の人の云しには、松島に遊ぶ人は必富山に登るべし。松島の景は富山に留れりと聞しによりて、又富山に至る。東北に當りて其道五十町有り。富山と云は觀音の靈場にて、田村將軍の開山なりと云。高さ十町ばかりもありて、此邊にては第一の高山なり。此山の絶頂の南邊に富春山大仰寺といふ寺あり。此寺の書院の庭より東南の方を見れば、松島の全景一望の中に備る。大抵東西二三里に南北六七里許とも見えて、八百八島連れる風景畫に書る西湖の圖に甚似たり。遙に眼をめぐらせば、東洋隈もなく、誠に天下第一の絶景筆紙に盡すべきにあらず。人によりて松島は俗景なりと云も、あまりに奇麗にして畫圖のごときゆるゑにいふなるべし。余既に天下をめぐり盡して、名勝の地至らざる所も無きに、實に此松島の風景に比すべきもの又他所に見る事なし。此庭に一生をもへたき心ちすれど、千里外の旅の身さてあるべきにあらねば、親しき人に別るゝ心地して寺を下り、又松島にかへり、松島より陸地をへて鹽竈の杉坂に歸る。松島と鹽竈との陸路は山に隔られて景色見え。初思ひしは、舟にて行んは海上危くも有べし、殊に景色を見るには、歩こそ心靜にしてよかるべけれど、既に陸路より松島に遊んとせしに、

宿の主諫て、松島の景は舟行にあり、陸路よろしからず、まけて我詞に従ひ給へといふにぞ、舟買て遊べり。誠に宿の主のいひごとく、陸路にては景地一ツも見らるべからず、其上海上も泉水のごとくなれば、いかなる風雨の時といへども危き事は有べからず。松島にあそぶ人は、是非ともに舟行すべき事なり。又富山に登るべき事なり。

○舞樂

氏神一族の祖先を祀りたる神をいへど後世産土神と混同していへ

我國を神國といふ事ゆるなきにあらず。世間すべての事の古風残れるは、多くは祭に見ゆ。殊に邊鄙田舎は物事實朴にして、其氏神などの祭禮といふもの最古雅なる事多し。越後國糸魚川に、彼地にて一の宮と稱する宮あり。實は一の宮にはあらず、天津社といふなり。毎年三月十日祭禮なり。此祭に兒の舞といふ事あり。是を見るに皆古樂なり。舞の面杯古物多し。横笛太鼓を以てはやす事なり。音律に不拘、拍子許にて、邊鄙の聲甚野調なり。舞はふつゝかならず、雅樂の趣あり。例年十二曲を奏す。其曲名

- 振 鉾 小兒四人舞
- 按 摩 小兒面舞



雞冠	小兒四人舞
拔頭	大人一人面舞
破魔弓	小兒四人舞
兒納會利	小兒二人面舞
能拔頭	大人一人面舞
花籠	小兒四人舞
大納會利	大人二人舞
太平樂	小兒四人舞
退出	大人一人舞

小兒は大抵十三四才許の者を選び集め、大人も例年舞覺えたる者、皆其一月も前より、天津社の拜殿にて、毎日拍子合せをする事なり。舞の手今様の事をまじへず、昔より習ひ傳へたるまゝを律儀に守り來れるゆゑに、其古雅なる事甚し。何れの頃より始れる事にやと所の人に尋しかど、さだかにしる人なし。三四百年前暫斷絶せしに、此あたりのお老婆一人舞の手を覺え居て、中興せしといふ。三都の地、繁華の所は、物事時々の盛

選びー原本例の撰びに作る  
今様ー近代風

大内ー大内裏、宮中

二本松ー岩代國安達郡に在り今は二本松町と稱す

三王ー伏羲神農黃帝

衰ありて、殊に花街柳巷のはやり事に移され、新奇の事に走るゆゑ、大内の外には古雅なる事稀なり。是等の祭禮を好古の士に見せまほしく覺えし。

○漢文帝

奥州二本松邊より白川へ來るあたりの驛々、民家の戸口に、漢孝文皇帝守護牘と板行にしたる紙の札を張れり。扱も珍敷札かなと思ふより、心を留て其あたりの家々を見るに、家ことにあるにもあらねども、十軒目、廿軒目程には、まゝ此札をはれり。其家に立寄て、此札は何方の社より出る事にやと問ひしに、下野國日光山邊より例年神主くばり來るといふ。それは何といふ社なりやと尋しかど、百姓の老婆にてくはしき事はしらすと云。いか成ゆゑにて文帝を祀れるにや。社は何と名附け、何村の氏神なりや、聞まほしく覺えし。祭り來れるには外に深き由來も有べけれど、何にもせよ、此文帝は唐土にても世々の天子の中に三王以後の聖天子とも呼れ給ふ仁慈深き君なれば、彼國には一しほにたふとび祀るべし。我日本にまで勸請して、民家の戸々に、守札に張れる事、仁徳の有難き事を見るべし。又越前路を通りし頃、何れの地にてや、民家の戸ごと



に、細川越中守と小き札に書て、守札となし居れる所を見たり。細川侯は當時の大名なれど、近き頃其國政の勝れたる事既に日本國中に聞えて、其名を書て守札とす。

○戸隠山

生駒山―大和國生駒郡北生駒村の西に聳ゆ

戸がくし山は、信濃國の北の方にありて、越後へ出る方にあり。信州は惣體山國にて、連山波濤のごとくなるに、此戸隠山は基を別にして、京近邊にていはゞ生駒山を望むがごとくなる山なり。手力雄命を祭れりといふ。天照太神天の岩戸にこもらせ給ひける時、衆神寄玉ひて神樂を奏し玉ひければ、太神岩戸を少し内より開き給ひてさしのぞかせ給ふ所を、手力雄命岩戸の戸を引放ち抛捨玉ひしが、此戸隠山に落たり。それより戸を隠したる山といふことにて、かく名附たりとぞ。世俗のいひ傳なり。扱此山に大なる洞穴あり。其穴の中に大蛇あり。九頭龍權現と名附て、此山の鎮守の神なりとぞ。頭九ツ有る龍にて、神變不思議の靈神なり、社人毎日穴の中に神供を備へて、其まゝうしろをかへり見ず退き歸ること也。翌日は其神供の物一ツも残らず無しと也。少しにても火のけがれたる食は其まゝにて、食したまはずといふ。又甚梨を好み給ふ。誰にても

君錦先生―清田絢、伊藤龍州の男にて漢學者也天明四年九月歿年七十八

願心ある人、梨を穴の内へ入れて祈念するに、早其間に穴の中にて梨を咬み食ふ音聞ゆ。人皆恐れて眼をふさぎ、つひに其形を見たる者はあらず。諸の願望叶はずといふ事なし。上方にても梨をたちて、虫喰齒の痛を治せんと立願する人あり。遠方ながら奇効ありと云。君錦先生孔雀樓文集の中にも、此事をのせて、慥に聞えたる事を云へり。余も信州に遊びけるとき、此山に登りて奇を探り、且又權現に梨を獻じたく思ひしかど、時寒氣の頃にてえ登山せずやみぬ。昔は諸國人身御供などいふ事もあり。又其外にも人民の食する食物或は肉類などを直に食する神社多かりし様にかたり傳ふるに、多くは武州鴻巣明神の由來の如き事にて、毒蛇惡獸、神明の寶殿により居て、食を食する事なりけるを、人智ひらけ、文華盛に成りて後は、毒蛇惡獸の策やぶれ、今にては人食を直に食ふ神社は、狐を祭れる社の外にはたえて無き事なるに、九頭龍權現のごときは奇の奇なる事なり。

○大魚

北狄の地、夜國のおき、クルウンランドなどいふ國の海には、鯨夥敷、其中にはかく



べつ大なるありて、蠻人の説を聞たるばかりにてまことしからざる物ありといふに、余もまのあたり親しく東海の人に聞くに、東蝦夷の海に、おきなといふ魚あり。其大さ二里三里にも及べるにや、つひに其魚の全身を見たる人はなし。春は此魚南に出て、秋よりは北へ歸る。蝦夷の獵船は毎度出逢事なりとぞ。其魚きたる時は、海底雷のごとく鳴りて、風無きに波浪起り、鯨東西に逃走る。かくの如くなる時は、すはおきな來りたりとて獵船も早々に逃歸る事なり。稀に海上に浮たるを見るに、大なる島いくつも出來たるごとくなり。是おきなの中尾鰭などの少しづつみゆるなりとぞ。二十尋三十尋の鯨を吞事、鯨の鰭を吞がごとなるゆる、此魚來れば鯨東西に逃走るなり。誠に東蝦夷の海は、即日本奥州の東海にして、東の方へは數萬里の間に國なく、世界第一の大海なれば、かくのごとき大魚も生ずるなるべし。二里三里五里にも及ぶ大魚ありとは信じがたきやうなれども、又あるまじともいふべからず。唐土などは海に遠き國ゆるに、昔の文人學者など二十尋三十尋の鯨南海にある事をいと怪しみ、不思議に思ひたるやうなり。海に遠く住るゆるなり。日本などは四方に海近き國なるゆるに、小兒といへども鯨あることを怪しむ事なし。されば數萬里打開きたる大海には、かくべつの大魚ある事も

鄒衍一支那  
戰國の末頃  
の人、以爲  
らく儒者の  
所謂中國は  
天下に於て  
は十分一の  
み中國名づ  
けて赤縣神  
州といふ中  
國外赤縣神  
州の如きも  
の九あり  
と、其の書  
今は傳はら  
す  
くるゝの穴  
一くるゝの  
穴、訛

怪しむべからず。莊子の鯤、鵬などは寓言にて、莊子も實にありとは思はれず。鄒衍が赤縣神州の如きもの九ツ有りといひしも虚妄の空誕と云しかど、今蠻國の圖を見れば、唐土などのごとき國十も二十もありて、九ツなどは數ならず。此おきな有る時は鯤も大なりとするに足らず。實に文物開けし御代に生れ逢たるはありがたき事なり。

○塔影

信州諏訪明神には、世俗に七不思議ありといふ。其七ふしぎの一ツに、上諏訪の塔の影下諏訪明神の拜殿にうつるといふ。余も彼地にて色々尋ね見しかど、え見附ずして歸れり。虚説にやと思ひ居しが、其後天明五年乙巳秋、京都東寺の塔の影大宮の民家にうつると沙汰せしかば、朋友四五人かたらひて行てみしに、丹羽又右衛門といふ百姓の家なり。折しも其日は少し小雨降て鬱陶しく、殊に夕暮に及びて、けふは影はうつるまじきやと思ひながら其家に入りて、影見たきよしを頼しに、此頃人々大勢見物に來り給ひていと迷惑なれど、餘義なき御頼なれば見せ申べしといひて、入口の戸を閉ぢ、其外家内の雨戸をさし、内を暗くせしに、入口の戸のくるゝの穴の七八分ばかりなるより塔の影